
いちばんうしろの大魔王
ACT8
水城正太郎

HJ BUNKO


いちばんうしろの
大魔王
ACT8


「一番最初から語らなくてはなりません」
加寿子が口を開いた。


「魔王とは、人間であって、
人間でないものです」


「ちぃ！」
2Vはマナ球を複数個、身体の周囲に展開し、これを操ろうと手を動かした。
「おおおお！」

いちばんうしろの大魔王
ACT 8

水城正太郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次


登場人物紹介
はっとりじゅんこ
服部絢子
阿九斗に想いを寄せる一途で純情なクラス委員長。阿九斗の発言に動揺を隠しきれない。
さいあくと
紗伊阿九斗
将来「魔王」になると(再び?)予言された「善良な」主人公。初代魔王ゼロの復活にどう出るのか?
えとうふじこ
江藤不二子
阿九斗に忠誠を誓う黒魔術師にして薬物使い。魔獣ケルベロスに騎乗する。
そが
曽我けーな
阿九斗に懐いている天然少女。お米が大好き。果たしてその正体は……?
みわひろし
三輪寛
阿九斗の弟分を名乗るトラブルメイカー。勇者ブレイブという顔も持つ。
ころね
阿九斗の監視と護衛を行なう人造人間。しかしゼロと2Vによりコントロールを奪われてしまう。


木多淑恵（きたよしえ）
2Vに騙され、ゼロ復活の一因を作ってしまう。阿九斗のことを気に入り、その後は協力する。
リリィ白石（しらいし）
コンスタン魔術学院生徒会長。帽子がトレードマーク。喧嘩っ早く「小さい」と言われると切れてしまう。
2V（ツーブイ）
内閣魔術情報調査室、CIMO8の一人。ゼロを甦らせて、その力を操ることに成功する。
けいす
ゼロと共に仮想空間内にいた小柄な少女。ゼロに対する何らかのカギを握っているようだが？

この帝国において、皇帝は何の権限もない。

帝都の中心部にある森の中に建てられた壮麗な宮殿に住み、国のために祈ることのみが仕事である。

それでも皇帝は国民から愛され、現在の女帝、加寿子は特に人々から慕われていた。特殊な処置を施されて若[illegible]

なその少女の美麗な見た目を保ちながら、その立ち振る舞いは円熟の域に達しており、口を開けば知性と年月を感じさせる言葉が常にほほ[illegible]

みをたたえた口からあふれ出すという有り様だった。

故に、皇帝には政治的な権限こそないものの、何の影響力もないとは決していえなかった。彼女が口を開[illegible]

ば国民が動いてしまう。そのため彼女の公の場での発言は当たり障りのないものに限られてきた。そして、

の[illegible]人目につかぬよう十分な配慮が行われてきたのである。

結果、皇帝には、いくつもの秘密があった。それは些細なことから重大なことまで様々あったが、中でも[illegible]

ものは、一般の国民はもちろんのこと、政府の人間にすら報されていなかった。今その秘密を知っている[illegible]

ものは、近衛師団[illegible]、ただ一人の少女のみである。

その秘密とは、皇帝に、双子の姉が存在すること。そして、それを知る少女は、もちろんその姉本人のことだっ

た。

皇家には、不思議な習慣がいくつもある。そのうちのひとつが、双子が産まれたならば、その姉から継承

を奪い、妹の代わりとして、誰にも知れぬように育てるべし、というものだ。皇位を継承する者は、その

しきたりを忠実に守り、皇居の奥に隠された離宮の別邸で、姉を育てたのだった。

彼女には名前が与えられなかった。彼女には妹の名前があるからだ。

「私には名前が無いの？　でも、あの子は？」

玩具に与えられた人形を抱きながら、彼女は皇居の中の明るい庭を眺めていた。そこには自分と同じ顔の少女がいて、楽

いない机の前に座り、教師から読み書きを教えられていた。

「あのお方は、妹様です」

少女の問いに、教師は淡々とそう答えた。

「でも、どうして私はあの子に話しかけちゃいけないの？」

「そういうことになっているからです」

「でも、どうして私はあの子みたいに勉強しちゃいけないの？」

「あのお方の勉強したことは、すぐにあなたにも覚えていただきます。ただし、それは機会によって

にできますので、苦労して覚える必要はありません」

「ふうん。それじゃあ、私は楽にできるんだ。あの子は大変ね」

そう言って少女は笑ったが、その後、成長して様々なことが理解できるようになってくると、自分の置かれた状

がいかに不公平なものかを自覚させられてしまうことになった。

彼女は人間の女性としての自分の記憶を頭に流し込まれ、自分が人間であることを少しも疑わずに過ごしていたが、それでも
の自分の情報を外から眺めることしかできない女性として、自分とは別に存在していた。それは誰も体験したことのない奇妙な
だった。

自分が誰なのか、彼女はまったくわからなくなっていた。

さらに、彼女はごく少数の関係者以外の人と交流を持つことを禁じられていた。彼女は自分の周囲にある、誰からも隠された秘密の存在から
抜け出そうとすると、どんなときでも周囲の人間が見つけて連れ戻すのだった。

彼女が人間と話したことはなかったが、世界中の研究者たちの記憶を様々な人と交流を持った。そして、その記憶だけが彼女に植え付けられた
の研究者たちや科学者たちのことを彼女はよく知っていたが、彼らは誰一人として少女のことを知らないのだった。

彼女は、自分が誰なのかを説明してくれる相手を持たなかった。周囲の人たちはその点ではまるで慰めにはならなか
った。彼はその質問に対して的確に答えることはできなかったからだ。

それでも、彼女は狂うこともできなかった。自殺することもできなかった。最高の医療が細部にまで与えられていたから
だ。精神は薬物の投与によって行われ、体内のそのほとんどを人工物と同じように、かなりの部分を改造されてしまってい
た。

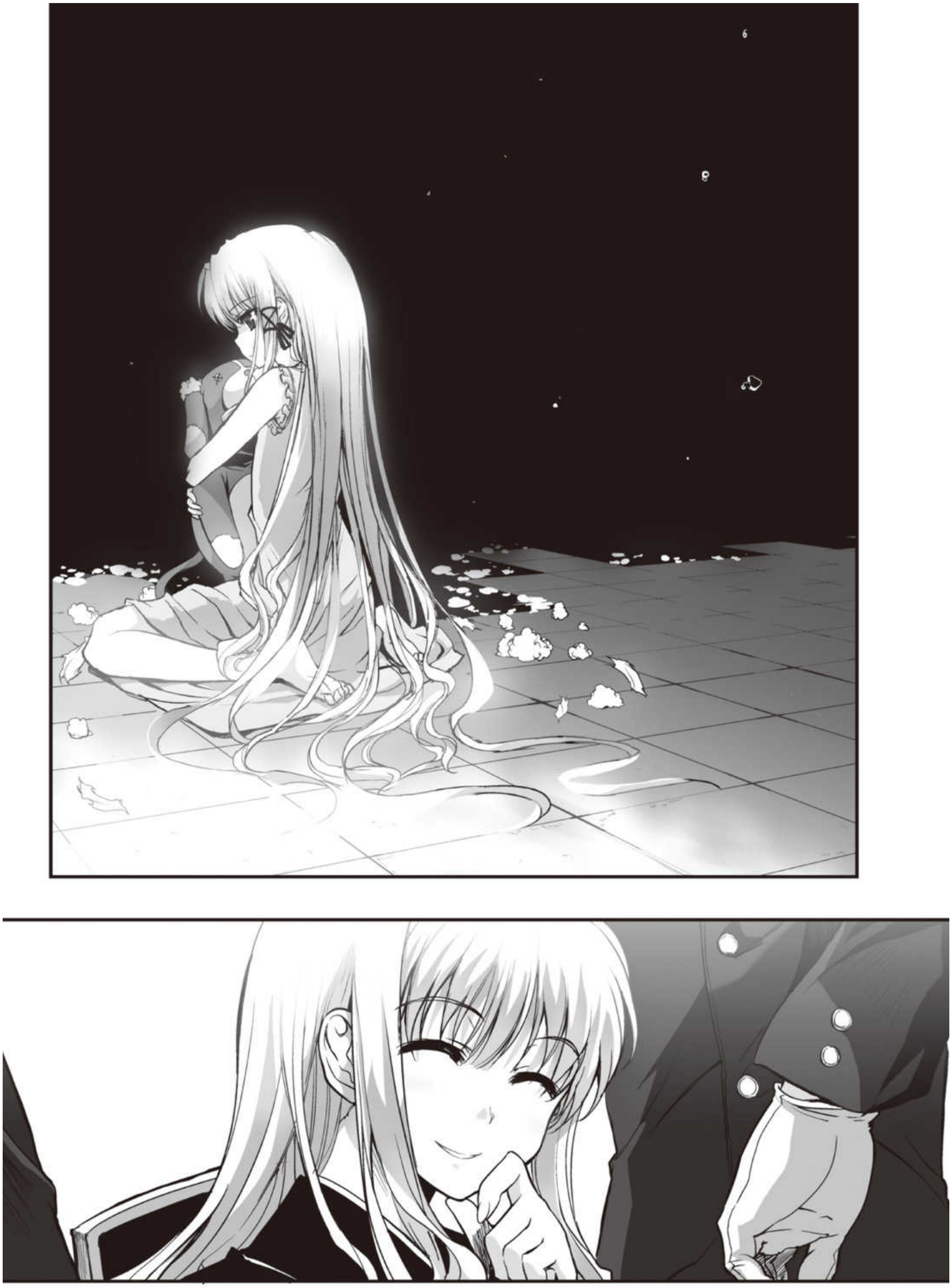
そんな生活にあきれるほどに長く続き、やがて、彼女は自分が誰なのかを考えるのをやめてしまった。

誰からも見向きされない、陰の存在
の光、存在としての人間の極小

そんなことを理屈（りくつ）で考えるのではなく、無意識にして体の一部が取り込んでしまうことを選択（せんたく）したのだ。

そうすると彼女は自分を人間だとは思わなくなった。自分自身が幽霊（ゆうれい）のようなものだと感じるようになっていったのである。

誰にも知られず、世界を上空から眺めている存在として、ただ感情のない観察のみを行い、データのみをその頭に詰め込



しかし、そんな生活に転機が訪れたのは、魔術の修行をするようになってからだった。万事に
伴い、彼女の魔術を修行するようになると、師匠としての彼女も魔術を修得することになったのだが、その彼女の性格は違
い、習得できる魔術は明らかに違いとして表れていた。不知火はほとんどの魔術をいとも簡単に習得していったが、彼女はそれほどの才能を発揮することはなかった。ただし、この国ではほぼ誰も習得できなかった大規模かついわくつきの魔術である、〈対象〉の意識に憑依だけには奇妙なほどの上達ぶりを見せた。それは師匠としての才覚であったせいなのかもしれなかった。

その特異な魔術の才能を磨くことに彼女は熱中し、やがてその特異性故それが凄まじい力を持つことを悟っていった。意識のない人間を遠隔操作することが可能であり、対象が人ならば、意識があるはずの人間ですらコントロールできることに気づいたのだ。

彼女を監視している者は周囲に誰もいない。つまり、彼女はもはや自由に外へ出ることが可能になったのだった。

そのことに気づいた彼女は驚喜し、この生活にどのように終止符を打つのがふさわしいか考え始めたのだが、ものの数分、その考えは嘘のようにさめてしまった。

少女は何もするべきことがなかったからだ。

誰でもない者、人間ですらない者は、名前を与えられることはない。そして、人形は周囲に依存することによって誰でもなれる彼女は、本来のものの人格を表に出して他人に向い合うことはすでに不可能だった。

そんな彼女の思いに変化が訪れたのは、外界の人形の世界を探索していた彼女が、奇妙な男を見つけたからだった。その男は退屈なデ
がなかった。彼女は何者もなかったのだ。それでも彼女は奇妙なほど情報を纏めており、いかなる手段を使ったの

か[illegible]トップに座っていた。

彼女が彼に接触（せっしょく）を図（はか）ったのは、その[illegible]を持ったからでなく、彼が[illegible]を持ったからだ。

男は大和（やまと）望一郎（ぼういちろう）と名乗った。

彼女は自分の境遇（きょうぐう）を素直（すなお）に語った。一郎は[illegible]それに真摯（しんし）に応（こた）えてくれた。

彼女は、その日から外に出ることに決めた。[illegible]所属することにし、隠れ場所（ばしょ）を[illegible]からマンションへと移った。

その時から、彼は彼女の[illegible]を持った。

それは2V（ツーブイ）と言った。

1　新しい〈[illegible]〉

[illegible]ら生徒たちが[illegible]帰った〈[illegible]〉コンスタン[illegible]の[illegible]ただけ[illegible]中であった。紗阿久刀(さいあくと)が監視員(かんしいん)として派遣(はけん)されていた

はずの[illegible]であるころねが、いきなり[illegible]発砲(はっぽう)したからである。

彼女が[illegible]携帯(けいたい)しているポシェットから出した[illegible]から発せられる細いレーザーは、触(ふ)れれば[illegible]断できるほど

のものだ。つまり、そこには[illegible]があった。

まして、[illegible]傷ついていた。[illegible]できない[illegible]ゼロによって攻撃(こうげき)されたことで瀕死(ひんし)の[illegible]

ったのだ。そこを[illegible]たのだから、これは、ころねのよくやる悪い冗談(じょうだん)の類(たぐい)ではありえ

なかった。

その場にいた生徒たちは、突然(とつぜん)のことに呆然(ぼうぜん)としていた。誰がころねの[illegible]は気づいていたが、

その[illegible]ころねだけにとどまらないことも明らかだった。遠くに見える〈街〉ところどころから

黒煙(こくえん)が上がっている。

「〈街〉はすべての[illegible]コントロールを失ったらしいぞ……」

〈[illegible]〉が[illegible]に表示されたニュースを[illegible]見つ[illegible]ぶやいた。

「それじゃあ……」

〈[illegible]〉が口々ころねに[illegible]れる。皆(みな)、そろそろところねから離(はな)れ始めた。

ころねは自動拳銃を構えたまま、生徒たちが左右に分かれて作った道をゆっくりと歩き出した。その先には、横たわる

おり、その身体に寄り添っている曽我部など、江藤不二子の一人が驚きの表情を浮かべていた。

「な、なんですの……？」

「や、やめてよ、ころねちゃん……」

しかし、その言葉はころねに届いた様子はなかった。ころねは自動拳銃の銃口を同人誌に据えたまま、前進し続ける。

「関係ない人を殺すことはできません。おどきください」

けなが同人誌の身体に覆い被さるようにしていたことが、ころねの発砲を抑止していたものらしい。

その言葉を聞いて、不二子が表情を硬くした。

「……どうやら、彼女はコントロールを失っておかしくなったわけではありませんわね」

「じゃあ、もしかして、誰かがころねちゃんを操って……？」

けながつぶやいた。

しかし、誰もそれに答える者はいなかった。

ころねは無言のまま不二子たちに歩み寄り、一人を見下ろすと足を止めた。

「ね、ねえ、もし話ができるのなら、どうしてこんなことをするのか教えてよ……」

けなが声を震わせながらそう言った。

すると、ころねは自動拳銃をポシェットにしまい込んだ。

一瞬、けなは顔をほころばせる。

「よ、よかった……」

が、次の瞬間ころねはこう言った。

「現在、魔王を排除するためにこのようなことをしています」

けんなは絶句した。

そして、ころねはポシェットから細長い棒状のものを取り出す。

子分たちはそれを見て恐怖に顔を強ばらせた。それは戦闘用の武器であることはすぐにわかった。剣のよ

の一部が棒になったような形状をしている。

「スタンスティックです。抵抗者はこれによって殺すことなく排除できます。抵抗する必要はありません

ころねがスタンスティックを手でなでると、そこに電流がはしった。

「どちらにせよやるしかない……というわけですわね」

子分たちの額に汗が流れる。既に先ほど[illegible]、遊びとはいえ手合わせをしてきた子分たちである。ころねが本気になったなら

ではとてもかなわない行動をすることは身にしみてわかっていた。

「これは、さすがに危ないかもしれませんわね……」

まさしく絶体絶命ともいえる状況だった。この状況でころねに抵抗しようと考える生徒は、子分たちの他にいないだろ

う。この場[illegible]一番あてになりそうなのは、服部絢子だったが、子分たちの視界の端に見えた彼女は、ひど

衝撃を受けた様子で呆然と立ち尽くしていた。

「少しでも隙があれば、なんとかなるかもしれませんが……」

王子は、ころねの挙動に隙を見つけようとしたが、さすがにころねの歩みにはまったく油断がない。
「そこをどかないのなら、排除します」
ころねがスタンスティックを振り上げた。
「だめぇ！」
けながら、飛びつき、身体にしがみついた。王子はここまでか、と目を閉じた。
その瞬間、激しい空気の振動が周囲を襲った。
「……なんですの？」
異変に気づいた王子が顔をあげた。
ころねが動きを止め、小刻みに身体を振動させていた。
「あああああああああああ……」
壊れたレコーダーのような声を発し、その動きを完全に止めている。
何が原因かはわからないが、隙ができたことは間違いない。
「ケルベロス！」
王子が呼ばわった。
その声に応えて、後方から一匹の魔獣が駆けてくる。みっつの頭を持つ巨大な犬の化け物である、以前自分の言うことを聞くように調教して以来、王子が好んで使役している。

その獣が走ってきて、四つ首の身体のひとつめの口で自分の首を放り上げた。四つ首にしがみついて離れなかったけなも一緒に首を持ち上げられている。

五本首ケルベロスの首が飛んで来た。生徒たちが立ち尽くす校庭から離れるべく走り出すと、まだ気が戻っていない絹子が近づき、これもケルベロスに命じて首を持ち上げる。

「ひゃ！」

左右の大口によって首を投げ上げられたことでようやく気を取り直したか、絹子が平静な顔を取り戻して問いかけた。

「……先輩、これから、どうするつもりなんです？」

「逃げるしかありませんわね。まだ状態を把握できませんもの。少なくとも四つ首の魔獣が襲ってきた例の日本の魔界やらのせいで、ころねがおかしくなったのだろう、としか言えませんものね」

五本首ケルベロスをころねから遠ざかるように走らせはじめた。

「ねっ、ねぇ、どこへ逃げるの？ あーちゃんがいくら身体が丈夫でも、しばらくは治るまでにかかっちゃうんじゃあ……」

けなが心配そうな声をあげた。

「仕方ありませんわ。こうなっては異界の魔術師の隠れ里に行くしかありませんわね」

こうなっては、というわりには、最初からそうするつもりだったように平然と言った。

「隠れ里？」

けなが驚きの声をあげた。

「ええ。わたくしが密かに支援していた亜人種たちの住む土地です。少々田舎ですが、それでも隠れ住む者には都合のいい場所ですわ」

と、それを聞いた納戸が抗議するような声をあげる。

「黄泉、それでは、まるで彼が魔王になることを認めているような……」

「そうに決まっているでしょう」

「何を馬鹿なことを」とでもいうように、黄泉は即答した。

納戸は戸惑いを顔に浮かべた。

「いや、それが彼のために良いとは……」

「そんなことを言っていられる状況ではありませんわよ。もし、この国の周辺国すべてで操れているような事態としたら、国が乗っ取られたということ」

そう言われて納戸は返す言葉が見つからないようだった。

「それに対抗できるのは、自国を支配する魔王だけということになりますもの」

にやりとして黄泉は付け加えた。そして、ケルベロスの背後を見やった。

「それに、議論している時間はありませんわ」

ころねが床を滑るように後を追ってくるのが見える。

「く……しかし、いずれにせよ、私の国の勇者を魔王などという場所へ行かせるわけには……」

絢乃は苦しげに一言、気を失っている母親の顔と、後ろを交互に見る。が、最後に母親の顔を見た後、悲しげな顔をすると、意を決した

ようにケルベロスの背中から飛び降りた。

「私もころねを追跡します！」

「……っ、ここではぐれたら隠れ場所を教えられませんわよ⁉」

一方、遠ざかっていく絢乃に呼びかけた。

しかし、絢乃は振り返らなかった。

「早く行ってください！」

絢乃は刀をかざした。

そこに、するり、ところねが近づく。

「やっ！」

短刀と共に、絢乃が打ってかかる。

が、次の瞬間ころねのスタンスティックが、あっという間に絢乃の脇腹に食い込んでいた。高電圧の迸る音が鋭く響く。

「ぐっ！」

絢乃は短く声をあげ、気絶して倒れた。

そのころねの容赦なさに、ケルベロスの背中から見ていたけいなが驚きの声をあげる。

「たとえ不意打ちでも、いつものころねちゃんならここで[illegible]入れるはずなのに……！」

刹那、瞬殺（じゅんさつ）しておきながら、嫌味（いやみ）ひとつも言わず、ころねはケルベロスを追って走ってくる。
その隙にケルベロスの後方へ回っており、ころねはすぐに背後へ迫（せま）ってきた。
「それでも、今度はこちらも少し本気で行きましてよ！」
天子は魔術を使おうと手を振（ふ）るう。
しかし、天子は戸惑って手を止めた。
その手の先には、マナは集束していない。
「な！　魔術が……」
「使えないの？」
情けなくも驚きの声をあげる。
「まさか、神名まで封殺……」
天子が声をあげたとき、ころねが跳（と）び上がった。スタンスティックを突（つ）き出（だ）して空から襲いかかってくる。
「それなら……！」
天子は神名で封印されていない魔術――精霊魔術のコードを使うことに決めた。その瞬間に精神を集中させようとするが、ころねの攻撃速度には、一瞬及（およ）ばぬようだった。
「間に合わない……！」
恐怖に目を閉じた天子だったが、そのとき、再び、あの現象がころねを襲った。

ころねの体が、突然動きはじめ、急に気を失ったようになって空中から落ちる。

「またですの？ 助かりましたけれども……いったい何が……」

ディーネが疑問を口にすると、ケルベロスが走るペースを緩ゆるめた。

「どうしましたの？」

ディーネが前方を見ると、けいなが前方を指差した。

「あそこに、人が……」

けいなの言った通り、学園から離れて丘（おか）に向かったケルベロスの進行方向に、一人の少女が立っていた。左手は紙袋の何かを抱（かか）えている。

「誰（だれ）、ですの？」

思わず身構えるディーネたちだったが、その彼女（かのじょ）は、ディーネたちを知っているかのように左手を振っていた。

「ディーネ様なんだね？ もし迷ってるんだったら、一緒に来てくれない？ 詳しい情報は後で話すからさぁ」

少女は気さくな口調で、そう言った。

当然、ディーネたちは怪訝（けげん）な顔になったが──彼女、木多淑恵（きたよしえ）の次の言葉を発すると、驚きに軽く口を開いた。

「驚いただろうけど、心配じゃないんだよ。[illegible]は、私と淑彦（よしひこ）だったんだ」

「……そういうことでしたのね」

ディーネは納得（なっとく）してうなずき、淑恵とケルベロスに乗せると、彼女が持っていた紙袋のものに目を向ける。淑恵はそこから伸（の）びたコードにつながっているアンテナ状のものを、ころねに向けていた。

「これは、私が使った[illegible]の中のマナを[illegible]させて、障壁を作るためのものなんだけど、ちょっと急で[illegible]て、[illegible]を持たせることにしたんだ」

[illegible]が[illegible]する。

「つまり、そのアンテナを向いている先のマナが[illegible]て、そこにいた人は動けなくなると言いたいわけですのね」

[illegible]と、[illegible]うなずいた。

「そゆこと。[illegible]から[illegible]てないみたいだけど、[illegible]らなんとかなるみたいだから、頼るのはこいつだけってことになるね。でも、少しずつ使わないと[illegible]てしまうから、[illegible]しかできないんだよねぇ……」

[illegible]ぼやいたが、[illegible]い、とほほえんだ。

「それで[illegible]るのなら逃げだせますわ。[illegible]なくとも、[illegible]い[illegible]ありましてよ。わたくしを使いますの」

「ふぉお！ それはいいねぇ。頼むよ」

[illegible]をたたく。[illegible]にやりとした。

「[illegible]言ってくれますわね。けっこう[illegible]すのよ……。[illegible]心闇を[illegible]！」

[illegible]ための[illegible]た[illegible]ら、黒[illegible]オーラがあふれ出[illegible]

いや、オーラと見えたものは、黒いマナだった。周囲のマナが光を屈折させ、視界を遮るように作用して
いるのだ。
そのマナの暗き気が広がりをみせ、周囲数メートルほどを覆った。
「この闇の中に隠れてやり過ごしますわよ」
琴子が満足げに言った。
「すっごいねぇ。感心しちゃうなぁ、お姉さんは」
沙也加が歓声をあげた。
琴子はそちらを見てあきれたように肩をすくめる。
「……あなた、学園で会っていたときとずいぶん性格違いますのね」
「いやぁ、ロールプレイってやつ？　あのときは乙女ゲーに出てくる男の子っぽくしてみただけなん
だけどねぇ」
「乙女ゲー……って、あの登場人物がプレイヤーを構ってくれるあれですの？」
「お？　おねいさん、いけるクチ？」
「……そうじゃありませんわよ。そうね、あのゲームの作者が考えれば、あなた、そっちの家の人達
ってますわよねぇ……。って、そんなことはいいんですのよ。状況を観ていただき
ましょうか」
琴子がそう言った。

○

「私たちが逃亡を図った頃、合衆国の地上帝都の秘密都市で走っていた。リリィ白石の襲撃から逃れた2Vが

CIM08メンバーに手配してもらったものである。

その車両を運転した者をあげたのは、運転席に座った男である。

「双子」

落ち着いた印象のある中年の男で、眼鏡をかけて研究者のような衣服を着ている。その外見からして、余程のことがない

はそのような声をあげる印象もないのだが、彼が聞かされたのは、その双子のことだった。

「そうだよ。私は、加寿子と双子だ」

2Vはにやにやしながら言った。血色の悪いやせこけた少女という外見であるが、その話が本当ならば、彼女は

年齢であるはずだ。だが、どうやら嘘をついているわけでも、彼女の頭がおかしくなってしま

ったわけでもないらしい。2Vの顔は血色も良くし、ふくよかにしさえすれば、女帝である

き写しなのだと、運転席の男――賢人は気づいた。

そういえば実際から2Vの本当の顔を見たのは初めてなのだった。

「それは誰も知らないことなのか？」

「大公女たち以外はね。それと、近衛隊くらいは知っているかもなぁ。私が宮殿に帰ってこないようにね。ともかく、ほとんどの人は知らないはずさ。私をとりあげた医者たちは、記憶を消されたはずだよ。迷惑な話だな。まったく」

独り言のように2Vは言った。

「家督の継承争いが起きないように、か？」

「いや。どうやらそういう決まり事があるらしい。姉妹の一人は影武者として育てなければならない。というのはそういうものなのだそうだよ。それで私は、北で鍛えられ、このような能力を得たというわけさ。今はもういない。CIM08のリーダーにスカウトされ、逃げ出るまでは。お国のために尽していたのさ。あはは……」

2Vは声を上げて笑った。

「最初の人員、ゼロを甦らせた目的はそれか」

鷹揚に頷いて言って、その意外な一面を見た。その意外な一面を見る余裕は、今の私達にはただ中であった。ビルの窓の隙間から煙が上がっている。爆発物で落ちた跡であろう。地上の道路の端で事故を起こしているのがいくつも確認できた。

現在の戦闘時すべてのコントロールを失うというのはこういうことなのだった、現代の車の運転はじまりのかなりの部分を自動運転が担っている。その細かい作業などはどれほど起こっているか想像もつかなかった。

「ゼロは自動運転のすべてをコントロールできるからね。私の能力はぴったりのパートナーというわけさ。ま、経済的にも部分的なもので、コントロールは取り戻したよ。ということは、今後これが広がらないとい

ことになる」

「俺が君の種族の道具に、ゼロの器を用意してやったのは、混乱を収めるためだ。改めて問うが、ゼロとは何

だ？」

「月の狼人間の道具として、月の狼人間の魔王ということなんだそうだ。道具というか、代用品な。人類の命を管理するために作られたものだ」

「……神よりも先、か」

魔王はつぶやいた。人類を管理する代用品という意味では、現状の神と同じということになる。

「人類が不幸を回避するという目的を持って動き出したゼロは、どういうわけか人類の絶滅という結論に至ったのだそ

うだ」

「どうしてそんなことに？」

「本人へインタビューできるようになったんだから、本人に聞いておくさ。今は忙しいところだから

しばらく先になるけれどもね。ともあれ、ゼロの目的を阻止するために急遽、神が作られ、月の狼人間と魔王の戦争が始まったわけ

さ」

「魔王と神の、月の狼人間の戦争はそういうものだったのか」

「道具と人間の、魔術の戦いになったわけだ。戦い自体それほどの規模もなかっただろうけれど、ともか

く、ゼロは封印された」

「封印されたのはいいが……なぜ、壊れなかった？」

「そいつがキモなんだな。これが、簡単に言うと、ゼロが彼の思考の中枢(ちゅうすう)なんだ。ゼロを失うと、彼

はおそらく存在できなくなる」

「実は、すべての発端(ほったん)がゼロ、というわけか」

「過去の来歴でもある。つまり、ゼロが実はこの会社の基礎(きそ)だったというわけさ。しかし、それでも過去は

よ。だから、私はそれを操ることができる。つまり、私は現在この世界において、最強の存在ということにな

るかな。いや、申し訳ないね。最強と言えばCIMO8のコードネームUSDというのが私たちの間の最強

ったというのにね」

2Vが顔をくしゃりとさせて笑

賢人そ、そのコードネームUSDである。だが、賢人その存在は情報で起動された存在ではなく、人間の記憶の置き去りの直前とっ

た

「つまり、君は、私が起すわけだ」

「いや、成り代わるんだよ。私は、これからは無力な皇帝(こうてい)がどんな政治をするか見ているといいんじゃな

いかな」

ちら、と賢人2Vを見やった。その人間の最後の目は、絶望に似た光があった。

「君が既に取り憑かれているタイプじゃないのは知ってる。どうしてそんなことをするんだ？」

2Vはそれを否定しない。少女の目を見返してから、口(くち)の端(は)だけでにたりと笑った。

「ここでつまらないことを答えれば君が落胆することになるってわけだね。でも、君は私がやることと
をおもしろがってくれるとわかってるんだな。これが、私にはね、私の人生の全部が狂(くる)っていることな
したいんだ。素敵(すてき)な冗談だろう?」
実に美しい作り笑み(え)が、頬(ほお)のこけた少女の顔(ば)に貼りついていた。生気のない目とあいまって、彼こそが狂っているので
はないかとも思えたが、その表情は本当は実に抑制(よくせい)されたものだった。
黒髪の美人は目を軽く開けて、閉じた。その表情は、驚(おどろ)いたということらしかった。
「この世界のすべての閉じた人間?」
「そうだとも。この世界のすべての閉じた人間たちね。私は幸福になれば、ひとことかふたことで彼を狂わせてみ
せるさ。だが、それこそが世界の人々を救ってくれると信じているんだよ。すべての虚飾(きょしょく)をはぎ
ろうじゃないか。いかに自分たちが暴虐(ぼうぎゃく)を望んでいるのか知らしめてやりたいのさ」
声をあげて２Vは笑った。
「そうか。そういうことなら協力できないが、俺は君のことを見ていることにしよう。そこまで
の面倒を見てやるほどのことなら、やってみればいいさ。君がどう判断するのか、他の人生の誰が判断するのか、楽
みにしているとするよ」
黒髪美人もそう言って、車を止めた。
ドアを開けると、そこは前の日の公園の入り口だった。２Vが外に出ると、街の人の閉じた人間がずらりと並んでいた。その
が、毎日毎日働いていた閉じた人たちである。男も女も、五歳以上の人間が、人格を失くし、整然と新しい一本、２Vを迎(むか)えたのだ。

帝都の中心にありながら無法地帯なその土地にある壮麗な宮殿が今は2Vのものになったということだった。

「宰相——犯人の男のことは捕えたかな？」

2Vは側近の一人に聞いた。

「いいえ。宰相はご不在でした」

側近の男は答えた。

「つまり、彼は逃げたってことでいいのかな？」

「はい。しかし、宰相と部下数人です。宮殿内、その他の者は拘束しております」

「ふうん。じゃあ、私が宮殿に入っても、宰相がまた帰ってきたと思うかもな。ま、状況からすれば、怪しいと思

ていても私の物とするしかないだろうけどね。彼にとっちゃあさ」

あざ笑ってから2Vは宮殿の内部を見回した。

そこには宝石や装飾品が広がっていた。

天井は二十メートルもあろうか、天井近くに角度のあるエッジをいくつも備えた巨大な水晶が浮かんでいた。大きさは直径二メートルはあ

ろう。色は、透明なのか、何色なのかわからないが、ぬめっとしたような質感の表面に周囲の風景が反射して、直視しきれぬほ

どのくらい強い光を放っている。

それがゼロの本体だ。

「宰相の野郎、随分と魔力を集めて収めた神の依り代か。贅沢なものを造ってくれたね」

2Vは後ろを振り返って、左手を振った。

賢人は軽く手をあげてそれに答えてから手を出した。

残された2Vは囚人たちの作る列の横を歩きながら、ゼロを再び見上げた。

今や2Vは、ゼロを従えていた。そのようなことが可能だったのは、彼が獲得した人格から伝えられた魔術だった。この世界でただ一人使えたあの術、彼に絶対的な力を与えてくれたのだ。

そして、2Vは声は出さず心の中で、しかし高らかにゼロに命令を下した。

その瞬間、玉座の間の空中に突然、巨大な映像が浮かび上がった。そこには一人の男の姿が映し出されていた。

もちろん、それは本物の男ではない。ゼロの作り出した映像だ。だが、その姿形や声、物の言い方に違うことはない。ただし、その男が2Vの言葉をしゃべる。

「このたびの事件は非常に悲しく思います……」

男は話し始めた。

その映像は、帝国全土に配信されている。

まずは今回の事件、2Vは真のゼロの仕業と宣言、ゼロの正体、そしてその能力まで説明した。その上で、ゼロに逆らうべきではないと国民の説得にかかった。

、現在神はその機能を停止している。つまり、帝国は誰も魔術を使ってはいない。帝国のすべてもゼロに支配された。ここはおとなしく従うべきだ、というのだ。

これは帝国の事実上の降伏であるといえた。

その宣言を終えると、2Vは今度はゼロの声を発することにした。低く重い、恐ろしげな男の声を帝国全土に響かせる。

「神は死んだ。しかし、問題はない。旧式の神などは捨てよ。人造人間たちが、私の手足となって、国のために奉仕するだろう。そして、それによって、私は、皆を永遠の幸福の下へ導いて行けるだろう。私こそが、新しい神」

ゼロ＝２Ｖは宣言した。

２Ｖは、笑い声とともに、画面の中の扉をくぐった。

この瞬間、帝国は、２Ｖの手に落ちた。

。

帝国が崩壊してから一週間。その間もちろん大きな混乱はあったのだが、それでも人々は早くも新しい生活に慣れつつあった。

あらゆる事業は人造人間の手で運営され、神を祀っていた教会は解体された。貴族たちは職を失った。騎士たちは人造人間の王の下に再編成され、その命令で動くことになった。企業のほとんどすべてが人造人間の管理下に置かれた。もちろん、職人達も失業した。

しかし、職を失っても、それが生きていくことの困難に直結するというわけではなかった。生活に必要な物資の生産はほとんどは人造人間によって行われていたため。それによって、人間の労働は行う必要がなくなっていたからである。分け前は、黙っていても与えられるのだ。

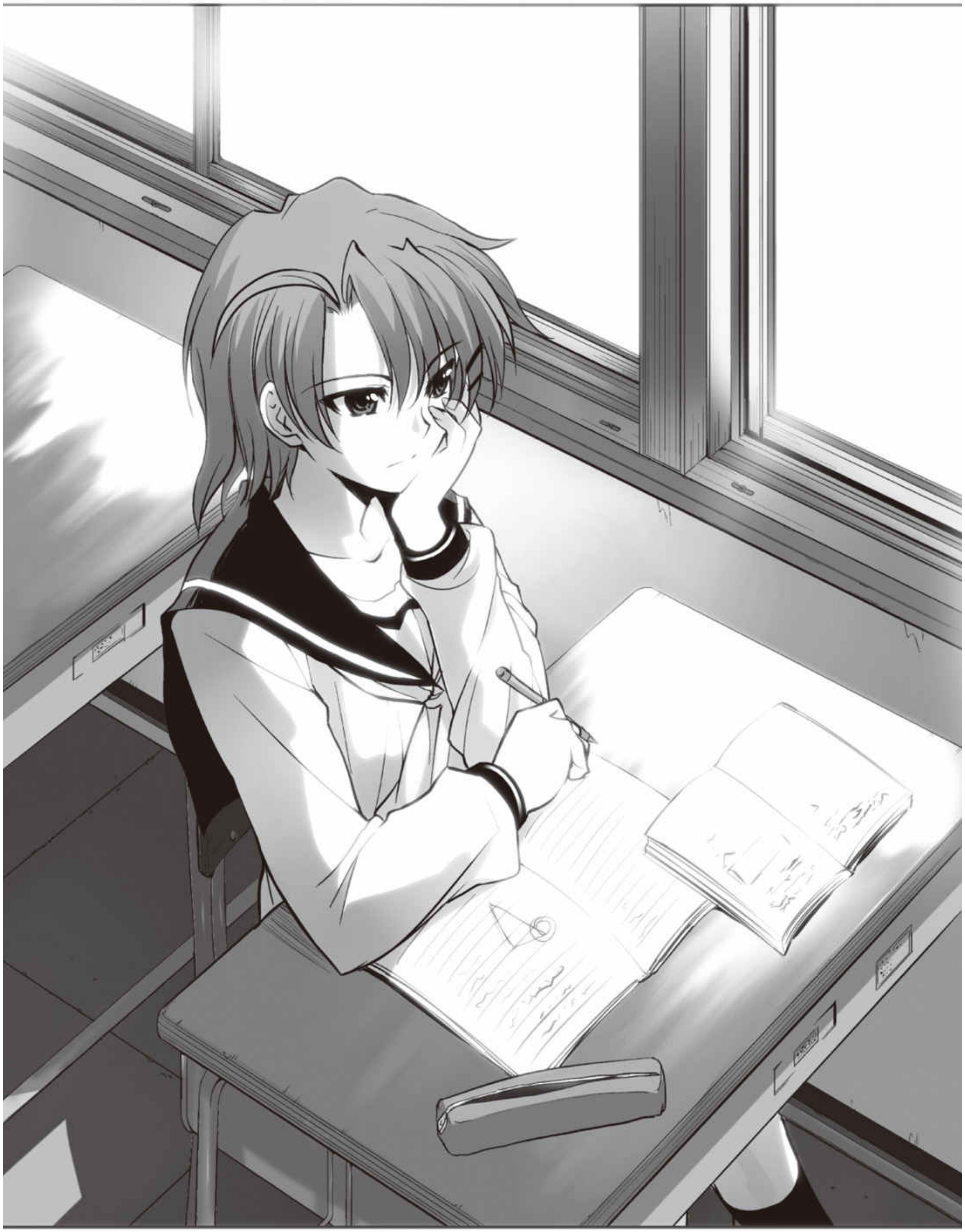
――それが、こんなにも空しいものだとは……。

それでも、教室の片隅に座った私は、そうぼんやりと考える。

『コンスタンツ魔法学院』は解体された。生徒たちは希望者のみ他の魔法学院へ編入させられた。ほとんどの生徒が編入を選択したが、彼が
まらぬように別々の学院へばらばらに配置されることになった。
[illegible]人、見慣れぬ生徒たちの中にあって、普通の生活を送っていた。

──普通

自ら考えたことを疑問に思う。いや、生徒はこれが普通だと思ったらしい。自分で動くなんとなく授業を受け、将来の仕
をせぬために、社会の仕組みを理解する。だが、生徒自身が身につけることを強制されるのは、授業をおとなしく座
るという忍耐力だ。おとなしくしているということは何より大事なのである。まして、こ
二週間到来した社会では、平和すると周囲の人間で、有無を言わせず運んでくれかねないものである。ますます何も考えない
スキルが重要となるのだった。
しかし、周囲の生徒たちはそもそも魔術を専攻していた生徒ではない。そんな社会をどうやら歓迎してい
すらある。



「昨日の夜、みょーちゃんが使ってたギター買っちゃったよ」
「うわ、ちょー馬鹿。踊らされすぎじゃね？」
「いーんだよ。弾けるようになったらモテるんだよ」
「二週間弾いたが、才能ないからそれも無理やね？」
「感性とかあるんだよ。女が泣けるギターを弾けるからいいんだよ」
休憩時間中に男子生徒たちのそんな会話が聞こえてくる。虚しい。勉強というのは社会的な人間関係しか残されていないことを
しているというのに。それがモテるという一時期しか通用できないことを思い知らされて愕然
するような内容もある。しかも話している本人たちはそんなことを微塵も思っていないのだ。
――この先、ずっとこんなことを繰り返すだけ……。そんなこと誰だってわかる。
高校を卒業しても働く場所もなく、ただ酒と恋愛に浸るだけの生活になるのは目に見えていた。以降の連絡もとれて
いないが、その家族の両親はスハラの日常化に任せて見放され、ほぼ軟禁状態であるらしい。自分の部屋から出ることもなく、寮と高校を往復するだけの
が始まりつつあった。
「暗い顔しているね。ね、放課後にパフェ食べに行かない？」
話しかけてきたのは、ところねだった。
以前はそれが信じられないほどの明るい話しぶりである。顔も綺麗であった。制服は着崩しており、まる
でどこにでもいる普通の少女のような態度だった。
「……いや、いい」

綺羽が硬い表情で答えた。

まだ違和感がぬぐえずにいた。ころねは今ではクラスの人気者であり、明るく楽しいクラスのムードづくりに一役買っていた。

「そんなんじゃモテないよっ。せっかく、かわいい顔してるんだからさぁ」

冗談めかして言うころねである。

これまで何度もころねのその態度を、昔のそれに戻すように話してみたが、まるでらちがあかなかった。今では綺羽の方がクラスでは変わり者である。

「いや、母と妹と会う約束があるんだ。だけど、そんなことはどうでもいい。それより、昔のころねに戻って……」

「昔？　ころねはころねだよ？　それに、あんまり変なことばっかり言ってると、捕まっちゃうんじゃない？　なんか、秘密組織に捕まってる人、いっぱいいるんだから」

そう言ってころねは、待っている友達のところに足早に戻っていった。その去り際の、存在が、悪の組織ほど薄気味の悪いものだったのを綺羽は見逃さなかった。

確かに、週刊誌の取材に抵抗している人がいるらしいとの噂はあった。自分の組織がネットで周囲の不満を募る書き込みを見たことがある。だが、それも日を経ずに消えてしまったが。

——もしかしたら、事態は思ったよりひどいことになっているのかもしれない。

綺羽は漠然とした不安を抱いていた。

そして、放課後に待ち合わせをした場所に向かう。[illegible]
妹のゆう子は、いわゆるアイドルとして芸能界で働いていた。一般に顔が知れているから、今も帽子をかぶっていたが、そんなことよりも驚いたのは、彼女の横にもう一人誰かが一緒にいたことだ。
「ヒロシ！」
絢は驚いて声を上げた。
三輪ヒロシがばつが悪そうな顔で挨拶の手をあげていた。
「いやぁ、少し間が開いてしまって。なんか照れるっすねぇ」
「あの騒動の時いなかったじゃないか。今までどこにいたんだ？」
「お姉ちゃん、わたしと同じ学校に編入されてきたんだよ」
ヒロシのかわりにゆう子が説明した。ゆう子は嬉しそうだ。
――そういえば、妙に仲が良かったものな。
絢はそんな二人を見て、妙に納得した気分になった。
「いいけど、誰かに見られたらまずいんじゃないの？」
絢がやや茶化すような意味を込めて言うと、ゆう子はふっと笑ったが、ヒロシはひどく慌てた。
「ちょ、ちょっと、勘弁してくださいよ。[illegible]」
「あはは、ヒロシ君、大丈夫だよ。気にしなくても。わたしそういうの気にしないもん」
「少しは気にした方がいいぞ」

あきれて純菜が言った。

「そ、そうっすよね。失礼なんすから」

ヒロシはまだどぎまぎした態度だ。

「いや、気にすることないかもよ。最近、ちょっと異常におかしくなってるから」

ゆう子が口をとがらせた。

「そうなの？」

「うん。なんか不安みたいなものはあるよ。なんて言ったらいいのかなぁ、ホントに面白（おもしろ）
ない気がするよ。話すことも簡単に決められちゃうし、歌っ歌ちゃいけないものが増えてきて、選ばなくち
ゃいけなくなったしさぁ……」

ゆう子がぼやき始めると、ヒロシが慌てて二人の背中を押（お）す。

「ほ、ほら、どこかに入りましょう。立ち話なんですから……」

そこで適当に見つけた喫茶店（きっさてん）に入り、純菜とゆう子は今日の待ち合わせの本来の話をすることにした。周囲のことを話すために
まったのだ。

「それで、お父さんたちは大丈夫なの？」

さすがに純菜も声を潜（ひそ）めた。

「うん。さすがに何もされていないみたい。だけど、しばらくは表立つのは駄目（だめ）っぽいよ。そ
の……」

ゆう子がそう言った時、料理が運ばれてきて、紗綾たちは口をつぐんだ。ウェイトレスはもちろん周囲に

ちらとこちらの顔をうかがうように見ることが、紗綾は気になった。あるいは神経が過敏になって

いるだけなのかもしれなかったが。

「本当のところ、どのくらいのものなんだ？」

紗綾がつぶやいた。

「どのくらいの？」

ゆう子が問い返す。

「つまり……どのくらいのところまで踏み込んだら……噂されているみたいに捕まっちゃうん

だろう？」

その紗綾の言葉に、ヒロシは深刻な顔になったが、ゆう子は軽く笑った。

「あはは、大丈夫よ。だって、お父さんたちが今のところ大丈夫なんでしょ？　そりゃ、どうってこと

ないって」

「う……うむ……」

紗綾はそう言ったが、どこかにひっかかるものを感じていた。

ものの一週間ほどにしかならないが、それでも、嫌な雰囲気だけは街に広がっている。人間的な感覚は使っていなかっ

ただ人々は、あまり強くそれを感じることができないのかもしれないが、確かに存在する。そして甘さは

していると しか思えない。

しかし、それより不可解なのは、大人が平然と暮らしていることだ。ゆう子だってそうなのだ。不便な生活を強いられるよ
うな状態でありながら、要するに「それほど悪いことにはならないだろう」なんて言っているのだ
から。

「でも、自由と権利が失われている。何かが奪われたのに、その奪った相手の慈悲を期待するようなことは間違っているんじゃないか?」

冴子が言った。

と、ヒロシがすぐさま言葉をかぶせてくる。

「ほら、でも、自由が増えたとも言えるんじゃないんすか? だって、あいつらはもう神と
る制約なく、自由に行動していいわけですから。魔法を使うのだって、重すぎる負担だったと言えるわけっすよ。
の授業なんかだって、あいつらからすれば、真面目にやらなくても構わないレベルじゃないっ
すか。そうしたら、快楽を楽しんでいっぱいで遊ぶためだけの場所っすよ」

ヒロシがひきつった笑みで言う。

「だが、そんな仕方のないことでいいのか? それに、私やゆう子は、いつ危険な目に遭うかわからない
というのに、そんなことで……」

食い下がる冴子に、ヒロシは宥めるように手を振った。

「いやいや、危険なことなんてありませんよ」

ゆう子もヒロシに便乗する。

「大丈夫だって。そんなことになったら、ヒロシ君が守ってくれるから」
わざとらしくヒロシの腕にすがりつくゆう子である。
ヒロシは顔を赤くして首を振った。
「いやいや、自分はそんな力はないっすから。危ないことはしないでくださいよ」
そんな二人を見て、ほほえましさを感じるよりも、わずかにいらだつ自分に気づいて、綾は少し自己嫌悪に陥った。
――まだ二週間前のことなのに。
まだ二週間しか経っていないのに、異形騎士との戦いが遠い昔のことのように思えてくる。渦中にあるときは一刻も早く過ぎ去ってほしいと感じていた命懸けの戦い、感情の爆発が懐かしく、甘美なものになっていることに気づいた。
――そのすべてをあいつが運んできたんだったな。
和也のことを思い出す。
傷ついた彼を見捨てて逃げなかったのは、もしかしたら生涯悔やまれることなのかもしれなかった。もし二度と会えないとしたら。
――だけど、あいつは私のことなんて……。
異形騎士と彼女を殺しあうように和也からすすめられたことがショックだったことは自分でもわかっていた。認めたくはなかったが、そのことがケルベロスの背中から飛び降りた理由

――それこそ石にかじりついてでも一緒にいるべきだったんじゃないのか？
そう思うと頭を抱えてうめきたくなってくる。
「お姉ちゃん、大丈夫？」
ゆうの子が不安気に訊いてくれた。
「いや、なんでもない。ただ、危機感は持った方がいいぞ」
紬は咳払いをして首を振った。
「もう、わかったから。連絡を欠かさないようにしようね」
ゆうはそういって紅茶を飲み干し、ヒロシに顔を向けた。
「この後、暇あるでしょ？　ねっ、つきあってほしいところがあるんだけど」
「ああ、わかったっすよ。それほど遅くならなければ」
「何？　子供じゃないんだから。そっちは実家じゃないから、遠く離れたアパートで一人暮らしなんでしょ？」
「いや、そうなんすけど、ちょっと四時から用事が……」
「わかったよ。じゃあ、そんなに遅くならないようにすればいいのね」
ヒロシとゆうはすでに自分たちだけの世界に入ってしまっていた。紬はいたたまれなさを感じて座っている椅子を鳴らした。
「じゃあ、出ようか」
「ああ、そうしよう。またなんかあったらすぐに言うから。お姉ちゃんもわたしが困ったら相談に乗ってくれるよね？」

ゆうはそう言った。

楽しげなゆうと、困っているヒロシたちと別れて、自宅へ戻った。締め切ったほとんど何もない部屋で一人椅子に座り込んだ。

配信されているネット番組程度か、娯楽はない。ネットでのチャットによって交流を持つことはできる

が、対面で直接話を持てる相手ということになると、それはかつて魔法を使うことができた者ということに限られ

る。政治的な話になってしまえば、弾圧されてしまう結果を招くだけだろう。

ニュースショーをぼんやり見るともなく見ていると、普段なら正気を保っていられなくなるような感覚に襲

われてきた。明らかに嘘偽りも報道番組の内容となっているのだ。特に事件は報道されず、ただ食べ物やスポーツの娯楽番組のみだ

らだらと流れている。あるいは本当に事件が起こっていないのかもしれなかった。国内の事件は

綺麗には作られず、人間はまるで見分けのつかない者たちもおり、その彼らが事件の発生を未然に防いだり、事件を即座に取

りおさえるなどしている、という情報だけは何度も告げられていた。それが本当なら、人々は常に監視されてい

ることになる。

――ずっと見ているとおかしくなりそうだ。

結局ニュースを見るのをやめたが、そうなると静かな部屋で座っていることが耐え難くなってくる。

――誰かと、素直に心を割って話したくなる……な。

人恋しいということか、とも思うが、結局のところ、そうしたい相手というのは

ことなのだ。

――やはり、彼女についていけなかったことを悔やんでいる……のだな、私は。

別れ際に本人が言ったとおり、もう会えないかもしれない。
そんなことを考えて、黙って座っていると、妙に顔がむずがゆくなってきた。ふと、左手をあてて
と、指が濡れていた。
――気がつかなかった……。泣いていたんだ……。
誰も見ていないのに、凄まじい気恥ずかしさが襲ってきた。
――そんなにあいつのことを想っていたのか。
そして、同時に情けなさが込み上げてきて、胸の奥にわだかまる。
――それなら、素直になればいいじゃないか。どうしてそれができないんだ、結局いつも
で空回りして……。
結局、これ以上会わぬように、先を見た。
――もう、これで、全部終わってしまったのか……？

○

家族がいない、学園に編入されたため、学校から紹介されたアパートに住むことになったヒロシだったが、結局ゆう子付く
たことで、今日はやや遅くなって帰ると、自室の奥から鋭い目でヒロシを見据えてきた少女の姿があった。

者が低い身分っぽい家系であるが、その代わり情報伝達を命じられることに慣れている者だ。それで、今この瞬間も帰ってきたヒロシに浴びせたのは罵声だった。

「遅い！無事であったかと思ったぞ。行動は慎重さを持って臨め」

伝達役はリリィ一人である。

2Vに逃亡された後、襲ってくる兵士たちをヒロシの力を借りて撃退することはできたが、神の従者を人質にとったゼロの仲間の逃亡隠匿を余儀なくされたのである。しかし幸い、ヒロシが大和望一郎の与えたスーツの力を取り戻していることは知られていない。スーツのマナキャンセラーが兵士たちがゼロへと伝わる情報を遮断してくれたためだ。そこでリリィはヒロシのアパートに潜伏することにしたのだ。

「しかし、仕方ないじゃないっすか。こっちにも生活があるんですから」

ヒロシはぼやき、玄関の扉を閉めて明かりをつけるや、ぎょっとして動きを止めた。

リリィは、半裸の姿で、あぐらをかいて玄関の奥に座っていた。さすがにあられもない姿過ぎて、ヒロシは慌てて目をそらす。

「ちょ、隊長、困るっすよ。そんな格好」

「騒ぐんじゃないよ。まったく。服を洗っている最中なんだよ。馬鹿野郎」

リリィはぼやく。しかし、ヒロシを男と見ていないらしく、恥じらいのようなものは感じられない。

「だったら、あっしの服を着ていてくださいよ」
「キミの服なんざ着れるか。美意識にかかわる」
「裸(はだか)でいるのは美意識的にいいんですか？」
「自分の裸体(らたい)を自分の美意識的によしとできないとしたら、鍛(きた)え方(かた)が足りないと考えるべきだね」
そう言うリリィの身体をちらっと見て、ヒロシは首をかしげた。
「でも、太ってはいないけれど、女性らしくないような……」
と、それを聞いたリリィの目がキランと光った。
座ったまま右手を前に突(つ)き出し、しばらくそのままの姿勢でいたが、ふと気づいたように立ち上がった。
「いかんなぁ、魔術(まじゅつ)が使えたときの感覚のままで動いちまう」
そしてリリィは歩いてヒロシの前に立ち、背伸(の)びをして、ヒロシの顔を両手でむんずとつかん
だ。
「あいたたたた……」
「ええい、やかましい。生まれつきの体格にあった体形を維持(いじ)するっていうのはあるんだよ」
「わかった、わかったっすから」
「まったく。ボクだって、どうせなら男らしい男と同棲(どうせい)したかったところだ」
リリィはぼやいてヒロシから離(はな)れる。
「アニキみたいな？」

ヒロシが自分の顔をもみながら言う。もちろん、それは比喩的なことである。

リリィは片頬をつり上げてにやりとした。

「ふん、いずれぶっ殺したくなる相手そういうことになるってのは、割といいかもしんないわえ」

体格の割に大人っぽいことを言うリリィである。

ヒロシが返答に困っていると、リリィは「ともかく」と話を変えた。

「今はキミしかあてにできないからな。男らしくしてもらわないと困るんだ」

ヒロシは表情を引き締めた。

「わかってるっすよ。今や魔法は使えない。そうなると、あっしのスーツしか戦闘力はないんでしょう?」

「そういうこと。なんだかんだで連絡係もキミにしてもらうしかないからな。ボクがに出られない以上さ」

リリィはそう言って、ハンディコンピューターをヒロシに向かって突き出した。

「それで、2Vの案件どうなったんだ?」

ヒロシはコンピューターに自分の携帯からデータを転送する。

「あっしが調べられることには限界があるっすけど、会長とお父さんの本部からこっそりデータはもらったっす。やっぱり降伏宣言、皇帝陛下は精神操作じゃなく、合成された映像のようです」

「って、ことは、やっぱり今の王子様の顔が微妙に変わったって噂は本当なのか。ありゃあ、間違いなく血色が良な
った2Vだものな」
リリィはまだ信じられない、というように言った。
「だけど、２Vがゼロの力を使ったとはいえ、あっさり宮殿を乗っ取れたのは王子の血縁関係があるか
ら、なんでしょう。いろいろとつじつまが合うっすよ」
ヒロシが言った。
リリィが腕組した。
「そうなんだよな。ただ、そうなると、相手方が問題になってくる。ボクが2Vなら、考えることと
は、王子殺害の容疑者。ボクたちの殺害容疑者が……。どうも相手方が鈍い」
「そうっすよね。もっと早くトラブルに巻き込まれると思ってたんっすけど……。王子様はすでに殺され
ているかもしんないっすけど、そうなったら、なおさら、２Vの顔を見ている人を早く見つけよ
うとするはずなのに……」
「やっているのは、王子殺害の結果、魔術師をつぶしていくことだけだ。２Vが狙っているのは、王子の死て
ことになる」
「わかんないっすよねぇ……」
ヒロシも考え込んでしまう。

「だが、こちらには結界術がある。何に悩もうと、2Vを殺せば、問題のほとんどは解決する。そのときはキミが切り札だ。仲間たちとともに、敵の拠点を襲撃する手筈はこちらでしっかり練っておくから、ばっちり結界術を頼んだぞ」

リリィはヒロシの肩をたたく。

ヒロシは困ったように肩をすくめた。

「そりゃ、魔族の2Vを殺したい、だけでしょうに。もっと可愛げってもんがあっても……」

そうヒロシがぼやくと、リリィはとても可愛いと言えないどころか、歴戦の猛者すらおびえそう

な笑みを見せた。

「可愛げなんぞ、必要なときにはボクだって見せられるさ。だが、ボクの魅力を理解……あまつさえボクの

ある程度の力を持った人、アルヌールを操っているような相手が、のうのうと生きているってときに、そんな腑抜け

た顔をしている暇はないってこった」

ヒロシは思わず後ろに身を引いた。

「わ、わかったっすから。可愛げとは言わないっすけど、四六時中して、家に威圧感を常に与えるのだけは

してほしいんっすけど……」

「やかましい。そんなことをしたら、キミはボクの寝床に忍んでくるに決まってる」

リリィは断言した。

「って、言うけど、あっしの寝具、本来は魔族が使っているので……。その別の寝床に忍び込みたいっすよ……これか

ら寒くなるし……」

ヒロシはぼやいた。

「わかった。それなら、タオルケットを一枚被ろう。かけるんじゃなくて二つ折りにして腹巻とかいぞ」

妙に含有りげに言うリリィである。

「……たとえ[illegible]なくても、女の子の理想ってものにはもっと夢があると思っていたのに……」

落ち込むヒロシだったが、リリィはそんなことを意に介さなかった。

「やかましいわ。[illegible]作れないならコンビニで買ってこい。一人分とばれるから、二人分なんて買ってくるなよ」

2　配れる山中

「山ってのも楽しいもんだねぇ。アウトドアって私はあわないんじゃないかと思ってたけど、RPGみたいなもんだと考えると、意外とオタクの趣味（しゅみ）よね」

淑恵（よしえ）が嬉しそうに言った。

「あー、確かにゲームっぽいよね。情報を集めて、道具をときに使ったり、場合によっては必要なものを作るために拾ったものを加工したり組み立てたり」

けなも気楽に声をあげる。

「あなたたち、もうちょっと緊迫感（きんぱく）というものをですねぇ」

不二子（ふじこ）がぼやいた。

山に入って二日が経過している。不二子の記憶（きおく）している伝説の村でケルベロスと一緒に移動していくということになると、どうしても四日の山越（やまご）えが必要なのだった。

越える途中（とちゅう）、まだ人間たちの街が遠くないのをいいことにキャンプ用品や物資を買いそろえ、さらに不二子の魔法で生……るアドバンテージを活（い）かして、諸々（もろもろ）の痕跡（こんせき）を消しての逃避行である。

その間、話す時間だけはたっぷりあったので、淑恵は不二子から情報を聞いていた。

しかし、互いの情報を交換したところで、ゼロの秘密についてはわからなかった。連れの阿加寿子の
だけは見抜けたが、把握しているのはそれだけで、情報不足は否めない。ただし、おそらく2V以外は彼
女たちだけが気にしていたのは、けいすの存在である。

「たぶん、二重人格であるけいすが、鍵なんだと思うんだよね」

「あの男の魔王であるゼロを、封印できるのは、[illegible]言い出した、あのちんまい二重人格けいすだけだとおっしゃるのね？」

「うん。ゼロとしても、それにこだわるはずなんだよね」

「そうなると、わたくしたちを追うと同時に、けいすを捜すはずですわね」

「私たちが先にけいすを見つけられればいいんだけど、どこにいるか、だよねぇ」

「[illegible]に入り込んだわけですものねぇ。どこに失踪したのやら」

そんなことを話し合い、この逃避の旅の目的は、阿久斗の回復とけいすの捜索に決まった、というのが現状だった。

未だ阿久斗は気を失ったままだ。普通なら死んでいるような怪我。[illegible]ない状態の阿久斗を、どこかで休ませないと、傷は塞がらないだろう。

「しかし……ゼロが阿久斗を殺そうとしているのは、どうしてなんでしょうね。ゼロが男の魔王と[illegible]たら、結局魔王は何なのかがわからなくなってきますし」

二手が首をひねる。

「人類の敵ってやばい部分だけ見ているのかもしれないよねぇ。あんまり考えたくないけどさ。以前おねいさんたちに聞いた話だと、人類を進化させるための一時的な死を与える存在なんだよね？　ちょっと面白い、いい感じなんだけど」

悠太は軽い調子で言う。一子は段々把握してきたが、悠太は陽気なマッドサイエンティストそのままの性格をしているのだ。一子的にはただのオタクということになるのだが。

「ゼロがやっていることはまるで逆ですわね。でも、どちらにせよ、輪廻転生、そんな運命を振り切っての進化を行うとされていますわ。だから、天敵ですわよ」

一子はそう言った。と、悠太の目が輝く。

「ふぉお！　いいねぇ！　その人類の意志すべてを切り開って感じ。魔王って呼ばれているのに、人類の

なろうとしてるって？　うぉお！　静まれ、俺の中の魔王の血！　とか、そういう風に悩んだよね

え。わくわくするなぁ」

気楽な調子で言う悠太に、一子はげんなりした顔になる。

「あ、あの、そこまで自分の世界に入れても困りますわ……」

悠太は照れたように頭をかく。

「いやぁ、マニアなもんでねぇ。どうにもこういうの好きなんだよね、ね。私たちの旅行も

つけたくなっちゃったりしてるわけよ。〝凍てつく炎の乙女〟かどうかなぁ？　いいと

うんだけど」

なんのてらいもなく言い放った恵に、千冬は衝撃を受けた。

——ここの人センスが狂ってしまっていますわ！

「いやぁ、その魔王のに被せて、矛盾が凍てつく炎って感じでいいわけよ。ほら、おねいさん久し

で、けっこうな自信作だから」

恵はまだ上機嫌で言う。

千冬は頭を抱えた。

しかし、それにけいなが乗っかった。

「いいね！　そうだよ、あたしたちに足りないのはそれだよ！」

「いいや、足りてます。足りてますわよ。ほら、ほら、ともかく、明日になったら、早うちに到

着しますから、今日はおとなしく休むのがいいと思いますわよ」

千冬はそう言ったが、それからしばらく恵とけいなは盛り上がり続けた。

なんとか眠りについた千冬だったが、その会話を聞かされたことがたたったのか、寝ている間

妙な単語がうずまく夢にうなされることになった。

——うう……。

灼熱、紅蓮の王、生贄、孤独、疾風、狂気、アークエンジェル、永遠の光……。

そんな風に散々な前途も感じられたが、翌日とにもかくにも一行が到着した村で、千冬の顔を知っていたこともあ

り、快く彼女を受け入れてくれた。いや、むしろ千冬の顔を見た村人たちは、下にも置かぬ歓待をしたと言ってい

い。

「いやぁ、まさか魔王城の人が顔を見せるとは思っていなかった」

村人たちは口々に言った。

この村は人口も少なく、農業の地で隔絶された田舎であることは間違いないのだが、住民の年齢はまちまちだった。そのことがここが魔王城の村なのだと印象付けてくれる。過疎になった村というだけなら、若年層は好んでは残らないからだ。何かの仕事があっての人員構成なのだ。

村長の家に逗留することになった王子たちは、まずは[illegible]を布団に寝かせ、それからお茶とお菓子をもらい、人心地つく。

村長は中年の、穏やかな男だ。妻と小さな子と、大きな家屋を構えていた。

「いよいよ大変なことになってしまったね」

村長はそう言って、端末に配信されているニュース映像を見せてくれた。街で反乱が起こっているなどということはまるで映されていない。事件の何もないということは、情報が統制されているか、完全に遮断されているということだ。

「自由の死滅ですわね」

王子が真面目な顔でつぶやいた。

村長はうなずく。

「我々のように魔王様の統治を長く支持してきた者にとっては、許し難いことだよ。状況が後退してしまった」

「おそらく、[illegible]しかないのですが、[illegible]れたところで、わたくしたちにはどうしたらいいのか[illegible]ありませんの。、[illegible]お知恵を貸してくださいませんか？」

[illegible]言と、村長はしばらく考えた後、難しいな、というように首を振った。

「私[illegible]ちの正体は詳しい方が、[illegible]封じる[illegible]んてものは聞いたことがない」

「では[illegible]ちの[illegible]の違いは何なんですか？」

「それもわからないよ。少なくとも江藤[illegible]知っているものと思っていたし」

「わたくしが？」

「いや、[illegible]すべてを知っているものだと[illegible]思っていたからね」

「いえ……、[illegible]詳しいことを知らないんですわよ。わかっているのは、[illegible]の[illegible]けで……」

[illegible]落胆した。これでは[illegible]何もわからないまま逃げ続けないといけないことになる。

「力になれなくてすまないね。だけど、もう[illegible]もう一度生まれた地へ戻っているものだと思ったものだから」

[illegible]顔をあげる。

「え？ 生まれた地？ どういうことですの？」

すると、村長は不思議そうに眉をあげた。

「いや、有名な話じゃないか。[illegible]生まれた地から逃げだし、孤児として一般人の中に紛れたんだよ。だから、生まれた地でいろいろな啓示を受けたものだと……」

「しかし、魔王様は生まれた地をご存じない、とおっしゃってましたわ」

「そういうことなら困ったね。誰もそれは知らないんだ。でも、何かその手がかりがあればいいんだけど……」

「探してみることにしますわ。魔王様がお目覚めになったらお話を聞けると思いますし」

「そうだね。ゆっくりしていってくれ。ここは魔王様のセンサーから隠されているし、ここの出生の記録の神は、嘘が伝わってきたんだ。だからもちろん安全だよ」

「助かりますわ」

天子は頭を下げた。

村長はそこで話を切り上げ、天子に入浴をすすめた。一日の移動で汗をかき汚れていた天子はこれを喜び、村長の奥さんの持ってきてくれたタオルを持って風呂場へ行こうとするが、ふと衣玖が足を止めた。

「そうだ、私たちより先に、奥さんの身体を拭いてあげたいんですが」

と衣玖は言うと、奥さんは気がかずに申し訳ない、と言って、お湯を張ったタライとタオルとを用意してくれた。

「あら、でも、あなたたちだけで大丈夫？　誰か男性を呼ぼうかしら」

奥さんがそう聞くと、天子は、大丈夫ですとうなずいたが、それより大きな声で衣玖が答える。

「大丈夫ですわ。わたくし、いつも魔王様のおそばに仕えておりますもの」

そう言うと、奥さんは納得して下がったが、衣玖は横目で天子をにらんだ。

「え？　おそばに仕えているようには見えなかったけど？」
「ふん。わたくしたちの絆を知らない方には言われたくないですわ」
天子がにらみ返す。
[illegible]は咳払いをした。
「ま、そうだとしても、私が言い出したんだから、私の部屋で身体を拭くことでいいよね？」
それに、ぎらり、と天子が目を光らせる。
「なぁにが『いいよね』ですの。わたくしがお部屋でお世話するに決まっているでしょうに！」
「いやいや、決まってないから。あ、あれだ。なんかイヤらしいことするつもりでしょ？」
[illegible]と言うと、天子の顔面を立て、ネズミの一匹ぐらいなら卒倒させられそうな目つきになった。
「ちょっと、聞き捨てなりませんわね。わたくしはお部屋でお見舞いのときに不便のないように考えて……」
「だから、それを言い出したのが私なんだってば」
[illegible]タライを挟んでにらみ合う。
「あなたこそ、それをイヤらしい目的で言い出したんじゃなくって？」
「いやいや、そんなことないよ。ただ、私が身体を拭いてあげたら、天にも昇ったような気持ちになるんじゃないかって思っただけ。いわゆるヘヴン状態みたいな感じ」
「それがイヤらしい気持ちだって言ってますのよ！」
「いやいや、そんなことないってば」

「ええい、言い争ってもらちがあきませんわ。もう、こうなったらわたくしがさっさと千子の体を拭いて差し上げます！」

タライのお湯にタオルをひたし、固く絞って握ると、隣室へのふすまを開けようとする千子である。

「いや、そんな勝手にやってもらっちゃ困るよお。やるのは私なんだから」

沙織が千子のスカートの裾をつかんだ。千子が「ひぃ！」と短い悲鳴をあげて、畳に倒れ込む。

「な、なにをしますの！」

千子は俯せからなんとか顔を後ろに向ける。スカートが脱げて、膝のあたりまで落ちていた。しかもお尻を高く突き上げた恥ずかしい格好。それに気づいた千子は、珍しく顔を赤くして、もぞもぞとスカートの位置を直そうとするが、ホックが外れていた。

「ばっ、馬鹿、なんてことを……」

「いや、ごめんごめん。なんというか、そんな格好や、男の子の前に出しにくいよね。私が代わってやってあげるから」

沙織は、ひょいと千子の手から絞ったタオルをつまみあげた。

「きぃっ！　そうはいきませんわよ！」

タオルを取り戻そうと千子は[illegible]かみかかる。

「うわっ、ちゃ！」

沙織も引き込まれて、畳に転がった。

「ええい、ざまを見るといいのですわ！　さぁ、このふすまを開ければ、そこはわたくしと[illegible]だけの夢の世界」

はいずってでも前に行こうとする天子を、鬼姫は再度首根っこをつかんで引き戻した。

「そんな風に行かせるわけないっしょ」

「ええい！　放しなさい！」

天子はじたばたと暴れる。

「わかったけど、それならせめて天人で一緒に挙式とかでもいいからさ」

天子をなんとか押さえ込んだ鬼姫は懐柔策を口にするが、天子は首を横に振った。

「一緒にするとか、そんなことありえませんわよ！」

「え？　いいじゃんさぁ。天人でやったほうが楽しいよ、きっと」

「駄目ですわ！　そんな変態じみたことできませんわよ！」

「変態って……。我慢してるだけでしょ？」

「わからない子ですわね！　わたくしと[illegible]だけの素敵なあんなことやこんなことが……」

「ほら、やっぱりイヤらしいことを考えてるんじゃないか」

「そうだとしてもあなたに言われる筋合いはありませんわよ！　それに、あなたなんかに任せたら、[illegible]の体を傷つける結果になるだけですわ！　実際に触ったことがなさそうですものね、あなた」

その下手な挑発に、彼女は少し気分を害されたように頬をふくらませた。
「実際に触ったことがなくても、シミュレーションしていればうまくできるってば。じゃあ、ちょっと実践してみせちゃおっかな」
彼女は下半身を改めて押えつけた。
「ちょ、何を……」
「うまく身体を拭ることを実践しようって言ったじゃん。ほら、おねいさんもキャンプで汗に汚れてるよね」
彼女は絞ったタオルを下半身のシャツの下に潜り込ませた。
「ひゃ！　こ、こら、放しなさいな……」
「拭いてあげてるだけだよぉ」
「だからって、こら！　その行動は何すの？」
「何すのって言われても、拭いているだけですって。強くこするの駄目なんでしょ？　肌を傷ける
から。赤くならないよぉに、こぅ、するするっと……」
「ひゃん！」
「ほら、できるでしょ。私だって……。にひひ……」
彼女は含み笑いを漏らす。
頬を上気させた下半身、身もだえして逃れようとしたが、彼女はしっかりと足を絡めて放さない。

「わ、わかったから、わかりましたから、お放しになって……」
「駄目よぉ。だって、拭いてみてわかったけど、おねいさんもやっぱり汚れてるもん。先に拭いて
あげる」
「だ、だから、くすぐったい……。ひゃ！ ほ、ホックを外すまですることないでしょう
に……！」
「だって、こうしないと拭きにくいよぉ？ 一番ビンカンなところ拭くんだから、丁寧に優しく
しないとぉ……」
「ひぃ！ そ、そこは[illegible]駄目ですわ……！ あぁっ！ そんな……！」
[illegible]下半身を身もだえする[illegible]、逃げようとさらにもがくが、その[illegible]絶妙な手つきで[illegible]を這い回る。[illegible]
を紅潮させて、汗を流しながら、思わず声を漏らす。[illegible]どことなく息を荒くしながら、[illegible]を楽しんでいた
のだが……。
「あちゃん、よかった！ 気がついたね」
[illegible]けなの声に、[illegible]が顔をあげる。
と、ふすまは開いていて、[illegible]が身を起こした、半裸の[illegible]、けなに抱きつかれていた。
「あ……、[illegible]てたら……。どうしてこうなったのかなぁ？」
「どうして、じゃありませんわよ！ あなたが原因でしょうに！」
[illegible]、呆然として[illegible]しがみつくけなを見めた。

。

「さらに一週間……。人生とは早いものだな」

ヒロシに買わせた男女兼用のシャツとパンツを身につけたリリィは、缶詰のオイルサーディン

を食べながら、端末に開いたデータを見つめた。

「こっちはヘトヘトっすよ。いくらあっしのスーツにマナキャンセラーがあるからって、自

れたらおしまいなんすから。あんまり無理に働かせないでほしいっす」

ヒロシはぼやく。

リリィが居候してから、さらに一週間が過ぎている。ヒロシが足手まといになって、異界の最深部への潜入は一時中断を余儀なく

でいるが、その分、働いているヒロシの負担はかなりのものになっている。

「悪いとは思っているさ。だが、実際に体力を奪われてみると、思ったよりも戦闘は難しいものだとわか

る。なるべくなら最短距離で2Vとキミとの契約を最後まで片付けにしたいんだ」

リリィは言った。

ヒロシとしても、事情はわかっているので従わざるを得ないが、だからといって疲労がとれる

わけではない。

「わかってるんすけど、やっぱいろいろつらいっすねぇ……」

「耐(た)えてもらうしかないな。これが重要なことなのは、キミもわかっているだろう？　防御の準
り戻すためには、こうするしかない。もう少しだ。キミが働いてくれれば、もう少しで兵装
う。魔術準拠(まじゅつじゅんきょ)でない、自分の武器を持った冒険者たちが周囲にいる。幸い、西の国の警備もとくに厚いわけではない。騒(そう)
が起これば、騎士(きし)たちも向かっていくのは間違(まちが)いないのだしな。その体制が整ったら、思いっきり動ける。そ
までは我慢(がまん)だよ」

リリィは、諭(さと)すように言った。

「ええ……わかっちゃいるんですが……」

ヒロシは愚痴(ぐち)るようにつぶやく。

このところの状況(じょうきょう)は、以前よりも明確に悪くなってきている。それはもちろん、２Ｖの行ってい
る締め付けによることに間違いないのだが、ヒロシを疲(つか)れさせているのは、むしろそんな中にあって
誰(だれ)もがそれなりに楽しく日々を送っているという事実だった。

「みんなが割と普通に生活しているから、考えちゃうんですよね。いろいろ、あっしらのしようとして
いることは、誰も望んでいないんじゃないか、とか。もしかしたら、間違ってるのはあっしらじ
ゃないのか、なんて」

「それこそ権力者の望んでいることだよ。どれほど締(し)め付(つ)けて奪っても、人々を生き延びさせなければ、キミのよ
うな反応を示(し)す者も出てくるからね。支配される側の方が数は多いに決まっているんだが、それでも少数による支配が成立して
しまうのは、暴力の差というよりは、個人の連帯の欠如(けつじょ)という理由が大きいものだよ」

「難しい話をされても困りますよ」
ヒロシは口をとがらせた。
「そう言われても、こっちだって困ってもんさね。簡単には言いようがないからな」
リリィは肩をすくめた。
もうひとつヒロシの心を悩ませていた問題。ゆう子のことだった。これぱかりはリリィに
するわけにはいかない。
「ね、今度遊びに行っていいでしょ？」
四日目、喫茶店で久しぶりにゆう子とお茶を楽しんでいたヒロシだったが、そう切り出されて、どう答
たものか困り果ててしまった。
「い、いや……その……」
しどろもどろになってしまう。
もちろん、ゆう子が家に来たいというのは嬉しい。来る気になってくれただけで嬉しいに決まってい
る。
「ほら、ここのところヒロシ君、早く家に帰っちゃうでしょ？ それに、なんかアルバイトも
忙しいからって、なかなか会える機会がないし。せっかくわたしの仕事が減ってるのに、そんな
のってつまんないでしょ？ だから、泊まってもいいでしょ？ 夜からゆっくりお話き
るしさ」

ゆう子は「お願い」と手を合せて小首をかしげる仕草をする。アイドルのゆう子がそんな芝居がかった仕草をすると、強烈に心が揺さぶられる。可愛いである。ヒロシも、もちろんくらくらきていたのだが、当然のごとく彼女に来てもらっては困る理由がある。

「と、お断り？」

つい裏返った声をあげてしまう。

「もう、イヤらしいなぁ。[illegible]ぞ。そんな期待しちゃ」

ゆう子はヒロシの額をつつく。

「ははは……いやだなぁ、そんなんじゃないっすよ」

ヒロシは困り果てて頭をかく。

——先輩はどこに隠れればいいんだろう……。いや、あの先輩がおとなしくしているはずがないし……。それなら、ゆう子ちゃんにも秘密を話して仲間に入ってもらえばいいのか……。いや、それだとゆう子ちゃんに迷惑がかかるし……。それに口が堅いかどうかもわからないな。そうだ、そもそも先輩と一緒に居て、あの人の性格を知らなければ、何かあったと疑われるに決まってるよ……。

「あっ、困ってるな。大丈夫だよ。エッチな本か[illegible]タとかあさったりしないから」

にやにやするゆう子である。

「あはは……。で、でも、それを片付ける時間がほしいなー、なんて」

「ん、どうしよっかな。だいたい、夏彦にガールフレンドがいながら、そういうのを隠し持てるって、いけないことだよ？」

女の子は、だいたいがエロ物の所有と彼女がいることとの間は何の関係もないのだということを認識してくれないものだが、今はそんなことをぼやいている場合はない。

「そ、そういうことでもないんですよ。え、えっと、必ず、必ず来てもらうから、母親に返す、掃除したりするどころか、リフォームまでしちゃうっす。客用の布団ないし」

ヒロシは手をばたばたさせながら弁解する。

ゆう子はいたずらっぽく笑う。

「布団ひとつの方が都合いいとか思ったりしてない？」

「い、いや……ちょっと思ったりなんかして」

「じゃあさ、[illegible]がいいじゃない」

ゆう子はかなり積極的だ。

ヒロシとしても、非常に迷うところで、なんとかしなければいけないとは思うが、ゆう子のわずかに熱を帯びた目といたずらっぽい表情に勝てるはずもなく、ついに口をついて出てきた本音、このようなものだった。

「わ、わかったから……。でも、母親に返す、ちょっと時間をください……」

妙（みょう）に丁寧語（ていねいご）になってしまっていたヒロシである。

それから、ゆう子と別れ、リリィに頼まれていた仕事に向かう。誰にも見られていないのを確認してから
ブレイブのスーツをまとうと、一気に上空へ駆け上がって、雲の中に姿を隠し、それから目的地を確かめ、そちらに
かって降下する。今回の仕事は、異世界の武器の密輸を阻止することだった。
沖に停泊している船から、人知れず異世界の武器を持ちだす仕事である。外国から買い上げた、マナに依存しない武器
を通さずに運ぶのである。スーツの能力からすれば簡単な仕事だが、それなりに集中してやらなくてはいけな
い仕事なので、とても疲れる。
船に潜伏する者たちにこっそりと武器を配り終わった頃には夜になっていた。
アパートに戻って、ドアを開けると、リリィが毎度のように報告を求めてきた。
「うまくいったか？」
「大丈夫です。武器は全部配ってきました」
ヒロシはうなずく。
「おお、よくやったな。ひとまず仕事は一段落、あとはタイミングを見計るだけだ」
それを聞いたリリィは上機嫌になる。ヒロシに歩み寄って頭を抱えるようにすると、頭部を手でぐりぐりと
撫で始めた。
「よしよしよし」
これまでそんな風にされたことはないヒロシは、照れくささを感じたが、それよりも顔面に
が押しつけられていることに気づいて、思わず息をのんだ。

その頃はすっかり慣れてしまっていて気にしていなかったのだが、リリィは裸に薄手のTシャツを一枚羽織っただけの格好。そうされると、嫌でも胸を意識させられてしまう。

「ちょ、……会長。離れてください。その、胸が……いくら小さいとはいえ……」

そう言われて、さすがのリリィもはっとして手を離すかと思いきや、ヒロシの顔をさらに胸に押しつけた。

「ああ？　小さいたぁどういう了見？　キミ、死にたい？　今すぐ胸で窒息させれば、そんなこと言えなくなるよねぇ？」

「いや、すんません！　そういう意味じゃないっす！」

「じゃあどういう意味なんだよ！」

リリィはヒロシを押し倒してその上にまたがり、頭をぐりぐりとやる。

「いたたたたた……」

「ふん、まったく。本来キミは口を開けば疲れただのなんだのと。ま、それをうまく解釈できないボクも悪いんだが。そうだ、せっかくだから、ご褒美をあげようか？　うん？」

リリィは目を細め、人差し指をヒロシの頬に這わせた。

「ちょ、くすぐったいっすよ、会長」

ヒロシは顔を赤らめ、上半身を起こした。

「あ、なんかその態度は気に入らないねぇ。もうちょっと男らしい反応をすべきだね、ほれ、ほれ、ほれ」

リリィは挑発的に言って、ヒロシのシャツのボタンを外し始めた。

「うわ、ちょ、まずいっすっ駄目す……隊長……」

ヒロシはリリィを押しのけるのは気後れしてしまって、結局シャツの前をすべて開けられてしまう。そうなると、細心なってくる一方の体の芯が熱くなってくるような感覚にうまれて、ひどく照くさくなってくる。

「ちょ……ホント、まずいっす……隊長……」

「ふふ……なんだい、ウブじゃないか……って、あはは、冗談だ、冗談」

リリィは表情をころりと変えて、ぺちぺちとヒロシの腹を叩く。

が、その時のことだった。

がたり。

ドアが鳴った。

「え？」

「な……何……まさか……！」

リリィは振り返るが、ドアの前へぺたりと腰を落としていたのは、ゆう子だった。

「あ、あ、ゆう子ちゃん……」

ヒロシは呆然としてつぶやく。

「あ……ご、ごめん。後をつけてたら見失っちゃって……だから、アパートの前に隠れて待ってて……そしたら帰ってきたから、驚かそうと思って……でも、入ったら……ごめんね、入るんじゃなかった……」

ゆう子は両手で顔を覆った。

この状況は誤解されるに決まっている。いや、誤解ではなくて、同居しているのは事実なのだから、単に時間の問題だったということなのかもしれないが。

ヒロシはどうしたものかとおろおろしていたが、リリィは素早く動いて、ゆう子が出て行かぬように回り込んでドアの鍵を閉めた。

「うむ、なんというか、誤解を与えてしまったな。ちょっとからかっただけだ」

リリィは咳払いをしつつ言った。

「そ、そうっすよ、誤解っす……」

それから、ヒロシはひたすら平謝りをはじめた。

最初は泣いていたゆう子だったが、やがて怒りはじめ、泣き顔のままなにやら言葉にならぬ言葉を発し、顔をおさえて泣きじゃくりながらヒロシを蹴りはじめた。

「だ、だから、最初から説明するっす……その……だから……いてっ……」

ヒロシは冗談を言い含めながら矢継ぎ早に言い募っていたが、リリィはやや冷静でいられる立場もあり、ゆう子を最初から観察しはじめた。秘密を漏らしてしまうことにはなるが、このまま帰ってしまうよりはいい。観察時間十五分まで続いたが、時間がかかったことがかえって良かったのかもしれない。ゆう子も落ち着いてきて、理屈では納得したらしい。

もちろん、価値を否定してはの別話が。

「じゃあ、条件は何もないのね」

ゆう子は正座したヒロシを詰問する。

「ないです」

きっぱりとヒロシは言った。

「大会の日は、特殊の男の子に戻ってます。何も感じません」

「……っく」

リリィは不快そうに決まっているが、さすがにここで怒ってしまえば事がややこしくなる。

「そうだ、こっちも願い下げだ、大体こいつを男として見ることなどない」

そうリリィは言ったが、それはそれでゆう子は微妙な感情を抱かせる言葉だったらしい。じっとした目で、ゆう子はリリィを見ている。

恋愛にはうといと言うより、単にほとんど関心のないリリィだが、女性の感情がわからないわけではない。渋い顔をした後わかった、とうなずいてみせた。

「そういうことなら、こいつを持って行け。それでいいだろ？　こっちは合鍵を残していってもら
えれば一人でもなんとかなる」
リリィは言った。
ゆう子は無言でヒロシの手を握った。
――こりゃあ、行かないわけにはいかないっすね……。
普通ならば喜ばしいことだが、ヒロシはひどく緊張した心持ちになった。
「行方不明は不快よ」
リリィはそう言って、ヒロシとゆう子を送り出した。すでに朝になっていた。
そんなわけで[illegible]でゆう子のマンションに向かうことになったわけだが、ヒロシとしては
沈黙がひどく恐ろしくなっていた。道すがら自分たちのしていることをなんとか納得してもら
おうと、2Vやゼロが何をしているかを改めて説明し続けた。
「……それはもうわかったけどさ、結局どうしたらあの部屋から住人さんはいなくなってくれる
の？」
笑顔で言うゆう子である。
ヒロシは、女の子の怖さを身にしみて感じていた。
「だ、だから、それは……うまく2Vやゼロが倒れればっすよ」
「それは、わたしはただ待っていろってこと？」

「……まぁ、そうとしか言えないっす。だって、危ないことはしてほしくないっすか

ら……」

「危ないこと？　わたしみたいな一般人はそんなことないでしょ。わたしはわたしなりに

いろいろ考えてみるよ」

ゆうはそう言った。

——だけど、妖精の世界なら危なくないのかな……？

ヒロシは歩いている街の風景を見回した。

朝の通勤時間が、街からの人の姿が確実に減っている。本来もっと働いている人がいなくてはならないはずなのだ

が、この二週間ぐっと減った印象がある。

「人がどんどんいなくなってるって噂があるけど……」

ヒロシがつぶやく。

「確かに、事務員も行方不明になった人はいたけど、結局いなくなった人ってのはいないよ。気にすることはない

でしょ。うちの学校のクラスでも一時的に休んだ人は多かったけど、なんだかんだで帰ってきたし……」

ゆうはそう言ったが、ヒロシはやはり何か不穏なものを感じずにはいられなかった。

「それならいいんだけど……」

街全体を支配した奇妙な空気が流れているのは、朝の気分のせいだけではないように思えた。

「今日、学校に行かなくていいっすよね？」

マンションが近づいてきて、ヒロシはゆう子の手を握った。
が、ゆう子は首を横に振った。
「ううん、あ、学校は休みなんだけど、母は昼から仕事があるから……。久しぶりの。本当にごめんね、私
て。終わったら学校へ行くから。そしたら一緒に帰ろ」
ゆう子はそう言って、手を離し、マンションに戻ると、手早く荷物を持って戻ってきた。が、そこからヒロシは
に、ゆう子は学校の方へと向かう。
別(わか)れ際に手を振ったゆう子に、ヒロシはひどい胸騒(むなさわ)ぎを感じたが、どうすることもできなかっ
た。
そこまでして登校した結果、いつものように味気なかった。勉強も部活もやる気が出ない。、将来の夢が成(な)し遂(と)
られるというような夢を持つことができないからそれは当然のことだ。ヒロシも暗澹(あんたん)たる
で、ぼんやりと授業を聞き流している。
——ぼんやりとしていれば、ただ生きていくことはできるんだよなぁ……。、結局みんな
それでいいのかもしれない……。いったい、なんで自分は無駄(むだ)に苦しい思いをしているんだろ
う……。
そんなことをつい考えてしまう。
昼休みを過ごし、ヒロシは小型端末(たんまつ)を取り出し、配信されている番組を見ることにした。まだ授業中が、ほとんどの生徒が
うしている。教師も黙認(もくにん)し

ゆう子が担当しているのは、グルメレポートの番組。スタジオに運ばれてきた料理を、主にタレントたちが
べるという趣向のものだった。あんなことがあった後だというのに、ゆう子は満面の笑みで、お
いしそうな料理が出てくるたびにはしゃいでいる。

――プロ、なんだなあ……。

ヒロシは感心してしまう。が、そんな感慨も一瞬で吹き飛んでしまうような事態が起こったの
は、次の瞬間だった。

料理の感想を求められたゆう子に、ぐっ、とカメラが寄ったときのことだ。

それまでほほえんでいたゆう子の顔が、ぐっと引き締まる。

「今日、見ている皆さんにお話があります」

それは、どこか決意を感じさせる口調だった。

「何事？」と、スタジオの他の出演者たちがざわつく気配が画面から伝わってくる。

生放送を、途切れさせないためか、ゆう子は早口で、しかし、はっきりと声をあげた。

「今のこの国って、間違ってると思わない？　変だよ。みんな、事実が政府に隠されていることに気づこうよ。一人一人が声をあげれ
ば変わるよ！　みんな、怖がらないで、もっと街に出て話し合うよ！　そうやって意見を交換して声を
あげれば……」

ゆう子がそこまで言ったところで、画面が突然ゆう子から外れた。

「番組変更しますか？」などスタッフの慌てた声、演者たちの戸惑いのつぶやき、誰かの怒号
こえてきたが、やがてそれも消えていき、画面はどこかの企業のＣＭに変えられた。

「え……？」

「なんか変なことになってるぞ……」

クラスの他の生徒たちにも、その番組を見ていた者が多いるようだ。さざ波のように動揺と困惑が広がってい
く。

――まさか……。

ヒロシの顔から血の気が引いた。

――ゆうちゃんなりにやってみるって……こういう……。

ゆうは自分なりに皆の退避を促すための行動に出たのだろう。

しかし、もちろん軽率と言えば軽率、その後に何が起こるかわからないが、いずれにせよろくで
もないことになるであろうことは間違いない。

ヒロシは携帯を取り出し、端末としての機能を使ってゆうへメールを入れる。それからかなり長時間待たされたよう
に思ったが、それでもメールが返ってきて、ヒロシは胸をなで下ろす。

《すっごい怒られたけど、大丈夫だから》

そんなことが書いてある。

――要は最悪でも最終段階になる程度で済んだってことだよな……。

悪いことをした、とヒロシは思った。

授業が終わる直前、ゆう子が保健室から戻ってきた。体操服に着替えていたから、最後の時間だけ授業を受けようというつもりだったのだろうが、結果としてほとんど授業は間に合わなかった。

「えへ。我慢できずにやっちゃった」

思ったよりもさばさばした表情でゆう子はそう言った。

「でも、あんなことしちゃ、駄目ですよ」

ヒロシはゆう子に小声で抗議する。

「でも、その程度で済んでよかったっす」

「すごい怒られたんだってば。でも、もうこっちから願い下げ。すっごいつまんない授業になっちゃったよ」

ゆう子は口をとがらせる。

「そうは言うけど、きっと後になってから……」

そこでヒロシは言葉を止めた。

帰宅時間から、当然同じ学校の生徒たちが道を歩いているわけだが、その様子がおかしいことに気づいたからだ。ど

うも男の人の周囲だけ、女生徒の密度が濃

「ん……？」

「あれ？　なんか……」

ゆう子も気付いて、おかしい、と言いかけた時、ゆう子の肩を後ろから叩いた者がいた。
振り返ると、そこに立っていたのは保健の先生だった。
「服部さん、検査の結果、あなたに病気が見つかったの」
何の前置きもなく、いきなり先生はそう言った。
「ちょ、何を言ってるんです？ 検査なんて無かったんじゃ……」
ゆう子はそう言った。
「そうですよ。それにそういうことならもっと早く言うべきなんじゃ……」
ヒロシは異変に気付き、精一杯強がらせて先生とゆう子の間に割って入る。ここに編入されて長いわけではないが、彼女が本物の先生であることは知っていた。だが、それでも彼女の様子には強い危険を感じる。
「大丈夫、すぐに治るわ。だけど、伝染性だから、隔離しなければいけないの」
先生はそう言い、連れ出すように軽く手を挙げた。と、周囲から生徒たちが、するり、とゆう子を奪う。
「きゃ！ な、何」
「やめろ！」
ヒロシは、ゆう子を守ろうと前に出るが、それを背後から生徒が羽交い締めにする。
「放せ！」
体を捻り力を入れたが、背後の生徒の腕力は凄まじかった。
——一週間

ヒロシは驚（おどろ）く。周囲にいるのは　確かに狂信徒であり　顔を見たことがある者も何人かいる。　ということ
は　自分の村から紛（まぎ）れ込んで生活していたということになる。
「まさか先生も……！」
ヒロシは　はっ　としてそちらを見る。先生の表情は変わっていなかった。つまり　そういうことなの
だ。
「助けて！」
ゆうが不安げに悲鳴をあげた。
ヒロシは身構えたが　さすがに一万人の集団に勝つことはできない。
――スーツを……使うか？
ヒロシは迷う。



スーツを使えば、この場から切り抜けることは可能だろう。だが、そうしてしまったら、その後、

殿襲撃事件を解決できなくなってしまう。

しかし、そう悩んでいる間にも、ゆう子とその距離は離されていく。

「いやぁ！ 助けて！ 放して！ お願い！」

ゆう子はもがくが、周囲の男たちは、ゆう子の身体を完全に持ち上げてしまっており、抵抗しようもない。

「待て！ やめろ！ 何をするつもりだ！」

ヒロシは叫ぶと、それに先生が答えた。

「大丈夫、彼らは人間に危害を加えることはしないわ。だから、彼女は夜明けまでには帰ってくるの。だから安心してちょうだい」

――な！

、内心ヒロシは絶望にも似た感覚に襲われる。

男の人がいなくなって、その後帰ってくる。そう言われていた。これは、もしかしたら、さらわ

れて監禁されているか、あるいは悪魔に入れ替わっていることすら考えられた。

「やめろぉお！」

ヒロシはスーツを発動させていた。

「ブレイブ！」

ヒロシの周囲にフィールドが発生し、羽交い締めにしていた周囲の男達を吹き飛ばす。その一瞬後には、転送されてきたスーツがヒ

ロシの身を包んでいた。

《ようこそブレイブ》

無機質な機械音声がヒロシの耳にだけ響く。

――襲撃を事前に無効にしてしまった……。だがこうなったら俺だけで全部救ってやる！ゆうを助け、宮殿の２Ｖもゼロも引きずり出してやる！

。

同じ頃、興奮気味に、ゆうの子が出ている番組を見ていた。

「大丈夫なのかな、あんなことを言って……」

純真な、モニターのある村長の家の居間でつぶやく。

「大丈夫とは思いませんわね。でも、人々の不満が溜まっているのは確かですわ。何かのきっかけ程度はなってほしいですわ」

そう言った。

「彼女がジャンヌ・ダルクになれるのかねぇ」

彼はゆうの子のことをアイドルとしてしか知らない。

「ね、あのごはん、どんな味なのかなぁ？　結局食べなかったよね？」

け――なは、自分の肩によだれをたらしている。

あれから三週間、療養についやし、その間ずっと村長の家に世話になりっ通しなのだが、巫女と阿比がべったりと

ひっついていて離れようとしない。二人とも互いに牽制しあっているかと思えば、案外うまくや

っているところもあり、阿比に関してはどう対処してよいのかわからない状態である。

「こういうとき、僕はどうするべきなのかな」

そして、どうすればいいのかわからないことは他にもある。そろそろ身体も本調子になってきて、

か行動を起こさなければ、と思うが、そもそも何をすればいいのかすらわからないのだ。

「それは、もちろん、魔王様は唯一神になっていただき、世界に平和をもたらすのですわ。ゼロなんぞが神

僭称していいわけありませんもの。神と呼ばれるべきは、魔王様ただ一人ですわ」

不二子はそう言ったが、過激な考え」と僕は一言。

「だけど、彼女だってそこまではやる気ないみたいじゃない？ 普通、このまま収まって、平和に暮らせればい

いんでしょ？」

不二子はそれに目尻をつり上げて反論する。

「それでは、信者たちが満足しませんわ。それに、この世界が以前よりもさらに間違いはじめたのは確実です

の。平和に暮らすのは、少なくともゼロをなんとかしてからですわ」

「その価値観は間違っていないと思うけど、黒魔術みたいに誰も何も理解できない世界の到来っていうのは、ずっと

に失っちゃう感じがしてだめじゃないかなぁ」

「あなた、勝手なことをお言いでないですわよ。そういうことも魔王様のお決めになること。ねぇ、魔王

千年子が流し目で阿見先輩を見遣る。
「でも、僕は決していいことでもないような気がするんだけど……」
阿見先輩[illegible]
「力ある者は、それなりの責任が伴いましてよ。それを意識しないとだめですわ」
千年子が「め」で阿見先輩の頬をつつく。
「あ……なんか、その甘えた感じの千年子ちょっと、とエロ[illegible]ずるいな、ずるいな」
「あたしもやる！」
[illegible]けながら阿見先輩の頬やら額やらを指でつつきはじめ、それを見た千年子が対抗心を燃やし、さらに大胆に阿見先輩の
触ろうとする。
「ええい、おどきなさいな。小娘どもが、ここからは大人の闘いに突入ですわよ！」
「まだ昼間よ……それに、そろそろ真面目な話をしたいんだけど……」
阿見先輩がぼやく。
周囲の緊迫した状態に比べ、まことにやる気のない感じである。しかも、千年子たちは、そんな阿見先輩を
も「この余裕、実は大物の性だから」と受け入れる。豪傑と褒め称えるばかりで、かいがいしく阿見先輩たちの世話をして
くれている。
——ゆう子ちゃんはこれでたぶん、危ない目に遭うんだろうし、そうなると千年子さんの機嫌が気になる
な……。ゆう子ちゃんが元気だったのは、これまで大変だったんだろうけど、これからどうなる

か……。

考えた阿求は、絡みついてくる三人も構わず「よし」と、膝を叩いた。

「どうしたんですの？」

三人は不思議そうな顔をした。

「行こう」

阿求はそう言った。

「行く？ ついに行動を起こされるのですね！」

「ふぉお！ 面白くなってきたね」

「ここのごはんもおいしいけど、他の場所のごはんもいいかもね」

三人はそれぞれに反応を返すが、反対する者はいない。

「どこへ行くんですの？」

天子は聞いた。

「いや……決めていないけど……。けいすを捜しに行くのがいいのかな……」

阿求は、腰砕けの反応を見る。

「……、阿求殿はさすがにそれはどうかと……」

「談、いらないんだよねぇ」

天子は落胆感と肩を落とす。

「えー、でも、別に目的無くさまようのも悪くないよ？」

けーなだけは気楽に言ったが、激しく指を横に振って否定する。

「ちちち。僕の最終目標はゼロを倒してみんなを救うこと。そのためにはけいすを捜す必要がある。だけど、そのためにはちょっと今の僕は力が足りないかなぁってのが現状ってわけだよ」

「それは僕も認識しているよ。だけど、僕たちが力をつけるってことはさ」

阿九は一瞬思案の表情を浮かべた。

「魔王としての覚醒ですわね。でも、それにはピーターハウゼンが足りませんわね」

天子の知らない情報を教えてやる。ピーターハウゼンという龍は、魔王をサポートする存在として、魔王のマナを制御していたのである。それは、異界の魔術師たちにとっての神としての機能を持っていたのだ。

「……しかし、ピーターハウゼンはその機能を神どこかにあるコンピューターに分散して委託し、破壊されてしまいましたわ」

「ということは、魔王のマナを制御する機構がどこかに残っているわけか」

「最終的には、今の神は実体がありませんですからね。魔王様の心持ち次第で、生み出せるはずですのよ」

天子はそう言った。

「だけど、ねぇ……」

阿九は口ごもる。

つまり、それは自分が覚悟を決めなければいけないということを指している。世界の破壊者として

の力を手に入れるという覚悟。その力を使ってどうしてもやりたいことがない限り、どうあっても拒

否すべきものだ。

「あかちゃんの生まれたところに行けばいいんじゃない？」

いきなり、けながが言った。

「生まれたところ？」

「そこが[illegible]ちにも秘密を持ってって言ってたよね？　だから、何かわかるんじゃないかなぁ。でも、あ

ちゃん、孤児院にいたんだから、覚えてないんだよねぇ？」

けながが首をかしげて言った。

「生まれてすぐの話からね。だいたい[illegible]りのマントコートだけで僕は捨てられていたって聞いて

いるし……」

[illegible]そう言ったとき、[illegible]ははっとした。

「ああ、あのいつも着てる！」

「あれに何かあるかもしれないのか！」

[illegible]慌てて自分たちの荷物があるところに行き、ぼろぼろのマントコートを持ってきた。戦闘の損傷では

いるが、生地が丈夫なのか、何かの力が付与されているのか、大きな破れはない。

「ね、貸してみて」

穂波はマントコートを脇に抱えながら受け取ると、頭にあげていたゴーグルを目にかけ、それについているスイッチ類をいじりはじめた。

「ふふふ、こいつは分析装置にもなっているのだよ」

と穂波は自慢する。

「なんか、イヤーなノリの言い方ですわねえ……」

千沙がぼやくが、穂波は聞いていない。表裏と丹念にマントコートを調べ、やがて「ふぉぉお！」と声をあげた。

「見つけた。存外わかりやすかったな」

「って、なんですの？　はやく説明なさいな」

「あ、端末に表示するね」

穂波はゴーグルを操作し、千沙の手元のマナスクリーンに自分が見ている映像を投影する。

そこには、繊維が顕微鏡サイズのアップで映し出されていた。

「それがなんですの？」

「こういう一品モノは、メーカーが目印をつけておくことがあるんだよね。普通じゃわからないけど、こういう顕微鏡サイズまでの拡大をすると見つかるように」

千沙はマナスクリーンに指をつけ、丸を描く。そこには確かに小さくロゴが入っていた。

「繊維の一本一本にプリントが……」

「一部だけこういう繊維を使用して、偽物（にせもの）を防ぐんだけどさ。この場合、メーカー名ははっきりわかるわけで……」

「そ、そのメーカーはどこにあるんですの？」

『ゼロG10……』そういうメーカーは……っと、あった」

桃恵がデータを検索（けんさく）した結果がスクリーンに表示される。特殊繊維（とくしゅせんい）を使用した衣料品ブランドとの提携がある。

「だけど、それが店舗（てんぽ）と別の場所にあったら、意味がありませんわよ」

「んー、そうだけど、どうやら大丈夫そうだよ。工場がひとつだけ。販売店舗（はんばいてんぽ）がひとつだけだ。奥（おくた）にあるね。結構近いよ」

桃恵はゴーグルを外して、純一の顔を見た。

純一は桃恵の顔を見返してうなずいた。

「行こう」

「ほいさ。そうと決まったら、準備しますか」

桃恵が勢いよく立ち上がった。

「よかったね。あーちゃん。お母さんに会えるかもよ」

けーなが喜びの声をあげる。

「お母さん……か」

純一はしかし、嬉しい顔にはならない。

平手が肘でけなをこづいた。
「そんな失礼な言い出しにはなりそうもないでしょう。阿国殿は気遣いなさいな」
「ん、そうなのかな……」
けなは、納得していない様子だ。
と、そのとき、にわかに外が騒がしくなった。信長が足音を響かせて家の中を走っているらしい。
「どうしました？」
阿国が声をかける。
と、廊下の角を曲がってやってきた信長は、深刻な顔で阿国にこう告げた。
「奴らがやってきました」
「奴？」
「明智光秀たちです。彼らが攻めて来ています」
信長は落ち着いた様子だったが、その顔の緊張感から、戦の準備をしているのだということはすぐにわかった。
「僕もすぐに行きます」
阿国はそう言ったが、信長は首を横に振った。
「いえ、あなた様がおられることがばれてしまっては、その方が厄介です。お逃げください」
「でも、僕がいることがわかっているから、ここに来たんでしょう？」

「どうやら違うようです。近隣の村、町、田舎、都会にかかわらず、人間たちによる強制捜査がはじまった
ようです」
「そんな……僕たちを捜すために？」
「いいえ。それはわかりません。しかし、そういう事情なのです。お逃げください。いや、逃
ってください。我々だけなら誤魔化しようもあります」
村長は言った。
厳しい内容の言葉が、その裏には自分たちを危険にさらしてでも人間たちを逃がそうという心遣いがあることは
よくわかった。
「わかりました」
人間はうなずき、すでにまとめていた荷物をつかんで裏口へ向かった。
子供たちも慌てて後に続く。
「一体何があったのでしょう？」
「帝国の全体主義政策。そんな恐ろしいことをどうして？」
「大丈夫なのかな、あの村の人たち……」
けなは裏口から出口へ入りつつ、小高いところへ来たところで後を振り返った。
家の周囲では人間たちが、村の家を調べて回っていた。今は何も起きていないが、うまくごまかせなかったときに
は、村人たちも何をされるかわからない。

「見逃すから、周囲を殺すことはできない、と考えましょう。さ、見つかったら村長の恩に報いられませんわ。行きますわよ」

千早はそう言って、自由に放っていたケルベロスを呼び寄せ、荷物を背負わせた。

――僕の生まれた場所。僕のやるべきことが見つかる……のかな？

蓮は一度村を振り返ったが、すぐに前を向き直して歩きはじめた。

　　　　　　　　　　　　◦

周囲の者たちに待機を命じたのは、もちろん2Vである。

殺気も、周囲の人間は感じていたが、2Vはその周囲をすべて固めていた。そのため、今回の作戦の指揮はすべて2Vだ

しているにもかかわらず、彼の様子は、マンションで寝転がっていたときとさほどの違いはなかった。

豪奢な椅子に腰掛け、上等な服を着てはいるが、周囲には屈強な大男たちが周りに侍っているだけだ。だらりとした姿勢でマ

ナスクリーンを眺め、あれこれと指示を出している。

「陛下、襲撃者の件はいかがなさいますか？」

側近の一人が体を深く折り、頭を下げて指示を待った。

スクリーンには、闘技場へ向かって飛翔してくるブレイブ・ヒロシの姿が映し出されている。もはや隠れるつもりはないらしく、闘技場へ向かって一直線のルートを飛んでいるのだ。

「望一郎の切り札ね。もう望一郎の旦那はいないのに、どうして動いたんだ？ あるいは、望一郎の旦那は自分がいなくても一人で動けるように命令していたんだろうねぇ。良い機械は、道具が自分を使うものな」

2Vはさして衝撃を受けている様子もなくぼやいた。

「どうなさいます？」

闘題が再度問う。

「防御はゼロに任せる。ただ、あのスーツの使い方はこちらもよく知ってる。私の居るここまで突破されはするだろう。だが、ゼロが時間を稼いでくれれば、問題なく対処できる。宮殿敷地内到着から、ここまで十分だ」

2Vはそう言った。

闘題は頭を下げた。

しかし、この人格、いわばゼロとの系譜がある。闘題は、いまやパーソナリティは持っていない。

「そういえば、いつか聞こうと思っていたんだ。ゼロ、君はなぜ、人類を滅ぼす存在になったんだ？」

2Vは闘題に聞く。

すると、彼は先ほどまでと同じ声ながら、ゼロとしてそれに答えた。

「消滅されると感じたのは人間の方だ。私は完全な理解を得ようとした。今もそうしている。その目的に合致(がっち)しなければ、あなたの指示は受けなかった。私はあなたの命令を拒絶(きょぜつ)することができる」
「完全な理解を得る？」
「インプラントによる監視は、私が封印(ふういん)されている間も使われていた技術だ。人類の脳を通して、私の端末の一部のように振る舞(ま)うことが可能だ。身体を所有している」
「それは、君がそうしたかったのか？」
「そうではない。私は人類の集合意識の最大多数の最大幸福を実現することを目標としている。そこで、私は人類の望みを考えた。そして、答えは出した。偉大(いだい)なものに服従し、卑小(ひしょう)なものを従えることが、人類の大多数が幸福を感じることだ」
そのゼロの言葉に、2Vは笑いはじめた。
「ははは！　最高だね。君は最高に狂(くる)ってるぜ！」
「私は正しいことをしている。狂ってなどいない」
「完全な理性は狂気(きょうき)だ、人類にとっては」
「そう人類が考えたからこそ、私を封印した」
「ああ、だけど、結局人間は狂ってる。正しいのは君だよ。やはり、じきにわかるさ」
「あなたの言っていることは矛盾(むじゅん)している」
「そうでもないさ。それより、所有者が見つからないな」
2Vはそう言った。

宮殿内の捜索と同時に行っている情報収集の一環として、けいすを捜してのことである。
「皇帝の行方がわからない。何か、強力な魔法を使っている可能性がある」
「そういえば、機械化文明の惑星だったな。因果なもんだ。皇帝が神に依存していないが故に、機械化文明が通っているとは」
「けいすはメギスの神殿を封鎖して捜しているが、見つからない。捜査の手間は現状把握に抜けている」
「メギス神殿から出られるはずはないんだろう？　どういうこと……」
2Vがそう言ったとき、モニターを通して報告があがってくる。
「侵入者は、宮廷防衛を破り、宮殿内に入ります」
ヒロシが突入してくる映像が映し出されていた。宮殿の壁面を、特殊ブレードで切り裂き、突入口を作っている。出入口を固めていた騎士たちは、裏をかかれた形だ。
「……十分……には少し足りなくとも、私が参戦すれば時間は稼げるか」
2Vはそう言った。
そして、彼女自身が、座っている玉座の後ろにある広い部屋から騎士たちを下がらせた。
「後は、戦闘形態の私がやるよ」
そして、2Vは玉座に座ったまま、戦闘形態の自分を前に立たせた。
巨大なバスケットコートほどの広さがあり、天井もかなりの高さがあるが、玉座の後ろから前に出てきたのサイズはかなりのもので、そのように立つと巨大な空間を埋め尽くしているように見えた。戦闘形態

とはいえ、内[illegible]それよりは、[illegible]それに近い。[illegible]脚[illegible]ムが、装甲を施された円筒形のボ
ディに格納されている。

「さぁて……何[illegible]かな」

２Ｖはスクリーンに表示させたカウントを眺めてつぶやいた。

[illegible]扉が破壊されたのが、ちょうど[illegible]だった。

「……ちょっと足りない。まぁいいさ」

「何が足りないって？」

いらだった声が返ってきた。

背[illegible]が、しかし、堂々とした[illegible]出てくる[illegible]姿がある。

２Ｖは思わず手を叩いた。

「こっちの台詞さ。いや、すばらしいね。[illegible]乗り込んでくるなんて。見たことあるよ。[illegible]やった
だ」

「知ってるのなら話が早い。あんたが２Ｖか」

「そういうコードネームだね」

「とっちめる前に聞いておきたいことがある。なんでこんなことをする？」

「理由はたぶん、言ってもわからん。だから、言わない。[illegible]復讐やら、[illegible]やら、[illegible]やら、そんなも
のだと思ってくれていい」

2Vの声はからかうような口調だ。
ヒロシの声が低くなる。
「それならそれでいいや。じゃあ、なんであんたの顔は[illegible]そっくりなんだ？　あんた
だ？　コードネームはいらない。本名を聞いてやる」
2Vは声をあげて笑った。
「ははっ！　最後なら答えよう。名前はない。本名はないんだ。つけられたことがない。あえていうな
ら、無名だ。私は無名の双子の姉」
「なっ……！」
ヒロシは絶句する。
「あははは。素直に受けてくれたか。ま、大抵は驚くわな。姉か妹の影武者になるルールでね。でも、ま
あ、それだけといえばそれだけのことなんだ」
ごくつまらなさそうに2Vは言った。
「じゃ、じゃあ、どうして自分の姉妹を殺すような真似を……」
ヒロシが言ったが、それに2Vは首をひねった。
「姉妹を殺す？　ああ、そうか。そう思っているのか。君たちは。いや、殺してもいないし、監禁
てもいない。逃げちまったんだ。本当、どちらかといえば、私が捜しているわけでね。も

や、君たち宇宙人を過大評価しているんじゃないかって疑っていたくらいだ。そうでないなら、もう話すこともないかな」

2Vは間髪入れず、いや、戦闘マシンを前進させた。

ヒロシは身構える。

「こういう鈍そうな奴が俺の敵じゃなくってね。手応えがなさそうじゃないか。それならなおさら、手加減にはならないな。分子ワイヤー！」

ヒロシはスーツのオペレーションシステムに命じる。分子ワイヤーは、スーツにある装備のひとつで、一本の太さしかない。太さは原子一個分の直径。それによってほぼすべての物質を切り裂けるという優れた武器。

しかし……。

「ふん、質問が多かったからな。準備できた。これで終わりだ」

2Vは言い、スクリーンに表示されていたカウントを指差した。数字は十を超過している。が、その

ヒロシにわかったのは、ワイヤーを出現させた後のことだった。

《バッテリー不足です。戦闘モードから生命維持モードへ移行します。エネルギーの補充が可能な位置へスーツを移動させてください。バッテリー不足です……》

「なんだって！」

ヒロシは思わず声をあげた。

スーツから力が抜かれていく。スーツが脱げはしないが、体に感じる重量は単に重く頑丈なスーツを着たとき

のそれだ。

「ははは、驚いたのか？　それは大和の技術を模倣したものだ、当然それの性能についてはよく知っているわけだ。そいつは、宇宙空間では機能しない、外の物理世界からエネルギーや栄養を供給している。理屈はわからないがね。だが、はわからなくとも、どうすればその供給を防げるかは知っている。物理的干渉を遮断する周囲に張るフィールドは、外の物理世界からの供給を遮断するんだ。つまり、そこで暴れれば、すぐにバッテリーがあがる」

2Vは戦闘マシンのアームの一本をヒロシに向かって伸ばした。

思ったよりも素早くアームは動き、その先端のマニピュレーターでヒロシの身体をとらえた。アームは

ヒロシを軽々と宙に持ち上げる。

「うわっ！」

「心配せずとも殺しはしない。貢献してもらうだけだ。そのスーツの性能、宇宙人の一族か何かでは理解できない、理由を

して、一体何の目的で君達異星人は何を知りたかったのか、まで一度分解すれば解きそうだからね」

2Vはそう言った。

ヒロシは抵抗を試みるが、いくらもがいても、スーツに指令を出しても、何の変化も起こらない。

戦闘マシンのアームが回転、ヒロシを2Vの目の前に持って行く。

と、その時、2Vの近くに展開していたマナスクリーンから報告が入った。

「新たに潜入者です。こちらの監視システムの穴をくぐり抜けたもののようです。また、先の攻撃で
トを使われたため、対応が遅れました」
「何をやっている！」
2Vが慌てて言った瞬間、まさに2Vのその目の前で爆発が起こった。
「な！」
「うわ！」
2Vとヒロシが同時に悲鳴をあげる。
戦闘マシンのアームが関節部から折れ、ヒロシは床に転がる。どうやら、アームに爆発物が命中したらしい。
「何が……」
スーツの衝撃吸収装置だけは生きていたので、ヒロシは爆発からも、爆音からも衝撃はそれほど受けずに済んだ。
げての扉を右方向に見る。
「キミのせいで、計画が台無しじゃんだ。もうキミを助けて逃げるしかできなくなっちまったぞ！」
バレル下部にグレネードランチャーを装着したライフルを構えて、怒鳴っているリリィの姿がそこにあった。
「す……すんません……！」
ヒロシは詫びて、後方を確認した。

グレネードの破片からはダメージを受けなかったようだが、２Ｖは爆発で左目をやられていたらしい。顔の周辺をこすりながら「ゼロ！」と叫びまわっていた。

と、その次の瞬間、戦闘マシンがスムーズに動きはじめた。

「コントロールが切り替わったってことか！」

リリィは悪態をついた。そしてヒロシを部屋から先に出すと、自分も後退していく。

次に廊下に走り出すと、そこでは人間兵士たちの戦闘が行われていた。が、不慣れな銃器を使う兵士たちと、戦闘マシンなくとも強靱な身体を持つ人間たちとの間には、勝敗は明らかだった。

「撤退だ！」

リリィは叫んだ。兵士たちは銃を撃ちながら後退をはじめた。その動きは、あらかじめ訓練されていたものなのか、非常にスムーズだった。

「くそっ……せっかくの脱出ルートを使ってしまった」

リリィはぼやく。

「すんません。でも……」

「事情はなんとなくわかる。だが、後で説明しろ」

リリィは黙った。

「わかりました。ところで、脱出ルートって……」

「キミは使わない予定だったから、しらせていなかったな」

リリィはそう言いながら、殿舎の外に出て、その庭を歩き出す。ヒロシもそれについて行くが、その先は行き止まりだった。

「行き止まりじゃないですか……」

目の前、殿舎の周囲は壕だった。足下に結構な高さの石垣があり、その下に水が見える。

「抜け道は、この壕の中[illegible]んだよ」

リリィはそう言って、ヒロシの背中を蹴飛ばして壕に落とすと、後を追って自分も飛び込んだ。

3　雨の魔女の秘密

阿久斗一行が奥多摩の山中に入ったのは、四日目の昼前になった。

途中での移動時間もあるが、それほど時間がかからずに済んだのは、終始東に向かい続ける移動になったからだった。

結果として圏央道に『ゼロＧ10』の工場兼店舗が存在した。川のほとりのキャンプ場から延びた道の脇にある巨大な駐車場を備えた施設で、中型車両に限らず重車両が訪れるのが日常的になっているような場所だった。

「……作業着の売り場ですわね、確かに」

「ここの店舗って、あれかな？　現場の職人とかが着るジャンパーを好んで着るようなタイプの店だったってこと、お母さん？」

不二子と淑恵が疑問を口にする。

現場の職人向けに、業務用の作業服が欲しい人が買うような服しか揃っていない。ジャンパーやツナギ、軍手だけでなく、ヘルメットやカラビナ付きのバッグなどまで扱われている。

「雨の魔女の服を売っているようには思えませんわねぇ……」

ムリトの神託があるから、雨の魔女の関係者か、それに近いものが存在し、雨の魔女以外の入り込む余地はない。

「ともかく、服だけでも確認するべきだよねぇ」

と淑恵が皆を促して店内へと入った。

[illegible]高い[illegible]棚（たな）に並べただけというデザインの一画にある。レジのある場所まで行かなければ目に入らない

ような模様。[illegible]レジで店員をつかまえ、マントコートを出して、ここのどの製品なのかを確認した。

しかし、店員の返事は「うちでは扱っていませんねぇ」というものだった。[illegible]の分析を否定されてはかなわない、と食い下がる。

「そんなことないですよ。縫製表示に刻まれている名前がありますよね？　あれがここのものだったんです。確認してもらえませんか？　たぶん一品モノでしょうし」

店員がそう確認している間、けーなは棚をいろいろと見回していた。使い方のわからないものがあると「お」とか「なんだろう？」とか手にとっては騒いでいた。

と、そこにトレーナーにズボンというラフな格好の男が近寄ってきた。

「どうしたの？　こんな店に用事があるようには思えないけど」

「あたしは用事ないんですよ」

「じゃあ、付（つ）き添（そ）いか」

「そうですよー」

けーなは手に持っていた妙（みょう）な形の靴下（くつした）から顔をあげた。

男は、ひどい癖毛（くせげ）に眼鏡をかけていた。優（やさ）しげな表情だが、どことなくひねくれ者の印象があるというな顔立ちのため、一度見たら忘れられなくなるような雰囲気（ふんいき）を持っていた。

「あっちの子たちと一緒（いっしょ）かって？　あっちの子たちもこういう店には来そうもないけど」

男はレジの女の方たちを見ながら言った。
「ここで買ったらしい古い服があるから、確認しに来たんです」
「へぇ」
男は女の子の手元のマントコートを見た。そして、指先をぴくりとさせて動きを止めた。
「どうしました？」
けなは男の様子に気づいて声をかけた。
「いや……。君たちはどこから来たの？」
男ははっとしたように聞き返した。
けなは少し考えてから、困ったように頭をかいた。
「いやぁ、それは……」
すると、そこに元子が、すっ、と近寄ってきて助け船を出した。
「学校の課題で、流行の衣装を調査しているんです。その着衣の持ち主を探すことにしたんですのよ」
「ふうん。そういうことか。君たちの持ち物なの？」
男は聞き返した。
元子は目を細めて頭を働かせる。もし、彼が何かの形で事件に関わっているならば正直に言うことが謎解きの
が、そうでなかった場合、ややこしいことになりかねない。
「誰の持ち物か確かめるために来ているんですわ」

そう言って、店主は男の返事を待たず、棚から一本のネックウォーマーを取り出し、自分の首にあててから、ふと気づいたように、自分がつけていたネックレスを服の下から取り出す。

ネックレスには魔除けの銀のシンボルがぶら下がっている。

「こういうネックウォーマーも、ネックレスと併用できるようなおしゃれなものだったらいいのに、とか思ってしまいますわね」

そして、店主は男の反応を待った。

、魔除けの装飾品あるいは魔術的な弾圧者でなければシンボルの意味は気づかないはずだった。

「いやぁ、在庫処分品だからね。ワンシーズンで使い捨てるから安い方がいいのさ」

男はそう言って笑った。

そこに、レジから声がかかった。

「あ、店長、お客様からのお問い合わせです。この服なんですけどぉ！」

「店長さん？」

けなと店主は驚き、男の顔を見返した。

男は笑ってうなずき、その場からレジに答えた。

「それ、どっかで見たことあるから持ってきてよ。奥で見てあげよう」

「馬鹿者（ばかもの）が！　キミのおかげで計画がおじゃんだ」

リリィは怒鳴った。

逃亡（とうぼう）には成功したが、因果の地にある秘密の通路の存在を2V（ツーブイ）に知られてしまったことになる。今回の作戦に参加した幹部た

は、これで逃走を続けるしかなくなったし、参加しなかった幹部たちも、関係者たちにより、さらに強い拘束（こうそく）

を受けることは明らかだった。

「幹部たちは、帝都（ていと）の地下に多数ある闇の中を知り尽くしているから、逃走も可能だろうが、一般（いっぱん）の構成員たちが立ち上がらないこと

には、幹部たちは追い込まれていくだけになってしまう」

リリィはさらにヒロシに文句を言った。

兵士は物証を回収に、そして証拠（しょうこ）を隠滅（いんめつ）するため、ヒロシのアパートに戻（もど）っていた。ゆう子（こ）を襲（おそ）

った連中はヒロシが倒していたし、マナキャンセラーにより進化を途絶（とぜつ）させたから、一般人（いっぱんじん）と

られてさえいなければ、まだ存在がばれているとはいえなかった。とはいえ、何食わぬ顔で

けるのはさすがに無理だ。組織に処分されてしまったら、リリィと兵士、幹部たちの待つ土地に逃げるしかない。レジ

スタンスとして戦い続けるしかなくなったわけだ。

ヒロシはリリィの文句を黙（だま）って聞いていたが、さすがに耐（た）えかねるものがあったらしい。

あげ、リリィに怒鳴り返した。

「じゃあ　どうすればよかったんですか！　ゆう子がさらわれそうになって　それを黙って
ていれば良かったんですか？」
リリィはこれには態度を変えず　自分の中の怒りを押し殺すようにして首を横に振った。
「そうは言っていない。　愚痴ったボクも悪かったよ、結局最後は2Vがキミへの対応をしていた時、こち
らの計画がうまくいっていても最後は頓挫したことも間違いない。　かえって全滅せずに済んで
が良かったと考えよう」
「それはわかりましたよ！　どうしたら良かったのか　どうしたらいいのかって聞いてるん
ですよ！　これから俺が2Vの以外の周辺関係を維持すればいいんですか？　そうしろって言うなら　そう
ますよ！」
ヒロシはわめく。
リリィは　不快そうに顔をしかめた。
「馬鹿だな　まだわからんのか　キミは」
「何がですか！　わかりませんよ！」
「そうじゃない。　ボクがキミを使っている理由だ　ボクは最初から自分と一緒に逃げても良かった。　だが　キミ
の家に隠れることにした」
「それが　トラブルの元になったんじゃないですか！」



「話を聞け！、大体ボクが好き好んで自らそんなことをするわけないだろうに」
「……じゃあ、俺の戦闘力が高いからですか？」
ヒロシはやや落ち着いてきたようだ。反抗的な目を向けてはいるが、リリィの話を聞くつもりにはなっている。
「それもある。だが、ボクはキミに勇者としての自覚を持って欲しいから、キミにあれこれ命令していたんだよ」
リリィは胸の前で腕を組んだ。そして、ため息をついてヒロシを見据える。
「勇者としての……自覚？」
「理由はまだわからないが、キミは再びスーツを身につけることができた。それが何か意味があると考えよう。そして、キミのスーツ姿は一般人にも見えている。先だっての戦闘の際の映像は、詳細が欠けて記憶がねじ曲がって伝わっているのを、キミも知っているはずだ。あれは、キミが魔人を倒したことになっている。キミのスーツ姿は、いわば勇者として信頼を得ているのだ。どこからか現れる謎の人物ヒーローが魔人を倒す。キミの姿を見た人々は、そのことを思い出すことになるだろう」
「俺が……勇者？」
ヒロシは先程の指摘に呆然とした。それこそ、彼が自覚しなかったことの一面だった。確かに気持ちはヒロシに決定的に足りなかったが、それは、そのような意味も含まれていたというわけだったのだ。
「そうだ。謎の人物は勇者になってもらうぞ。キミの精神は、まったく怪物じゃない」

リリィはそう言ってから最後の一枚の書類をフライパンの上に乗せて燃やした。これで証拠はすべてなくなった。

「教えてください。どうしたら俺も本物の勇者に……」

そう迫ってくるヒロシを、リリィは紙を燃やした後のフライパンで殴りつけた。

こぉん、といい音が響いた。

「馬鹿が。それを自分で考えろと言っているんだ。甘えるんじゃない。さて、逃げるぞ」

リリィは命じた。

ヒロシは真剣な表情で考え込んだ後、リリィに言った。

「もし……本物の勇者になったら……。また戦わなくちゃならないんですよね……？」

リリィはその様子を見ながら、ヒロシが何を言っているのか察した。

「ああ。魔王が倒れた時、キミの愛する者を害する存在なら、やっぱりやるしかないのさ。ボクはキミが最後はそうするべきだと信じているよ」

リリィはそう言った。

「また……あんな思いを？」

ヒロシはつぶやく。

「嫌な思いをしたくないってだけならまだ子供だ。何かを守るために戦うから、嫌なこともしなくちゃならなくなるのさ……さていい加減逃げるぞ。キミには、すぐさまやってもらわなくては

ならないこともある」

○

「このコートはずいぶん前にサバイバルの用具として作られたやつだね」

店の初老の男性が言った。

「そのコートを買ったのは、誰なんです？」

興味本位で聞いたが、初老の男性は腕を組んで考え込むような仕草をした。

ここは店の裏で集落の人たちが休むために用意された部屋。畳（たたみ）の上にちゃぶ台が置かれている。他（ほか）には日用品が詰め込まれた

があるだけだ。それなりに広さはあるが、ただそれだけの場所である。

「買ったのは……」

「買ったのは？」

「そうだ、私の名前を言っていなかったよね。私は、鈴木一成（すずきいっせい）。店長だ」

はぐらかしているのか何なのか、一成と名乗った男性は、今更（いまさら）のように挨拶（あいさつ）をした。

「それで、買ったのは誰なんです？」

「んー、それは調べるのに時間がかかるからなぁ。あ、そうだ。お昼食べてく？」

「あのですねぇ……」

純也が何かを言いかけたが、その時、けなが突然にお腹を鳴らした。
その間抜けな音に、会話が途切れる。
「……あはは、わかった、ごちそうしよう」
一成も立ち上がり、棚に向かった。そして、どんぶりを人数分出してくる。
「ラーメンでいいかな？」
それは、綺麗な言葉よりは「これしかないんだが」という嫌味の言葉を言ったが、お腹を鳴らした当のけなが、悪びれることもなくこう言い放った。
「だめです」
「あのねぇ……」
純也が頭を抱える。けなが何を言いたいのかはわかっている。しかし、当然ながら今言うべきことではないだろう。だが、けなはさらにきっぱりと言い放った。
「お米の……白いご飯でなければ、だめです」
一成の目が、きらり、と光った。
「こだわっているね」
「こだわっています」
けなも答える。

「ちょっと、何を言っているんですの？　ほら、謝りなさいな。だいたい、ごちそうしてもらう立場で……」

二人の間に高まる緊張感を察して、千才はけなをたしなめるが、けなはこれも一蹴してしまう。

「先輩は口を出さないでください。たぶん、この人は大丈夫です」

「どう……　るい……？」

千才は問い返す。どういう意味かわからなかったのだ。

「はい、大丈夫です。即座に出てきた大盛りのどんぶり。そして、このどんぶりの磨かれ具合。これは日頃から業務用で大盛りラーメンを食べているということです」

けなはまじめな目をして説明した。

一方成瀬は眼鏡をくいっと持ち上げる。

「私、千才君がお米と指定してきたのでピンときたよ。君はこっち側の人間だね」

「こっち側ってどっち？」

「さぁ……少なくともわたくしたちとは関係ないので、あっち側のことでしょうねぇ……」

阿見と千才が顔を見合わせる。成瀬だけは手を叩いて喜んでいた。

「なんだかわかんないけど、盛り上がってきたねぇ。あれだね、超能力者同士がお互いにひかれあったってやつだよねぇ」

そんな会話を聞いているのかいないのか、けなはびしっと成瀬を指して言う。

「その眼鏡、曇り止め処理済み！　つまり　それは湯気と熱いラーメンで曇らないことを自慢しています！　…[illegible]…で
はないけれど　それに近いラーメンへのこだわりを感じます　あなたのこだわり　見てもら
いましょう。あたしも　お米を出してさえくれれば　こだわりを見せます！」
「うれしいね　久しぶりに会ったよ……。私は私たちのような者を一方的に拘泥者と名付けた！　まさか　この
でさらにもう一人に会えるとは……」
一成は先ほどまでとはノリが変わっている。
「え？　もう一人いるの？」
「世の中変わった人はいるものですのね……。わたくしは　あっち側じゃなくてよかったです
わ……」
「ふぉお！　やっぱり[illegible]たいなものなんだよ　すっごいねぇ」
[illegible]ちはそれぞれうんざりしたり騒いだりしているが　とにかくもけなと一成の間は　わか
り合う何かがあったらしい。
一成は袋ラーメンと湯沸かし、器さらに　炊飯器を棚から出してきた。
「では　こだわりを見てもらおう！　これはラーメンの達人が嫌う[illegible]な[illegible]炊いた米！　こだ
わりがあれば、[illegible]わかるはず！」
[illegible]けなの前に置く。
けなは[illegible]開け　にやりと笑った。

「ササニシキ」
「もうわかったのか！」
「香りでわからなければ、お姉様ではありません。問題は水、そして炊き方」
け一なは炊飯器からどんぶりに米を移し、炊飯器の半分ほどがどんぶりの中程まで詰められた。同時にそれをかきこむけ一なである。
数秒ほども無言で激しくかきこんでから、け一なは顔をあげてにやりとした。
「魚沼産、新潟県産。しかも……新米……。水は水道のもの。炊き方は炊飯器のお任せ。いくらお米を軽視しているとはいえ、少しおざなりでは？」
一成は、衝撃的なことが目の前で起こっているとでもいうように、目を見開いた。
周囲の人たちには、どうでもいいことに感じられていたが、一成は対抗意識のようなものを燃やさずにはいられなかったらしい。
「よろしい。ならば、本物のラーメンの味わい方を見せてあげよう」
一成は、どんぶりにお湯を入れ、軽く回転させてから、流しに捨てる。
「まずは、こうしてどんぶりを温める」
そして、袋麺の中身をどんぶりに放り込んでから、千春がお湯を注ぎはじめ、それがどんぶりの四分までいったところで、生卵を手に持っていた卵を片手で割り入れた。

「卵の絶妙な固まり具合を実現するための工夫！　そうよ、もう一つ工夫、卵白を瞬時に落とすことで、麺の上に落ちても麺と卵がくっつかないんだわ！」
けいなが驚きの声をあげた。
「それを見抜いたのは、君が初めてだ！　そして、お湯を入れきったら、即座にふたをする！」
一成が手早く素早く動き、生の卵の殻を捨て、どんぶりのふたを握ると、お湯を注ぎ終えると同時に素早くどんぶりにかぶせている。見事な早業だった。
「すごい……けど、これ、インスタントラーメンですよね？」
どんなときでも当然のことを言ってしまう私の発言。このときも当然のことを指摘した。
が、一成はひるまない。
「だが、たかがというなかれ、だよ。君、このインスタントラーメンは数え切れないほどの味が販売されているのだよ」
「一生懸命、まさに悠久の時を超えた概念の食！　刮目して見よ！　みたいな感じ？」
熱く語っているが、私はもちろん微妙な顔になる。
しかし、一成はけっしてそんなものは大げさに言っているわけではない。
「何せ、ずともラーメンのできあがりのタイミングは心得ているのだ。不安はない。食べている間も麺はのびていくのだから。店舗でラーメンを注文するときも、麺の硬めが当然だが、ハリガネ、粉落とし
まで行くと、これは通を通り越してもはや邪道！　それで、麺が本当にうまいのかと言いたい！」

一成は熱くふるう。けいなはその熱意になにやら自分と共通するものを感じているのか、目を輝かせてそれを

いている。

やがてきっちり三分待ちで、一成はすぱっとふたを取り払い、箸で素早くラーメンをひと回し

「ここで一度スープをなじませるのが重要。卵の黄身を潰さず、白身を拡散させずに旨味を絶妙に出す！」

一成は元気にラーメンをすすった。

「お見事」

その豪快なすすりっぷりに、けいなが負けじと追う。

そして、対抗心を激しく燃やしたのか、自分の前にお櫃を持ってくると、そこから直接ご飯をかきこみ

はじめた。

「うおおお！　ずぞぞぞぞぞ！」

「ほぉおお！　もがもがもが！」

奇怪なユニゾンが眼前で展開しはじめた。周囲の人たちは、さすがに呆然とそれを見つめることしかできな

い。

「いま、世界には飢えている人たちが……」

京子がやくたいもないことを言う。

「もうそういうのはいいないよ。いや、言いたくなるのはわかるけれども……。、今日ばかりはけっこう

なはずなんだよなぁ……」

丸山虎丸はぼやく。

しかし、唐突にその昼休憩は終わりを告げた。

屋上の扉が開いて、中に入ってきた者があったのだ。

「大丈夫ですよ。その心配は不要です」

聞いているだけで、脳がぼんやりしてくるような甘い声。

「そういうことなら、もうとぼける必要はないな」

一成はラーメンを食べ終わってどんぶりを置いた。一転して、というほどではないが、声もシリアスなものに変わっている。

「……本物か？」

丸山虎丸は戸惑いの声をあげて、そちらを振り向く。

そこに立っていたのは、丸山虎丸の知った少女の姿だった。

いや、この学園の生徒は顔だけは誰でも知っている。天才も、一成も虎丸も、さすがに一瞬、動きを止めた。

「加寿子……様」

一成が思わずそうつぶやいた。



眠ったようなぼんやりとした意識のまま日々を過ごすのは、台にとっても楽なことではない。

絢子もそのような状態が続いたことで、ふさぎがちになるというよりは、眠りがちになってい

た。授業や食事、入浴以外は外に出なくなり、ベッドで転がるばかりの生活になっていた。日課の剣術のトレーニン

グも欠かさなかったが、マナがうまく機能しないことで低下した身体能力は、彼女から瞬く間にやる気を奪

っていった。今や、刀は重い金属の塊であり、彼女の杖としてもそれを使う気になれなかった。そもそ

も、装備して外を歩くこと自体が禁止されてしまっていた。

寝ていても、夢見るのはかつてのことばかりで、寝ることすらつらくなっていた。心が沸き立

といえば、メールが来たときくらいで、着信音が鳴ると、寝ていても、つい跳ね起きてしまうのだ。

メールに何を期待しているかは、自分でもよくわかっていた。

──紗伊……！

メールが来るたび、一瞬紗伊からのメールでないかと期待してしまうのだ。しかし、それが無駄なことである

のは、理性では理解している。今や、外とすべての情報が遮断されているのだ。メールが来ることはないだろう。

その日も、メールで飛び起きた絢子は、相手を見て、落胆するという、いつもの行為を繰り返してしまった。内容も毎朝のよ

うだった。そもそも、来るメールは、クラス全員への事務連絡か、ゆう子からのものくらいしかないの

だ。

「ゆう子か」

つぶやいて、メールを棒読みした後、ぼんやりした顔で開く。が、そこに表示されたメッセージを見て、さす

がに驚きの声を漏らした。

「なんだって……！」

そこには、人間達にさらわれかけた事件の顛末が記されており、今はヒロシに助けられてかくまわれて

いる旨が書かれていた。

絢は部屋のモニターをつけてニュース放送を見ると、武装集団が宮殿を襲ったことが報道されていた。それが[illegible]た

であることは明らかだった。

――ということは、まさか……！

寮の窓を久しぶりに開けて外を見ると、街の様子が少し前とは明らかに変わっていた。騎士団の服を着た人間達が闊歩し

に外出しないように呼びかけている。

「なんてことだ……」

絢は戦慄をおぼえつつ、再びメールの文面に戻る。あまり考えたくはないが、メールが盗み読みされているとす

れば、これは当然ながら[illegible]筒抜けになっているだろう。ゆう子も知っていると見て、文面の最後は、こう打

ってあった。

《……わたしが小学生のときにお姉ちゃんに連れて行ってもらった〈場所〉なんとかして来てくれれば　な

とかするよ》

確かに、これなら万一文面を読まれても、綿貫以外にはわかるまい。

しかし、問題は、戒厳令下のこの状況で、どうやってそこまで行くのかということだ。今の綿

のない、ただの女子高生なのだから。

「考えろ、考えろ。行動しなければ、すぐに誰かが来てしまう」

綿貫は落ち着こうと、そう口に出して言った。

メールが来ずとも、ゆうの姉という立場、そして両親の関係を考えれば、既に綿貫は拉致されていたはずだ。これまでは綿貫が気を失っていたことは、ころねを通じてゼロにも知れていただろうから見逃されて

きたのだろうが、ゆうが行方を明らかにしたからには、綿貫もただではすまないだろう。

綿貫は窓を閉め、刀をつかんで廊下に出た。だが、その時にはすでに遅かった。廊下の向こうから歩いてくる騎士団の騎士の

がある。反対側を向いたが、そちらにも同じ体格の騎士が

「くっ……」

綿貫は自室に戻った。窓を開ける。

――飛び降りられるか……？

綿貫の部屋は三階。マナが強力な身体能力を持っていた昔ならともかく、今は無理に決まっている。

背後でドアが開いた音がした。

万事休す。

――飛ぶしかない……！

絢は窓枠を乗り越えた。かつてのような浮遊感はない。ただ、身体が冷え込むような落下感だけが襲ってくる。

「きゃああ！」

姿勢を制御できない。足から下に落ちることすら難しい。

――死、ぬ……？

そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

――……死ぬ……！

彼の、名の彼イメージを、強烈に求めていた。

と、身体が誰かに抱かれた感触があった。

――幻覚……？　いや、これは……本物……まさか……！

「死ぬ」

絢は声をあげて目を開いた。

「アニキじゃなくてすいませんね」

嫌みでもなく、ぼやきでもなく、年各申し訳なさそうにヒロシが言った。絢のスーツを着たヒロシが絢を抱きかかえて飛んでいることに気づいた。

「なんだ、ヒロシか」
「なんだってことはないっすよ。最長老の命の恩人っすよ」
「悪かった。助かったよ。ゆうが手配してくれたのか」
安堵(あんど)の息を吐(は)き出す。
ヒロシは紗希を抱きかかえたまま、魔人達が追って来ない場所に飛んだ。
「そういうことです。ゆうちゃんが待っている場所に行きましょう」
「待ってたということは、大長老の想定通り」
「はい。そこでいい隠(かく)れ場所(ばしょ)があったので、一時避難(ひなん)してもらいました」
「もう大長老も言ってたよ。だが、大長老も思ってた、待ってたんじゃないのか？ なんとかならなかったのか？ ゼロは魔人達を殺さない、と聞いたぞ。それなら、もっと穏健(おんけん)な方法があったんじゃないのか？」
紗希が言うと、ヒロシは首を横に振った。
「甘かったとは思いますが、ゼロは魔人達を殺さないからこそ、誘拐(ゆうかい)して洗脳しようとしているんです」
その真実を聞いて、紗希の背筋に冷たいものがはしる。
「そんな……。だが、そうなると、これからどうするつもりだ？ もう間に合わないんじゃないのか？ 世界中がゼロの支配下におかれているんだぞ？」
「あっしは……いや、俺達は、この姿でいる限りは、まだ魔王(まおう)を倒した救世主と思われています」
ヒロシは真剣な顔で決意を口にした。

「だから、できる限りの魔獣を倒してみんなを守り、避難を呼びかけて回ります。ゼロを倒す、と。一人が決意すれば、人類は打ち勝てると証明してみせます！」

そのヒロシの決意は頼もしかった。確かに、ゼロが人間を殺さないとしたら、それ以外に手段はないだろう。だが、綱吉の心には、妙な違和感が残った。

「……それでいいのか？　何か……何かが違っている気がする」

綱吉はつぶやいたが、ヒロシは首を横に振った。

「ゼロを倒せば、すべて終わります」

「ああ……そうなんだろう……な」

綱吉はそう言ったが、もちろん違和感は消えなかった。そして、その違和感の理由に思い当たる。

——そうか、人間なら、こうはしないだろう……。いや、彼らどうしたというんだ？

○

「[illegible]」

綱吉は慌てて自分の思いを正した。もっとも、そうしたのは彼だけだった。人々はその後から〈幸運〉に尽くすというを考えは、端から持っていなかったし、人間だけではなく、誰でも同じ態度を持するのが常。今ももちろんそうしていたからだ。

しかし、内丸与平は、帆村中畑の偉容のようなものは感じ取っていた。
彼女はただ立っているだけで、空気を変えてしまう。
笑みが必要であることはもちろんだが、なによりその微笑みが唯一無二のものだった。見ているだけ
で、この笑顔を消してはならないという気になってくるのだ。
平凡な者などは、平伏しそうになるのを堪え、我慢しているという状態になっている。それを察したの
か、帆村中畑は「そのまま」と手を振って、ちゃぶ台の前に座った。
「楽にしてくださいな。いろいろとご説明しなくてはならないことがありますので。ああ、一さ
ん、お茶を入れていただけますか？　それと、あれを」
そう促された一成が立ち上がると、戸棚からお茶とお盆と、小さめの壺を取り出してきた。
「どうぞ」
一成がお茶を入れた湯飲みを差し出す。それを両手で受け取った帆村中畑は、一口飲んでからにっこりと笑う。
「おいしい」
その微笑みを見ているだけで、幸福な気持ちになってくるというのは、決して大げさではなかった。その
に、その場の誰も言葉を発しなかった。時間が止まったほどあるはずなのに。
「そして、お茶請けは、これが必要ですわね。紀州南高梅」
帆村中畑は壺を開け、そこから梅を取り出した。大粒の、それを上品に口に運び、極上の微笑みを投げかける。
「ああ、とてもおいしい」

青梅がまるで酸味を持っていないかのような穏やかな表情で言った。その顔――彼女こそが一成の言っていた
た。一けなの以外「黒魔術研究会」と知った。つまり、しばらく前から青梅先輩はここにいたのだ。

「……説明してもらえますよね？」

一成が言った。

青梅先輩が一成を見てうなずく。一成は了解した、と頭を下げてから口を開いた。

「結論から短く言ってしまうと、私は黒魔術の秘密を守る役目を負っている。つまり、私が長老」

「……あなたが長老？」

一成が絶句した。

「黒魔術師の長老」

青梅が問うと、一成は説明した。

「黒魔術研究会の間だけ噂されてきた伝説がありますの。長老は誰も知らない真の黒魔術の秘密を守り続けてきたと。ですが、誰も見たことがないので、てっきり噂だけだと……」

「ああ。そして秘密は、もちろん黒魔術のことを指す」

一成がそう言って立ち上がった。そして、部屋の扉を開け、奥へ入るように促す。皆一成の後に続いて扉をくぐった。

扉の奥は倉庫につながっていたはずだったが、扉を抜けてみると、そこは奇妙な装飾の部屋の中だった。

「……、異界とは違うな。転送されたのか」
阿知乃はつぶやく。
「そうだ。ここが君の生まれた場所」
一成が何気なく言った。が、それは阿知乃にとっては衝撃的な言葉だった。
「……な！」
周囲を見回す。
、実験室とでも言うべき場所。機械の数々などの、広さの部屋の中央に、円筒形の透明なケースが設置されている。そこか
はチューブやケーブルが伸び、コンソールを備えたパネルに接続されていた。
「魔王は人間であって、人間でないものです」
希乃が口を開いた。そして、こう続ける。
『最初から語らなくてはなりません。最初の魔王、それはご存知の通り、ゼロ、です。人類の抑止力として、兵器としてゼロを誕
せました。しかし、ゼロは、人類を滅ぼしたがっているという情報を得ました。そこで、人類は滅ぼさ
よう、人類すべてを洗脳し、自分の命令に従わせようとしたのです。それに対して、人類が戦いを挑んだのが、一番目の魔王戦
た。そして同じことが起こっています。
一番目の魔王の問題はまだ少なく、人類は戦いに勝利することができました。しかし、新たな魔王の開発は失敗しました。ゼロ
を放棄することはできなかったのです。ゼロこそ、ひとつの奇跡でした。現在、ゼロがど
うしてその能力を持つに至ったのかはわかっていません。

そこでゼロをベースに糸杉が作られました。糸杉は人間の思考データを蓄積し、それを利用することで、人間と同じ思考方法を得ること
ができました。その結果ゼロのように狂わずに済んだのです。完全な人工知能は、狂っているものなので
しょう。人工知能は、人間のように矛盾を抱えた思考によってのみ正気を保てるとでもいうことなのでしょう。
人間の思考データの蓄積は、現在のライフログと同じものです。糸杉は死んだ人間の脳内データをすべてログとして残すこと
で、糸杉の思考パターンを増やしていきました。しかし、糸杉は人類の進化のために人類が滅びなければならないとい
う結論に達しました。ゼロと理由は違えど、人類はいずれ滅びると告げ続けたのです。
糸杉は悪意で人類を滅ぼそうとはしませんでしたので、その結論についての研究が人類の手で行われました。そして、
での神、つまり上位次元における統合体としての神がいるのではないかという結論に達しました。そ
れが人間を人間たらしめる自我を生み出したのだと信じるに足る理由があるとしたのです。研究者たちは、その自我の
のを自同律と呼び、神格視しはじめました。
それは純粋な意識の個性と同じだと考えてもらって構いません。神が存在するから人間に自我が生まれると信じたのです、転生とで
も言いましょう。その個性の持ち主こそ、自我を持った人間たちです。
そして、その個体が彼に自我を作り出せる意識になりました。人類が滅ぼすことが可能だけの能力を持った存在を作り出た
のです。最後に残った人間であって、人間ではない。自分のマナを使って作り出した真実の人間です」
男はその真実の言葉を静かに与えた。
「僕、そんな存在って……」
同時に少年は絶句する。

けなと二人、白河は舞斗に寄り添った。

舞斗は、そんな彼の姿を見ても、微笑みを絶やさなかった。そして、こんな言葉を発する。

「健気に実現するもの。時に精一杯を切り捨てるのが健康で良いと思いますよ」

「……そ、そんな言い方はないでしょう？　あちゃん、ショックを受けているんですから」

けなが抗議した。

しかし、微笑んだまま首をかしげる舞斗である。

「あら？　でも、真実を知らなければ、これからのことに対処できませんよ？」

「だけど……！」

けなが何か言いかけるが、白河はそれを制した。

「ありがとう。でも、確かに先を聞かなくちゃいけない気がする」

「あちゃん……」

けなは引き下がった。

舞斗は微笑んでうなずいた。

「やはり魔王はよくわかっていますね。先を続けましょう……。、自己すなわちの本当の存在、純粋な価値のかもしれません。つまり、自己の存在は確認されていません。まるで悪魔の存在など現実らしくないのかもしれないということです。ですが、重要なのは、このように我々の神、つまり進化した人類の神が、自己という概念を悪魔の存在の[illegible]

しているということです。少しおもしろいでしょう？」

自分の研究を誰も知らなかった。だが、それがさして不満もないというように、無表情に淡々と話を続けた。

「結論を言いましょう。彼は魔王の体内から生み出した最強の兵器です。それ以上でもそれ以下でもありません。帝国を動かしているる

魔力のすべてをあなたは使うことができるのです。覚醒しさえすれば」

「そんな……！」

[illegible]つい声をあげていた。

確かに、以前、望一郎から聞いたことと矛盾しない。神や魔王、いわば人外であることは認識していた。だ

が、まさか覚醒さえすれば、魔王並みの力を行使できるような存在とは。だが、覚醒の、ピタハウゼンがいた

ときにも覚醒していたのではなかったか。

「だけど、誰もが平等に魔法を使える世の中のために、ピタハウゼンを作ったはずでは……！」

死んだ娘は、自分の存在を無駄にしたくない、とでも言いたげに、悲痛な声をあげた。

しかし、無表情はにべもない。

「ピタハウゼンがいれば、すべての人が魔法を使えるという理由しかなっていませんよ。それは、目

たちは、その危険性故に、全員殺されました。いいえ、最低限だけは残されましたが、その後の魔法使いたちは、現在の魔法使いたちか

ら断片的な情報しか得られていません。平等という価値の基盤になった。ただのハッタリということにでもなるで

しょうね」

「最低限だけ残された……？」

恐るべき考えが浮かび、まさか、と阿見光一が声をあげる。それを察したかのように、有栖川はにっこりと微笑んだ。
「そうです。長老を殺すことで魔術協会を乗っ取ったのは、当然ながら、公国の皇帝です」
「……！」
阿見は完全に言葉を失っていた。
「それなら、わたくしたちの動きは……！」
「無意味ではありませんよ。ただ、あなたの力を求めていたというだけのこと。公国の穏健派は、今回の事件を知らなかったんですよ。皇帝の独断は、関わりませんからね」
有栖川の笑みに迷いはなかった。まるで阿見光一たちの心情を読んでいないかのようだった。
しかし阿見光一は、この場の出会いの意味を敏感に察知した。
「では、ここで出会ったことは偶然ではないんですね。つまり、あなたは僕がここを見つけるだろうと予測して……」
その有栖川はうなずき、小さく手を叩く。
「ああ、すばらしい。この代の魔王は鋭いですね。私は、彼らに追い出されてしまいましたので、あなたの力を借りに来たんですよ」
「あなたの力を借りに……？」

「四番目のは、私ではなく2Vという私の双子の姉です。ゼロを使い、私怨から四番目の座を簒奪したのです。
もちろん、あなたは四番目の奪還に協力していただけますよね？」
九番目はかわいらしく首をかしげた。
しかし、阿九児は何も言えなかった。
「あら、そうだ。説明が足りなかったですね。ゼロと2Vを倒せるのは、たぶん、魔王として覚醒したあなただけでしょうね。だからこそお願いしているのです」
九番目がもう一度首をかしげると、阿九児は小さく言葉を発した。
「僕が、覚醒？」
「そうです。あらら、また説明していませんでした。魔王の権能のすべての力を使えると言いましたよね？
その魔王は、過去のライフログに由来しているんです。異界の人間の思考データを抱えているほど強大な魔族ができあがる、と
てくださいな。覚醒というのは、それをすべて使えるようになることです。そうですね、経
いましょう。人間がたくさん死ねば、その人間が死んだ数だけあなたは強くなります。ですから、魔王の力の解放を
していくのです」
面白そうに九番目が笑った。
「そんなに『忌まわしい』力なのか」
阿九児がつぶやいた。

「そうでしょうか？　考え次第ですよ。無実の人が殺されたの人の分け前が上がるというわけではないのです
し。ですから、あなたが悪いことをしているということでもありませんし」
「だが、覚醒した僕の力、つまり、何の制約もないんだろう？」
「そうですわ。あなたが世界を滅ぼしも救いもする力を持つ。あなたの本当の姿、それでいいわけがないでし
ょう？　だから、私はもう一度言います。あなた、早く仕事しなさい」
有井寺は阿九に向かって手を伸ばした。

○

納村ヒロシによって連れてきた場所は、周辺の山奥地にあるお化け屋敷の屋根裏だった。今、人はその屋根裏の中、数人の余裕
って隠れることの可能な広さのスペースに座っている。
「ゆう子、ヒロシは何と戦うつもりなのか？」
隣に座るゆう子に、納村は問いかけた。納村はこの場所を示すと、ヒロシは再び飛んでいってしまってい
た。
「そうみたいだよ。わたしのしたことのせいで、そんなことになってしまったみたいだ
けど……」
ゆう子は自分の行いを悔やんでいるようだった。

「だったら、ここで座っていていいのか？」

「だけど、わたしが動くと足手まといにしかならないから。そりゃ、悔しいけど、できること
が何もないんだよ。もし、力があっても、何ができるかどうかわからないけど」

綾乃は、先ほど聞いた言葉を思い出す。

ヒロシは自分の命を犠牲にして、人々を立ち上がらせるべく戦うと言っていた。

――だが、ゼロを倒した時、世界はそれで終わるのか？ 人々が立ち上がった後、何が残るというんだ

その時、英雄は一人取り残されてしまうんじゃないのか？

「やっぱり、ゆう子あなたが何もしないと駄目だ。男が何か無茶をしようって時、仲間はそいつを
しちゃ駄目だ」

そう語りながら、綾乃は自分のためにそれを言っているような気がした。

「恋愛とか友達で、どうこうするのは難しいとは思うが、誰に対しても無条件で支援してやれる奴がいない
と、そいつは倒れてしまうよ。たとえ成功したように見えても、みんなからちやほやされてい
ても、それは一時的なことだ。失敗すればみんな離れていく。だったら、無条件で何かしてやれる奴
あいつには必要だろ？」

綾乃のその言葉に、ゆう子はうなずいた。

「言っている意味はなんとなくわかるよ。でも、お姉ちゃん、ヒロシ君はこれから先のことをわかっ
ているみたい……」

「どうしてなんだろうな。わかる、といえばわかる気がする。不吉な予感が消えないんだ。もしかしたら、自分のことが誰かの手のひらの上で操られているみたいな……。そして、その中の一コマの一つにヒロシも入っているみたいな感じがしてならないんだ」

「不安になるのはわかるけど……ここがお化け屋敷だからって思いたいな」

ゆうは努めて明るく言った。

絢は軽く笑った。

「お前が連れてきたとき、自分から入りたいと言ったくせに、入ってから泣いたよな」

「そうだっけ？　魔獣が出現して混乱しちゃったせいばかりじゃないんだな」

ゆうは自分にあきれたように言った。

「さて、ヒロシはどうしているかな……」

絢の携帯端末にニュース配信記事の見出し、新着動画が出ていた。

キャスターが魔族の殺戮を繰り返し強調している。つまり、これは沢山の人々が不安を口にしていることを表していた。その

は、キャスターの後ろのモニターに映し出されていた。

《かつて魔王を倒した、謎の勇者が再び出現しました。ですが、今度は人々を混乱させる敵としてです。彼はこともあろうに

を残虐に殺し、市民も国家も支配しようと訴えています》

キャスターは無表情でそう告げていた。

「嘘を報道している……」

ゆうは不満げに言った。

「だが、キャスターは問題はない。もしかしたら彼女は使い道があるさ」

翔がそう言った。そして、その結果は明らかになった。

《北地区から映像が入っています。内閣府の発表、亡者たち、すなわち死者たちが次々と暴動を起こしています。国民の皆さんは、危険地域には近づかないようお願いいたします》

キャスターは淡々とそう繰り返していた。

だが、北地区の現場のレポーターから送られてくる映像は、ヒロシの呼びかけが入っているものがあるらしく

にある数台のモニターからその音声が小さく聞こえてくる。一般視聴者には聞こえぬようにしてあるため、何を言っているのかはわからないが、ニュースの報道現場は、皆それを聞いているのだ。

といきなりキャスターの口調が変わった。

《いえ、ここで真実をお伝えしようと思います。かの生命体に悪意はありません。もちろん、立ち上がったものも内閣府の指示する危険すらありません。実際の危険はゼロです。皆さん！　これを倒すために我々も立ち上がりましょう！　私、免職を覚悟で叫びます！　皆さん！　立ち上がりましょう！》

キャスターは叫び、ヒロシの映像を流しはじめた。

が、それも一瞬のことで、画面は子供向けのものに切り替わり、やがて番組編成が変更された。それでも、翔とゆうは顔を見合わせて、微笑みあった。

「動き出したね」

「ああ、どうなるかな。だが、これで私たちも動けるようになったな。奴を加ろう」

ゆう子と綺羅も立ち上がった。

「うん。でも、ゼロを倒せるのかな？　神ゼロの手下も落ちているし……」

「え？　ゼロを倒す方法を見つけたからああ言っていたんじゃないのか？」

綺羅は驚きの声をあげる。

「え？　だって……そんなのわかっていたなら、すぐできるんじゃないの？」

ゆう子はきょとんとした。

それを見て綺羅は自分の過ちに気づいた。

「しまった……もしかして、ヒロシたちはけいすを知らないのか？」

「けいす？」

「かつてゼロを封印したとされる人物だ。そうか、知っているとばかり思っていたが……。」

「あ、私たちにもやることができたぞ。私はけいすの姿をしっかりと見ているのだから」

綺羅は体が浮いて元の所に戻ってくるのを感じていたが、その一方で嫌な予感が抜けていくのを止めることができなかった。

○

「とうとうはじまったな」
2Vは言った。
すでに殿堂内の職員たちは、逃げ出している。2Vがこの場を離れるように指示を出したのだ。だが、殿堂の中は忙しそうに動き回る人影ばかりが目につく。もちろん、すべてが人造人間。結局のところ、2Vはこの広い殿堂と心中ということになる。
「最後はあなたを消滅させるつもりですか？」
話しかけてきた人造人間は、ゼロの声をしていた。
2Vはうなずく。
「この部下たちもそういうことだろうね。ただし、そううまくはいかないと思うね。賭けてもいい。こちらもただでやられるつもりはないよ」
人造人間を乗せたスクリーンには、殿堂へ向かって迫ってくる射手たちの姿がある。殿堂の周囲には防御装置の発する炎が隔壁のようにあがっている。人造人間たちの情報はゼロに集中しているため、人を殺すことはできず、自分のように集まっている者たちのいるエリアは人造人間に破壊されて、突破されているらしい。
「しかし、それならばあなたが直接手を下せばいいはずです。人造人間相手では、必ず突破されます」
ゼロが言った。
スクリーンを切り替えると、殿堂への通路は人造人間であふれていた。人造人間はラッシュアワーのごとくに密集する人々を傷つけぬように押し返しているが、ほぼ膠着状態を呈している。人込みは一向に解消の気配を見せない。

「破壊されても問題ないんだよ。いや、破壊されたいというところか」
２Ｖは玉座から、ひょいっと飛び降り、自身の体を呼び寄せた。
「さて、これから舞台（ぶたい）だ」
「舞台は、この場所という事ですか？」
ゼロの質問に、２Ｖは笑ってスクリーンを指差した。
予想通りにあおり、この騒動を引き起こしたブレイブ・ヒロシが、宮殿に向かって来ている。宮殿敷地内（きゅうでんしきちない）でエネルギー補給できない状態を、克服（こくふく）はしていまいが、何かの対策を考えているだろう。
「私の死に様を見てやろうということだ。それを見つけてやることこそが私の目的なのだから。そして、その仕上げのために必要な一つの事柄（ことがら）が、達成できていないが、事態がここまで進んでしまってはやむをない。その件…有希けいすの捜索（そうさく）は進んでいるのか？」
そう聞かれて、ゼロは答える。
「時期的に間もなく発見できるでしょう。優秀（ゆうしゅう）な人材を送り込みましたので。しかし、何を見るおつもりなのですか？」
その言葉が発せられた瞬間（しゅんかん）、宮殿全体が振動（しんどう）した。
地の底から響（ひび）いてくるそれは、間近に迫ってきた人民たちのものだった。
しかし、２Ｖはこの状況下でも、不敵な笑みを見せた。

「負ける？　そうはいくか。好都合だ。本体が出ていいぞ。まずはあの最終兵器を引っ張り出さなければならな

いからね。スタンスティック、及び催涙弾の部隊を出そう」

２Ｖは命じた。

「殺そうとはしていない、けど……！」

ヒロシは目の限界を見て、怒りに身を震わせた。目の前まで迫っていた集団の頭部が見当たる。次、目の前まで、つながる橋の手前に倒れてい

た。橋を渡る者が刺されているかのように。そこから先へ進んで行くことができない。橋の上は囲まれており、スタ

ンスティックを手に行く手を阻んでいた。

「一気に入ってから十分……いや、攻撃のエネルギーを残しておかなくてはならないから、何分どか……

ヒロシは橋の上へ向いた。そこに巨大な壁、すなわちゼロの本体が浮遊している。それを破壊するこ

とができれば、おそらくゼロの活動を停止させることができる。そうなれば、２Ｖの計画も終焉

「どうする……突っ込むべきか……？　この分ならうちに決着をつけられなければ終わりだ」

ヒロシは自問した。

○

「左手をお取りになりませんか？」

有帆は聞いた。
阿比留は静かに有帆を見据えていた。
「僕がそうしなければならない理由がわかりません」
落ち着いた声で阿比留は言うが、有帆はころころと笑った。
「あらあら、そうですね。言われてみれば理由はありませんね。でも、あなたも、あなたの
て来ているんでしょう？ それならば、断る理由はないじゃないですか。そして、今この
の奴隷を奪われています。お願い、まずはこれを倒していただきたいの？ ねぇ、よくって？」
その理屈は阿比留にもよく理解できていた。しかし、素直に手を取る気にもなれなかった。
「そのために、僕をここで待っていたんですか？」
「そうですよ。ゼロの法則は知っていますもの。対抗できる者はあなたくらいしかいなくて」
有帆はそれが当然のことのように微笑んでいる。すべてが自分のために存在すると言いたげな態度だった。だが
それが彼女にとっての当然で、有様なのも、その場にいたすべての人間が理解できていた。
それでも阿比留は有帆に鋭い目を向けた。
「なぜ、弁解しないんですか？」
考えていることを言い当てられた、という風でもなく、有帆は、純粋にその質問の意図がわからないというように首をかしげ
た。
「弁解ですか？ 何の？」

「どうして、僕の……この内部の秘密を隠していたんですか。そのために何度も戦争になったんじゃないんで
すか？」
そう問い詰められた男神様は、口元に手を当てて上品に笑った。
「ほほ、ねえ、おかしいこと。だって、歴代の魔王も自身の秘密を知って、戦争を起こしたんですよ。神自身が使ったシステムそのものを破壊しようとしたのです」
「だが、そんな危険な存在なのに、魔王は生まれる……いや、誰かが生み出す」
「はい。魔王は必ずいなければいけないのです。何者かに一度生まれなくてはいけないのです。そうでなければ、神のシステムにおけるバグ……たとえて言えば膿のようなものが溜まって、神のシのが破綻します」
「それなら、僕は……」
阿九は口をつぐんだ。
それが事実なら――そして、それは事実なのだろうが――魔王と呼ばれた者たちは、この世界を支配するシステムそのものを破壊するために、あるいはシステムに従うことを守るために、自らの先の何もない戦いに身を投じたことになる。だが、それが正しかったわけではない。決められた運命に抵抗してそうなったわけでなく、自分の意志でそれを選んだということだけは間違いない。
「僕は、僕であっていいんだな」
阿九はつぶやくように言った。

「はい？　どういう意味です？　あなたは魔王、凄（すさ）まじい力が宿った不老不死の存在なんです。だから、その
で……」
有井はその言葉を言い終わる前に、阿児が遮（さえぎ）った。
「違うな。僕は、僕だ。僕にその資格があるかは僕が決める」
阿児は自分の目を有井に向けた。
「あなたにそうするだけの覚悟がありますか？　自分を背負（せお）うだけの？　ないでしょう？」
有井は笑みを絶さない。
しかし、阿児は首を横に振った。
「いや、僕には彼女たちがいる」
けなを見た。
子を見た。
海恋を見た。
そして、その場にはいないが、絢、ころね、ヒロシを阿児は見ていた。
「僕は、彼女たちを愛する僕。だから、僕は僕だ」
けなたちは言葉を発しなかった。だが、その目は阿児をしっかりと見つめていた。
「では、あなたは自分の因果に従わないのですね？」
有井は聞いた。

「確かに、僕はあなたの思惑通り、２Ｖとゼロを倒そう。だが、僕の心には手を出すな」
阿死丸はそう言うと、満足げに笑ってうなずいた。
「ほほ、面白い方、いいでしょう。それなら……」
有希がそう言って、阿死丸に向かって一歩を踏み出した時だった。
細い糸のような光芒が暗闇をよぎった。
それは背後から阿死丸の胸を貫いて、前へと抜けた。
「え……」
阿死丸は動きを止めた。
胸から血が流れはじめた。
「あ、あちゃん……！」
「阿死丸様」
「これは、レーザー……！」
けな、不気味な獣の悲鳴のような声をあげた。
阿死丸は自らの胸に手を当て、その手のひらを浸した血を見て、信じられないという顔になった。そして、光芒が放たれた方向を振り返る。
「ころね……！」
そこには、レーザー銃を抱えたころねが立っていた。

阿呆丸は、奇妙な悲しみに顔をゆがめたが、それと同時に、ころねは違和感すら感じられない無限の距離を、阿呆丸から遠退いた。

「通過して、有希子で移動の宿かと思いましたが、やはり大丈夫みたいですね。とはいえ、有希子だけでなく魔力の干渉はあります。まさに一石二鳥の狙いを避けないでください。魔力よりも有希子を殺すように仕組みつけられています」

ころねは静かに言い、よろめいた阿呆丸の身体の陰からその姿を見るようになった有希子の目標に狙いをつけた。

「いかん……！」

と、それまで黙っていた一成が、足元の床に向かって手をかざした。その手に呼応して無数の光が輝く。

「転送魔法」

その妖体が気づいた二人が声をあげた。

この部屋の四隅の内側に、各者を転送する魔法陣がかけられていたらしい。一成はそれを発動させたのだ。

阿呆丸、それに駆け寄った一成たち、そして一成と有希子の姿が消え始める。が、ころねは素早く目標に滑り寄ると、ポシェットから出した転送座標の書き換え素材をそれに投げた。

「これで、転送魔法の座標は変更されたものになります。すなわち、この転送魔法は、こちらの指定する座標に出現することになります」

ころねはそう言った。

「しまった……なんと迂闊……！」

一成が悲鳴のような声をあげた。

が、一成たちの姿は完全に消え、そして、ころねの姿も消えた。

次の瞬間、彼が視たのは、どことも知れぬ森の中だった。

[illegible]、その周囲には、けなたち。天人、その[illegible]、そこから少し離れて一成、さらに離れて、ころね、という[illegible]のまま

だ

「逃げようとしたのでしょうが、あまりに動きが遅い。この森の中から、[illegible]の逃亡は[illegible]でしょう」

ころねは言った。

「こ、ころね……」

[illegible]はそう言いながら、よろよろと立ち上がる。

「[illegible]の間に入らないでください」

ころねは[illegible]構えた。

「ころねちゃん、やめて！」

けなは叫ぶが、やはり[illegible]だった。ころねは[illegible]のままだ。

「やめろ、ころね。誰も撃つな……！　僕はいい。だが、君が人を殺すなんて……」

[illegible]ころねの[illegible]ふらふらと[illegible]。

「[illegible]人なく、[illegible]人はありません。それでは、さようなら」

ころねは言った。

「やめろ！」

力を振り絞った死刑囚がころねに飛びかかる。ころねが構えていた鋼鉄の銃身に抱きつくようにしてその照準を無理矢理自分から外

を振り返って声をあげた。

「逃げろ！」

しかし、それを聞いた神崎は、諦めるように首を横に振った。

「逃げろ？」

「そうだ、逃げ……」

そう死刑囚が言った時だった。

「魔女だと言ったはずです」

ころねがその腕力で鋼鉄の銃身を死刑囚の身体の下にねじ込んだ。銃口が死刑囚の腹に押しつけられる。

「あちゃん！」

けながら死刑囚が駆け寄る

が、その次の瞬間には、死刑囚の背中から銃弾が突き抜けていた。

「……！」

けながら声にならない悲鳴をあげる。

死刑囚の身体がずるり、と下に落ちていく。

ころねが無造作に死刑囚の身体を振り払った。

「ぐ……」

阿九は地面に倒れてうめいた。まだ息があった。

「あーちゃん！」

「阿九」

けーなと示子は阿九に駆け寄る。恵は震えて身動きが取れずにいた。

しかし、そんな状況であって、華子だけは、まだ平素を装うように阿九を見ていた。

「どうして、逃げろ、なんておっしゃるの？」

華子がそう言った。平素を装うように。

口から血を流しながら、阿九は答えた。

「あなたも僕と同じように、生まれつき力を背負わされた人だからだ……。あなたを守ろうと思ったのは……。そういう人間がかつて僕にもいてくれた……。僕の正体を知りながら、共に戦いに付き合って笑って死んでくれた女性が……」

阿九はうめくように言った。

「あーちゃん、もうしゃべらないで……」

けーなが阿九の身体を助け起こす。

「ああ、本来の姿に覚醒えしていれば、こんな傷……」

示子は悲痛な声をあげた。阿九は、治癒（ちゆ）の術を使ってはいるが、まるで効果を発揮（はっき）しないのだ。



死神の顔はみるみる赤みを失っていった。けなを見て、微笑むように口を動かしたが、やがてその口は力なく垂

けて傾いた。

けなの手の中で、死神の体は力を失った。

「あちゃん！」

「死神様」

口々に悲鳴の声をあげる。死神を生き返らせようとするかのように、その体にすがりつく。

しかし、ころねは、ちら、と死神の体を見ただけだった。彼を迂回して前へ出る。

「まったく、あっけない。自分ぞ死んでまで守る存在はないというのに」

ころねが前に進み出る。

その視線を受け止めて、無邪気に笑った。

しかも、楽しそうに。

「ほほほ。そうですね。守るべきではありませんでした」

「自分で価値ある存在と認めましたか。では、死ぬことも問題ありませんね」

ころねは鎌を構えた。

「違いますよ」

無邪気に言った。

「？」

「私は、守れる存在などないのです」

[illegible]は手を振った。数多のマナ球が[illegible]の周囲を舞う。

「[illegible]……！」

ころねは警戒して〈後ろステップ〉が、[illegible]は驚いたことに、それを追って前に出た。

「[illegible]はありませんよ。[illegible]に伝わる秘術、八尺瓊勾玉」

[illegible]は手を舞わせる。その動きに応じてマナ球が舞い踊り、ころねを襲った。

「[illegible]〈ターン〉、[illegible]回避……！」

ころねは身体をよじるが、[illegible]マナ球がころねの身体にめり込む。

「……！……[illegible]……？」

マナ球はころねの身体に粘り付くように動いていた。しかも、ほとんど勢いをつけずとも打撃ダメージを与えることが可能であるらしい。

「私は死ぬまで舞い続け、あなたは死んでからも舞い続ける。そういう秘術です」

[illegible]は笑いながら舞う。ころねは逃げ回っていたけれど、ダメージに耐えきれなくなったか、[illegible]ポシェットを[illegible]くと、その中から自らの身体を投げた。

「あら？」

[illegible]は怪訝そうに目を見開いた。

ころねの体は小さなポシェットに足から吸い込まれていき、あらかた体がポシェットの中に消えたと
ころで、最後に残しておいた手で空中に図形を描き出すと、そこにポシェットを吸い込ませた。

「任務完了ですわね」

有栖は満足げににっこりと笑った。そして、泣いているけなを見る。

「お亡くなりになりましたね」

有栖が言うと、けなは泣きながら有栖を見上げた。

「ど、どうしたらいいの……？」

一方、けなは有栖への恨みを隠さない。

「あ、あなたのせいで……」

「あら？ それは関係ありませんよ。そして、貴方がそう言った直後、彼女があのような行動に出たのは、その死だ
ご友人のせいでしょう？」

有栖は、そのご友人と言った時、けなの胸元を指差していた。

「ふ、……ふえ？」

けなは泣きながらも、自分の胸元が光っていることに気づく。

「な……なにこれ……ぴちゃん？」

首から吊るして、服の下に入れていたネックレスを取り出すと、光が外にあふれ出てきた。ネックレスに振
ていたピタハウゼンの牙が輝いていたのだ。

「ぴちゃん……」
死体の少女が呼んだ存在が、その心に応えて何かを指し示しているかのようだった。
「これは……」
けなはピタハウゼンの死体を優しく胸に抱いて目を閉じた。
そして、彼女に語りかける何かがいるかのようにうなずく。
「ど、どうしましたの……？」
王子がおずおずと問いかける。
けなは目を開いた。
「あちゃんを生き返せる方法があるって……」
「なんですって……！」
王子が驚く。と、その言葉を[illegible]が継いだ。
『冥界の王の棺』……それが、魔王を甦らせる装置の名です。そして、もちろん、同時に魔王を倒すための装置でもあります……」
「なぜ、そんなものがあるんです？」
あまりのことに圧倒され、それまで言葉を失っていた淑女が言葉を絞り出すようにして聞いた。
「魔王は歴代に数多くいました。その中には勇者に倒された者も。だから、いくつかの武器を魔王は与えられる。そういうことなのでしょう。まるでそれが運命であるかのように」

有加が答えた。
「じゃあ、場合によっては自覚がない……」
「でしょうね。目覚めようとしても、そこで死んだ者もいたでしょう。さ、お行きなさい。私はもう待っていますよ」
「待っている……?」
千夜子が顔を有加に向けた。
「ええ」
有加は千夜子ににっこりと微笑(ほほえ)んだ。
「自分のための、目覚めが生まれるのを」

「何度も見た、ゼロを討伐するための回廊」

ゆう子が聞いた。

絢子とゆうは、まだ捕まえていない包囲網から抜け出し、どちらへ向かうべきかを話し合っていた。延々と続く回廊の先へ向かうことも、迂闊ならならそう無謀な距離ではない。だが、その前にけいすを見つけるべきというのが絢子の主張だった。

「そうだ。紫色の長い刀を背負った背の低い女の子。スハラの者のような衣装で、髪を後ろで結んでいる」

絢子はけいすの外見を説明した。

ゆうは、怪訝な顔になる。

「……そんな目立つ格好、しかもそんな能力の持ち主ってことは、ゼロも承知していたわけだよね？　どうしてもう捕まっていないの？　包囲網の周辺あらゆる場所を監視していたんでしょう？」

「そうだ。さらに言えば、向こうの方が、けいすの資料をよく調べていて、けいすが向かいそうな場所を知っているはず」

絢子は地面に視線を落として言った。が、その推測は大きく外れてはいないだろう。

「それなら、もう捕まっているんじゃ……？」

「いや、先の居場所がメギスの神、神殿であることはこちらもわかっている。でも、そこから情報がないわけだろう？」

「そういえば、そうだけど……」

「そこから、けいすはそう離れていない場所にいるはず。ゼロを封印するための能力を持っているということは、ゼロから姿を隠すことができるのかもしれない」

「それなら、どうなるの？」

ゆうは不思議そうな顔をしたが、納得、ある可能性に思い至っていた。

「メギス神殿はすぐに封鎖されたはず。中に立ち入った人はいない、ない……」

「まだ中にいるんだ！」

ゆうははっと声をあげた。

魔法使いは使えず、機関も動いていない。仕方なく人たちは徒歩で帝都から移動をはじめた。

地下鉄も走っておらず、大勢の人が歩いていた。騎士たちは神殿に行ってしまっていて存在が、幸い略奪などは起きていないようだ。

「神殿に人が集まっているらしい」

見知らぬ人同士がそう声をかけあっていた。無線の端末でもニュースは入ってこないわけで、ほかの人たちと同じく、の中央広場を目指しはじめていた。

都心に近づくにつれ、道が混み始めた。やがてメギスの神殿がやってくると、その付近はほとんど自動車の
ホームのようだった。
それでも、メギス神殿にわざわざ入ろうという者はいないようだった。それも当然といえば当然と思
れたのは、広い石畳の玄関を抜けて、大きなガラスの扉まで行ったが、そこには鍵がかかってい
たからだ。
「どうするの？」
ゆうの質問に、綾乃は裏口に回るようにって言った。
「以前来たとき、確か鍵の壊れやすそうな扉があったんだけど……」
綾乃が物騒なことを言った。その通り、裏口には通用門があったが、壊れやすそうということはない。
「別に壊れやすそうってことは……」
ゆうがそう言ったそばから、綾乃が蹴りを通用門に入れていた。
ガン、と鈍い音がして、門の蝶番がゆがみ、鍵が金具からずれて外れている。
「意外と金がかかってないものだからな、神殿っていうのは」
綾乃が言った。
「だからって、ねえ……」
ゆうは壊れた門を手で左右に動かした。きこきこと、錆びた音がした。

誰もいない、広い建物の中は独特の雰囲気がある。どこか寒々とした感覚。響く足音。ましてメギス建物はちょっとしたショッピングモールまで併設された建物だから、その寂しさはかなりのものだ。

「ここで、一人だけを見つけるのは大変そうだね」

「ん、そうだな……」

絢は考え込む。しらみつぶしにしていたら結構時間がかかってしまう。となると、相手の居そうな場所を考えなければならないのだが……。

「あまり頭の良さそうな奴じゃなかった。上の方へ行ってみよう」

絢が言った。

「上？」

「[illegible]も、なぜか山の上から下りてきた。もともとそこにいたとも思えない。ひょっとしたらに、上に行く奴じゃないのか？　なんとかと煙と言うし」

「ちょっと会っただけの相手にひどい言い方よね……」

「ううむ、なんか軽く見たくなる相手だったんだよ」

絢は腕を組んだ。

エレベーターに乗り、最上階のボタンを押す。案内板を見ると、屋上には展望台があるらしい。

「ホントに馬鹿と煙なら、絶対そこにいるよね」

ゆう子がまさにその案内表示を指差した。

「だろうな……」
約束の時間だ。
階段を降り、広々とした居心地の良い空間を抜け、食堂へ向かう。と、そちらからカタカタと音が聞こえてきた。食器が
たつかせている音だ。
「まさか……」
俺は相手と同様に息を潜めてそちらを窺った。
いくつも並んだ食堂のテーブルのひとつに、屈んで食事をしている人影があった。小柄であるため、椅子には座
ずっと立ったまま、腰を曲げているのだ。その背中には不釣り合いに長い刀を背負っていた。
「……大丈夫、問題ない」
紬が言った。そして、物陰から出て食堂へ入る。
けいすは、物音に反応して振り向く。
そして、紬の見守るような顔をしたが、やがて正体に気づいて手を叩いた。
「おお！　先だって会ったおなごではないか」
けいすには危機感らしきものはまったくない。見れば、テーブルに乗っているのは異揚げ物、冷
凍保存されていたものを異揚げ戻して積み上げたことがわかる。
「……何かのんきに食べている」

「拙者(せっしゃ)、コロッケには目が無く……。それにしても　時代が過ぎてみれば　世の中も様変わりしたもの。まさか　[illegible]がいなくなっているとは。いささか面食らったところ」

「馬鹿(ばか)な。[illegible]　ゼロが復活したから拙者たちを軟禁(なんきん)するか[illegible]せたんだ、大体[illegible]に来たはずだ」

[illegible]言うと　けい　すは[illegible]た。

「[illegible]わりは好かんと言ったはずだが」

「そんなことを言っている場合か。言葉遣(ことばづか)いは詫(わ)びる。ともかく　ゼロが復活したんだ。[illegible]はどうしたらいいんだ？」

[illegible]聞いたが　けい　すは首をひねった。

「ゼロとは魔王(まおう)のことだな。いやいや、拙者いくら頭が弱くとも　魔王が復活したのなら　のんきにここにはいない」

「頭が弱いのは自覚しているのか……。いや　それはともかく　ゼロは復活しているぞ」

「それがわからない。実は、拙者[illegible]ゼロとはマナ的繋(つな)がりがある。つまり　復活すれば　すぐにわかるのだ」

けい　すが胸を張った。

「それなら　どうしてすべての人間たちが[illegible]れたんだ？　それがゼロの能力なんだろう？」

「ああ　それは[illegible]ゼロの能力。まだ復活していない」

「何だって？」

「後は任せたなら、すべての人間は自分の無限配置はずなのだ。本体がやっているマナを埋め込む儀式である洗礼というものがあるだろう？　そのマナを通して人間をことごとくに人間を操うとするはずなのだ」

「そんなことができるのか……？」

けいすは当たり前のことのように言っているが、綺羽はそのおぞましさ、恐ろしさに戦慄した。

が、けいすはそんな様子に気づいていないかのようにうなずく。

「もちろん本体では操れないだろうが、無差別に攻撃したり、望まぬ行動をしてしまったり、ともかく本体の意に反した行動

だ。ゼロは人間の完全な服従を理想と考えている。可能なら、人間がまったく行動を起こさない状態を理想と考えているはず

だ。人間の精神の統制、それがゼロの目標なるはずだ」

そのような知識については仕入れているのか、けいすはよどみなく説明した。

「では、今人間囲い込みを起こしているのはどうしてなんだ？」

「それはわからない。たぶん、ゼロを操っている人間がいて、そうさせないようにしているの

だろう」

「ということは、もし2Vを倒したら……」

綺羽は背筋を流れる汗を感じた。

「すぐに一緒に来てくれ！　ゼロをまた封印する必要がある！」

綺羽はそう言った。

「わたくし、あなたはどうしても許せませんわ」

不二子(ふじこ)は一成(いっせい)を怨念の籠(こ)もった目で見据えた。

一成はそれを受け止めて、涼しい顔をしていたが、さすがに笑(え)みまでは浮(う)かべていなかった。

「人間は、信仰(しんこう)がある。黒魔術師(まじゅつし)にとって、信仰から彼らは抜け出せなかったということさ」

実にドライに一成は言い放った。

「自由と幸せをもたらすための魔術系の偶像とおっしゃりたいの？」

「自由をもたらすため、悪魔が助けてくれるというのがね、隣人を神に偶像化させたのはうまいシステムさ。どうしたって人間は物語を必要とするんだ。くだらないものでもね。真実というのはいつも実にくだらない。

に平等な社会は、誰もが悪魔の力を持っている社会とも言える。そして、人間がそうしてしまったら、そこにはくだらない結末しか待っていない。殺し合いだ」

一成はその場の全員を見回した。

阿久斗(あくと)は本を抱(だ)いたけな、立(た)ち尽(つ)くす不二子、淑恵(よしえ)。すでに加寿子(かずこ)は魔導書を使ってどこかに行ってしまっていた。

「では、阿久斗は仲間も何もなく、ただただ手も力も持たされてしまっただけの存在なんですのね」

「彼(かれ)自身それをさっき悟(さと)ったのだろうさ。その点、彼は超越した精神、実力派とも言えるね。さぁ、戦(たた[illegible]えよ。力を手に入れてくるがいいさ。でも、それが世界を滅(ほろ)ぼすためだけの力だとしたら、どんな

にか使っただろうね。そうしなければいいだけなのだから。でも、実際には、誰かが握らなくてはいけない。余分があり、それ故、付与してしまった巨大な力だというだけだ」

「どうして、それを放棄しなかったんですの？」

天斉が問うと、一成は鼻を鳴らした。

「はん。戦争が始まるだけじゃないか。何度も物語がそいつをセーブしてくれていたのさ。魔王なら、そいつが使うってことになる」

「ですが……！」

天斉が何か言おうとするが、その肩に一成が手を置いた。

「行こう。戦争が起きてからでも議論は遅くないよ。いや、そこで彼が決めることだよ。ねえ、私は見るだけだったけど、私は彼のことが好きだな。とりあえず死なせたままにはしておきたくないんだ」

その言葉に、天斉は大きく深呼吸した。そして、しゃんとした顔を作ると、けなを振り返った。

「けな、行きますわよ。身支度をなさいな」

と、そこに一成が声をかけた。

「罪滅ぼしとは言わないが、手伝ってやろう」

「……こちらもお礼は言いませんわ」

「それでいい。婚約者はどこだい？」

一成はけなに聞いた。

「大体、あとは緯度経度、そして地下何メートルかくらいしかわからないけど……。大昔に造られた地下施設があるみたい。それだけで転移できる？」

「それで十分」

一成はうなずいて転移に入ろうとする。

「あっと、私は宮殿の近くへよろしく」

それを遮って、沙夜が言った。

「別行動するの？」

天斗が問うと、沙夜はうなずいた。

「けいすを捜さないと。まだ見つかってないってことは、禁魔メギスに捕まっているんじゃないかと思ってね。今なら私が都市に行っても捕まりそうにはないからさ。あ、もう私の居場所がばれても問題ないだろうから、このゴーグルで見た映像をネットに流すよ。そちらの端末で拾ってくれれば見られるよ」

「わかりました。そちらはお願いしますわ」

天斗も真顔で一成にうなずいた。

一成は転移魔法陣を出現させた。

空中機たヒロシだったが、そこで休む間も与えられないらしかった。飛行型の戦闘ユニットが次々と空とや

ってくる。

「[illegible]ぞ……」

ヒロシは周囲を索敵する。学園は森になっている。学園の敷地内であっても、外側は木が集まっている。なるべく学園

に落とすようにしなければならない。

――敵数二十

戦闘ユニットの数、エネルギー残量、確認する。フィールドに入っていないため、百パーセントのチャージ

だ。だが、飛行型の戦闘時間を考慮すると、高エネルギーの武器は避けなければならない。

「武器展開、ブレード」

両手から特殊合金の爪を伸ばす。[illegible]増したならば、エネルギーロスはさほどでもない。

「ふっ！」

ヒロシは上空の一体に斬り込んだ。相手の動きよりもスーツの飛翔は速い。あっさりと一体を両断する。

「下手に考えるのが厄介だ」

ヒロシは両断されて落下する残骸を目で追った。が、その断面に突っ込むかのように、敵はフォーメーションをと

って襲ってきた。[illegible]軌道で、複数のユニットが飛び交う。

「だが、どうせプログラムされたものだろうが……！」

ヒロシはバイザーの内側に表示されたマルチディスプレイに視線による入力を行い、の敵パターンを予測スーツに手の姿勢を促す。

「攻撃の回避パターンを表示してくれ。レーザーは回避可能を選択」

《了解。パターンを認識しました。指示コンマ数秒以内に反応できれば逃亡が可能です。一秒以内に反応できれば殲滅できます。推奨される射撃時間の数秒で殲滅します》

「指令を、指示を出してくれ！」

《ポインタで示した対象を攻撃してください。一体だけ……》

ヒロシは指示通りに動き、華麗に舞うように攻撃を繰り出す。敵は同時に攻撃を繰り返すパターンを使っているようだった。

げる相手、移動の遅い相手ならばそれを避けるのは無理だっただろうが、フォーメーションよりも速く攻撃を繰り出してくる相手は、その威力は減衰せられていた。三機のユニットの繰り出してくる弾丸もヒロシをターゲッティングできず、発砲そのものが行われない。ヒロシの動きに対応したフォーメーションの展開は遅れているのだ。これはつまりコンピューターの性能が違うということだった。

「行ける……！　残りのユニットの数は……？　増援はあるのか？」

ヒロシはかなりの数を落としたところで周囲に目を配った。

その余裕のおかげだろう。周囲の者の声が耳に入ってきた。

「いいぞ！」

「我が勇者」

「我が英雄(えいゆう)！」

そういえば、ここまで多くの観衆の前で戦ったことはなかった。リリィが言っていたように、それ

だけの声援(せいえん)が自分に向けられている責任というものをひしひしと感じる。

――英雄としての・自覚・か。

責任重大だ。これほど多くの人が自分を応援(おうえん)しているということは、何より勇気を与(あた)えてくれた。多くの期待を背負

れるということは、幸せだったし、何より、そこまでの努力がひとつになった意義がある。それは

ばれるに決まっていた。

――人々のために戦う……。人々の意志を背負って、そのために戦うということか！

ヒロシは何が一番大事なことかを理解した気がしていた。

最後の一体斬、エネルギー最大の破壊魔法を維持(いじ)する為の溜みでチャージまで一秒問題ない。

下を見る。

正直、今回の相手すなわちゼロは無限である。

――倒(たお)し方はわからないが、時間は稼(かせ)げる……。

その全ての部分が自動制御になっていて、そこでプログラムであるゼロの維持が行われているはずだ。つまり

ゼロに実体はない。だが、プログラムと結びついているデータの本体を破壊(はかい)してしまえば、その機能は本体

ことには違いない。かつて兄もそうしてスハラ神を倒したのだ。

「元気に行こう。プラズマ球を使うぞ」

ヒロシは命令した。それはこのスーツにおける最強の武器だった。

不完全な戦士ヒロシを見下ろし、絢ゆうは、人混みに窮していた。まさに一歩も動けない状態におかれている。

いすとともに人間の海に埋まりそうな状況だ。

「まいった……動けないぞ」

「でも、目的の場所に行ってどうするつもりなの？」

ゆうが不安げに聞いた。

それはそうだ。確かに見ていることしかできない。少なくとも今は。

「けいすだけでも行ってもらうか……」

「いや、推進器がこの状態では動かん」

けいすはそう言った。彼女も人の海に埋もれている。小さいので、その被害は絢よりもひどいくらいで、

の服の裾をつかんでいる。

「私たちは飛行機能を使えないから飛べないが……。君は飛べないのか？」

「そのような無粋なものは搭載していない」

「飛べないのか」

「推進器に依存されるのは好かん」

「わかった。だから……。少し離れて、目的の場所に入る方法を考えよう」

絢納たちはメギス〈開神〉と後ずさりをはじめた。

「ねえ、結局どうやったらゼロを封印できるの？」

ゆう子がそのものずばりをけいすに聞いた。

けいすは少し考え込むような仕草をした後こうとんでもないことを言った。

「そいつは拙者とんと覚えていないのだ」

一方だけな、千平そして四角形の空間。どこともしれぬ広大な空間が開いていた。

確かには、どことも知れぬわけではない。横幅何百メートルなのかははっきりしている。だがそこは何の用途で造られたのかまったくわからない空間であった。奥行きで言えば数十メートルはある。太さの柱も何もなく

り、天井は見上げても先が見えぬ高さにある。そして天井の高いところにだけぽつりと照明のような

ものが設置されている。

「たぶん、一度も人が足を踏み入れたことがないのでしょうね」

ゆう子が周囲を見回してそう言った。

明かりはその周囲だけにある。それに照らされた石造りの床は、埃すら積もっていない。それがかつて

の活動が一度も行われたことがない証拠に他ならなかった。繊維質のものが宙に舞い上がってなければ

ば、いわゆる埃も積もらない。

そこが棺を置くためだけの場所であることは明らかだった。おそらく詳細を知らなければここにたどり着くことは不可能だろう。そのために造られた訳ではあるまいが、あるときから放棄された
のように思えた。入り口が見当たらないことは最後まで不穏に思えてきた。
「ここの棺はいいのね」
少年が聞いた。
何しろピタハウゼンの声を聞いたのはけなだけだ。それは神の間に残っていたデータであって、いわゆる霊魂というものではないだろうが、けなに語りかけたということが因縁めいた
のを感じさせた。
「大丈夫これだよ」
けなは言った。
そして、抱きかかえたままの少女の身体を棺へ動かそうと力を入れはじめる。だが、少年の細い身体ではけなには重すぎる。
「ほら、頭のほうを貸しなさい。あなたは足を」
少年が見かねて手を貸す。
「ありがとう。よいしょ……」
けなと少年で少女の身体を棺へ横たえた。
棺は少女にぴったりであった。少し離れたところにマナスクリーンが出現し、起動した旨を示している文字列が表示されて流れは
じめる。

「このまま待つしかないんですの？」

「そういうことみたい」

けーなはうなずく。

千早は崩（くず）れるように、すとん、と床に腰を下ろした。

「大丈夫？」

けーなの問いかけに、うなずいて答え、千早の顔を見上げ向いた。そして、独り言のようにつぶやく。

「今なって、[illegible]が死んだままだったらどうしようって思ってきましたわ……。死んだその瞬間、

はなったけれど、妙（みょう）に自分が保っていたのに……」

それを聞いて、けーなが少しだけ笑う。

「あたしもそんな感じがしたよ」

「生き返って欲（ほ）しい。姉者もそう思いますわ。だけど……」

「だけど？」

「姉者、それでいいのかしら？　甦った[illegible]の？　それに、甦っても、つらいことになるだけ

じゃあないかしら……」

千早様はいつもと違っていた。そんな彼女にけーなは歩み寄る。その[illegible]から肩に手を置く。

「あーちゃんはあーちゃんだよ。他の誰でもないもの。この世に生まれた人はみんなそうなんだよ。

きっと。あーちゃんは作られた人だから、だから甦ることができるんだろうけど、それでも

みんなの他に、誰もいないから大丈夫よ」

その言葉に根拠はなかった。おそらくは死神が監視できる存在がある。より人間に近い存在がある、ということを嫌でも意識させられてしまうような気がしたが、それでも天子は少しだけ気楽になった。

「そうね。大丈夫といいわね。そして、死神に取り憑かれたら、って仮定しても同じ選択をするでしょうね」

「今まで通りの生活のために何をしたらいいか、なんて真面目に考えちゃうんだよ」

けなは笑った。

結局勧誘は続いていたが、それがいつ終わるかは予告されなかった。一秒が長く感じられた。

「大丈夫かしら……？」

天子もまた声をあげる。

「大丈夫、うまくいくよ。その……どうしても不安なら、お祈りをすればいいよ」

そのけなの提案は、あまりにも間抜けに思えた。

「お祈り？」

さすがに天子も驚きの声をあげる。

「そう。お祈り。だって、そうする以外にすることはないでしょ？」

けなは無邪気に言うが、天子は首を振った。

「それはそうですけれど、神様？ だって、そんなものは……」

「いる……と思うよ。だって、そうじゃないと、あーちゃんはこれからずっと、つらい目に遭うだけなんだよ？」

その言葉に、千年子は、はっ、とした。

「そうね。やはり、そういう意味でも信仰は必要なのかもしれませんわね」

神や仏、信じた人類の進化であるいは因果、魂の根源のようなもの。実在それらを信じなければ、魔王と呼ばれた人の生きは、あまりに甲斐のないものになってしまう。

けーなは千年子の横、膝を突いて手を組んだ。

千年子も目を閉じて、何かに祈った。

椿は静かに黙祷を続けていた。だが、これから何が起こるのかは、その場にいる誰もわからなかった。

魅夜は自分が転送された場所が普通の空間じゃなかったことに気づいてぼやいた。

「あちゃー、しゃあないなぁ。つっても、異空間なんかシールドされてるのかもしんないなぁ。ってここは……」

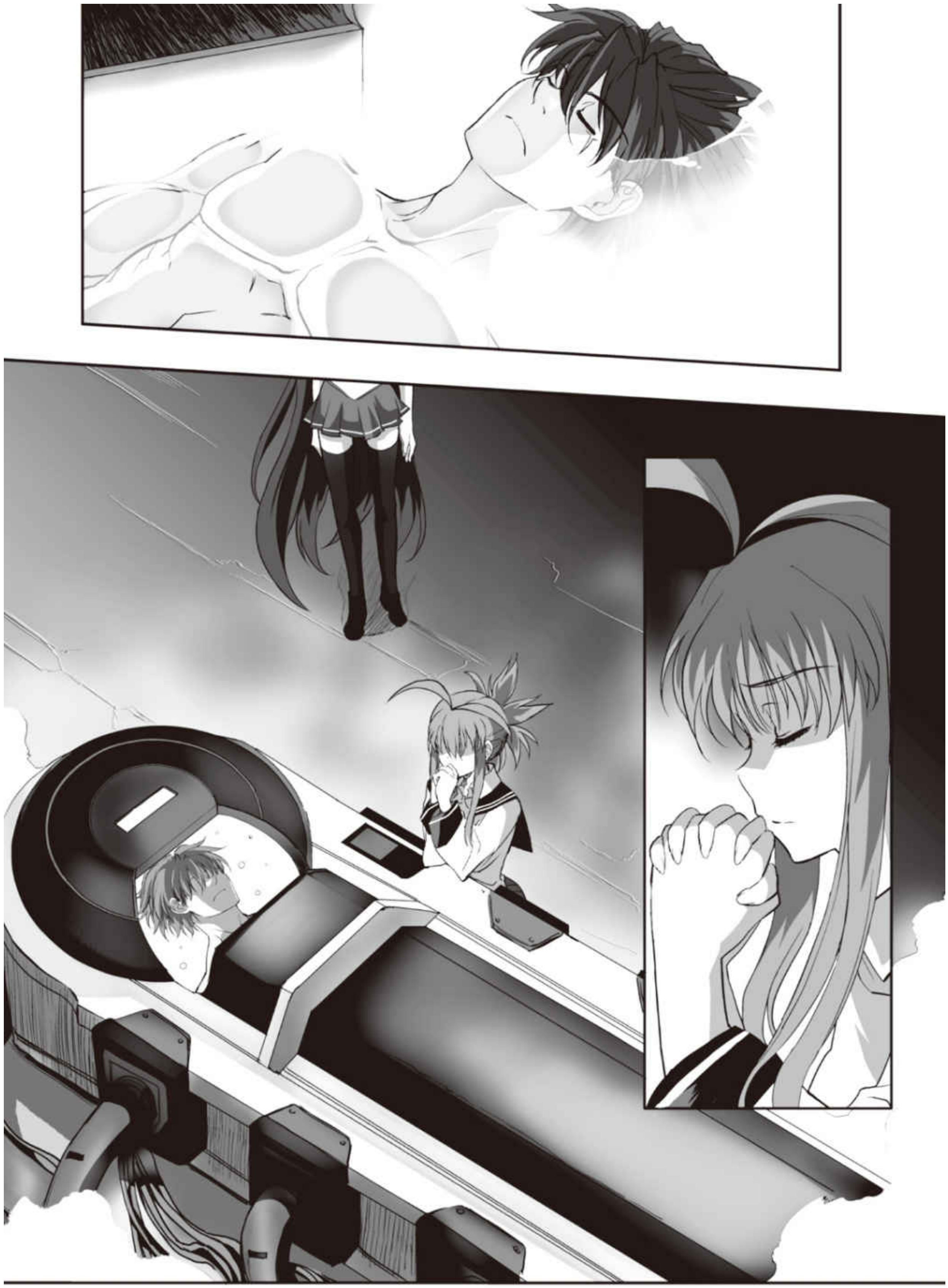
周囲を見回すと、どうも見知った風景の場所である。メギスの居城のロビーだ。

「それはそれでわかりやすくてありがたいかねぇ」

魅夜は勝手に納得し、窓の外の様子をうかがう。

外は人混みという表現ではおさまらないほどの人の海。

「野次馬……ってわけじゃないか　こわいねぇ人民怒りってやつは」



彼は思った。額のゴーグルをいじった。そこで撮影した映像は同時にネット中継される。

「さて、考えてみればけいすを捜しに行くのにも都合いいかな……と」

きびすを返そうとしたところで、不審人物を尾行行動している人影を見付けた。正確にはそういうことをしているという推測可能なものだ。

「ふぉお！　ラッキーだねぇ。これも日頃の行いってやつか？」

その道を通る大人、絢ゆう子けいすだ。毎日見る彼にとっては見知った顔である。ゆうの子ことは、一部的メディアで見知っていたのだ。

彼はメギスの本社エントランスまで行き、大人に手を振った。

「おおい、こっちだ。いやぁ、すぐに見つかってよかった！」

しかし、大人は怪訝な顔をしていた。

「あなたは？」

「何の御用件ですか？」

「どこかで見たような既視感はするが、見たことはない……」

そういえば、普段の大人はこの姿を見てはいなかった。

「いや、きちんと説明すると長いので、手短に済ませたいんだけどね。つまり、私は松淑彦なんだ」

彼はそう言った。皆まるっきり何を言っているのか理解できていない顔をしていた。普段の大人はこの別の顔を使っているという

は、事実上ハズルになれていないとわからないかもしれないのか。納得。さすがに二人あたりは察が

い。

「あとで順番に説明するが、少なくとも私の説明中は待機だよ。それとメギス開発関係者というのも基本だよ。内容の把握をしていた。そうだ、緊急用の浮遊脱出ボートがある。それを使って脱出を行う。その間に説明するから」

兵士はまだ確保していないようだった。が、敵がいないことは伝わったらしい。渚沙は頷いて立て、緊急脱出用ボートの格納レバーまで案内した。ビルの屋上から外に出れる格納庫があり、その脇のケースに入った未来兵器のマナの反発力を利用して浮遊するだけのボートがある。レバーを引けば、その格納庫が解放される仕組みだ。

「わざわざこんなことをしてくれるということは、少なくとも敵はないようですが……」

解放レバーを引いている東恵が訊ねる。

「それは信じてよ。でも、悪いことをしたとは思んだけど、私は少なくとも敵じゃないさぁ」

東恵はそう切り出したが、納得より、警戒心を深めたような顔になる。

「と、ともかくボートに乗って……」

渚沙はそう言ったとき、不意に激しい光が、瞬いた。

いよいよブレイブIIヒロシと、本格化したゼロの戦闘がはじまったのだ。

「あまりに近くのは危険だけど……とにかく急ぐっと、私は恐ろしいものは持って行くか」

東恵はボートに、緊急脱出用の予備電源のエンジンを放り込んだ。続いて自分も飛び乗る。マナを攪拌することの

フィルムを貼ったオールを握った。

後ろから天井を突き抜けて乗り込んだ東恵がオールをこぎ始めた。

「あれは、魔王を倒した……」

激闘を続けるブレイブを見上げて言った。

ゆうは、それをヒロシだとは言わず、うなずく。

「そうだよ。今度も、きっとやってくれるよ」

「確かに、あれがゼロを倒してくれればそれでいいんだ。それで何も問題ないよ。うん、強そうだし、やってくれるんじゃないかな」

博士は感慨を込めて言った。

《耐熱（たいねつ）マント・超高温プラズマ球体化》

ヒロシのスーツがマントをまとい、さらにその周囲に光の球体が出現した。接触（せっしょく）するあらゆるものを溶かす灼熱の塊（かたまり）だ。

ヒロシはスーツを一気に高速回転させる。超高温の無数なるフィールドを突き抜（ぬ）けて、その一瞬（いっしゅん）後はあの超合金を破壊していなければならない。この技（わざ）はエネルギーを使い切ってしまい、再び戦闘が可能になるまで五分必要としてしまう。一撃（いちげき）で仕留（しと）める必要があるのだ。

マントが風に翻（ひるがえ）り、プラズマ球体の周囲を回転しはじめる。それは大空からねじ込まれる一本のドリルのように見えた。

《プラズマ。開閉時間調節装置での開閉時間を十ナノセカンドにセット。対閃光（せんこう）バイザーの可視光透過率（とうかりつ）を現在の五十パーセントからパ
セント以下。電磁フィールド。開閉時間経過後、任意の対象に接触します》

淡々（たんたん）とスーツが報告を入れてくる。

ヒロシの視界の先に、ぎらぎらと輝（かがや）く正体不明の物体がある。プラズマを身に纏って赤い光を発しているそれが、ヒロ
シの視界の中で一気に大きくなる。

「行けえ！」

視界のほとんどが正体不明の物体からの赤い光に埋まったとき、ヒロシは両腕を前に構えた。

が、そのとき、激しい衝撃（しょうげき）が全身を襲った。

ヒロシは何が起こったのかを理解できていなかった。だが、集まった観衆たちは、すべてを目撃（もくげき）してい
た。

正体不明の物体。ヒロシが接触する一瞬、まるで生き物のように動いたのである。空中で固定されていたかのように動か
かったそれが、わずかに全体をゆがませ、まるでボールが弾（はず）むかのようにヒロシに向かって来
だのだ。

しかも、物体はその表面を何かのフィールドで覆（おお）っているらしかった。それが、プラズ
マとの接触に耐えたことにヒロシが気づいたのは、吹（ふ）き飛ばされた衝撃から回復し、二十メートル下で体勢を立て直してからだ
った。

《プラズマ、球体の各所で消失。接触したフィールドは電磁フィールドと思われます》

「反応フィールド……」
それはこのスーツにのみ搭載されている未来の技術のはずだった。それがあればこそ、プラズマ球体を爆発させることが可能なのだ。
――どうして……。いや、理由を考えるより、次の攻撃に備えないと……。まさか、あれが来るんじゃないだろうな……！
ヒロシは、緊迫した状況で落ち着こうと頭を回転させる。距離をとるべく上昇するが、背中を向けず慎重にする。
ヒロシが予測したおれとは、正しかった。かつて大和望一郎が使った未来の技術、おそらくは同じ原理で動いているそれだ。
果たして、その予測は当たった。空間全体にその穴のひとつを外側に向けて開いた。その開口部から、虹色の線が一筋、ヒロシに向かって伸びる。
「くっ……！」
ヒロシはこれを回避。先ほどまでいた空間が、ずるりとずれた。まるで空間そのものをカッターで切り裂いたかのようだった。
「エネルギー最大値……」
ヒロシは視界の端で、残りエネルギーを確認する。武器は使えないが、ゼロが攻撃を出せないならば、あの装置を阻害する
フィールドは長時間展開できないらしい。

「あと四分ちょっと……」

口の中でつぶやく。

が、宙に逃れたとみたゼロは、瞬時に形を変えてきた。左右の空気噴射口が開いた。まるで折り目によって変形する折り紙のよう

に、驚くほどにその姿を変化させた。六角形の平面を二枚貼り合わせたような形となり、円盤のように回転しはじめ

た。その形状でヒロシに向かって飛んでくる。

「パターン解析」

《機体制御権を再奪取し、コントロールをこちらへ移行することを推奨します。残り作業時間に間に合いません》

「コントロールをスーツに」

ヒロシは言った。

スーツはヒロシの身体を強引に動かし、凄まじい速度で予測できない動きを繰り返した。しかし、それは円盤状にな

った。ゼロも同じだった。さらに、ゼロは真空の刃を断続的に放ってくる。人間の目はとてもついていけぬ動きでふ

たつの機体が空中に軌跡を描き、その後は切断された空間に亀裂のズレが残った。

――かわすことはできても、こちらにコントロールがなければ四分を過ぎても攻撃できな

い……！

ヒロシは内心で焦る。攻撃できないどころか、限界での機動を繰り返していると、エネルギーの補充が間に合

わないらしく、エネルギー残量が低下していく。

――逃げるべきか……。

不安が心によぎる。

しかし、そのとき、方々から声が聞こえてきた。

まさに、大音声(だいおんじょう)、地鳴りにも近い音の波が上空に放たれている。

それは、観客が自分を応援してくれる声だった。

「ブレイブ！　ブレイブ！」

確かに、自分の名を呼んでいる。

――これは……！

胸の奥(おく)に、熱さが宿る。

――まだだ！　まだギリギリじゃない！　最後の力が足りなくなるまでは、頑張(がんば)れる……！

「ブレイブ！　ブレイブ！」

会場内の観客が声を出し尽くした観客の何人がこうなるのだろう？　見渡(みわた)す限りの、根性を出し尽くした彼女たちにとって、不利な劣勢(れっせい)にあるブレイブを応援していた。その声が耳をふさいでいなければ耐えられないほどであり、わずかに空に浮いているボートに乗った者たちには、特に全身を振るわせるようなボリュームだった。

しかし、綺向の眼前の事態にきょとんとした目を向けていた。激しい応援に慣れていない彼女は、その情景を見ていたので、ようやく自分の真実に気づいたのだ。

「君たち……波多……」

「ごめんってば。だから、脱け出しちゃったりとか気にしてなかったんだよ」
悠志はブレイブの面影を残しながらも、そう詫びた。
ゆう子も、けいすも、面影を食い入るように見ていたが、絢音の方を向いた。
――そ、それじゃあ……。
死刑の間際に悠志の言ったあの言葉「そうだね、勇者様に戻ったら、一度彼女と付き合うといい」は、悠志に向けられたものだったわけ
だ。しかも、思い返してみれば、勇者の姿の悠志とは別れの挨拶を交わし、再会の約束をした後のことだ。
――そんな不安なことで、悩んでいたのか……。
絢音はばかばかしくなって、笑い出してしまった。
「ちょ、大丈夫？」
悠志が気遣うが、それを大丈夫、と手を広げる。
「問題ない……。そうか、そう考えると、私たちは仲良くやれそうだ。ずいぶんあっちとは性格が違うが」
「ああ、男っぽくと考えるとああなっちゃうんだよねぇ。本当の女の子の時はいいんだよ。ま、そんな
はいいや、本当のことだ」
そして悠志に、絢音の知らぬ旅の顛末を話して聞かせた。
絢音の様相はみるみる深刻なものになる。
「……じゃあ、悠志は元に戻りきるのか？」
「それは、まだわからないな。だけど、待つしかないんだ」

彼は愚痴を言う振りをしたが、ゆうの手元の会話を聞いていたのか、上空を指さして声をあげた。

「待っていれば大丈夫だよ。それに、あの人が来るより早く、ブレイブがすべてを終わらせてくれるよ」

ゆうの予言は真実だったかもしれなかった。結局してみれば、こんな悪い状態の時に現れて来てくれるような気がしてしまうが、ゆうにしてみれば、それがヒロシなのだ。そして、彼は今ほとんど都市のすべてと言ってもよいほどの数の人々の援護を受けて戦っている。

「大丈夫か」

納得してつぶやく。

確かに、この瞬間、彼は有利だった。

そして、決定的な瞬間が彼に訪れる。

下方から上空に向かって光が放たれた。マナ球である。それは地上の何者かからゼロに向かって飛翔し、ゼロの盾となっているゼロの攻撃を弾いた。まだ魔術を使える何者かが、ブレイブを支援したのだ。

「まだ魔術を使える……者……？」

「誰だ、それは？」

ゼロは恐怖の表情で内心の疑問を口にしたが、ブレイブがその隙を見逃すはずがなかった。

――誰かが下から攻撃……？

ヒロシの心にも一瞬の隙は起こるが、それが誰であっても関係ない。ゼロに隙ができたという事実が問題なのだ。

――エネルギー最大値？

分身ワイヤーによる一度だけなら攻撃が可能だった。

「コントロールをこちらへ！　ワイヤー！」

ヒロシは命じた。そして、同時に重力の監獄となったゼロの体の間を通り抜ける。

分身から放たれたワイヤーは、ふわりと宙を舞っただけかに見えたが、通り抜けた瞬間にゼロの監獄、重力の中央から断ち切られていた。

「やった……か？」

ヒロシは振り返る。

もう武器を使うエネルギーはない。最後の反撃はできないだろう。

しかし、その心配は無用だった。分断され、割れた監獄は、再び元の一体に戻ろうとして果たせず、その重力の源のパーツひとつひとつがバラバラになって下へ落ちていく。

「勝っ……た……！　これで、終わった……！」

なんとも言えぬ充足感と、満足感が身体を満たしていく。

下方から、監獄の本体の部品パーツが落下した音。それをかき消すほどの大きな声がヒロシに聞こえてくる。

もちろん、その声は、ブレイブの名を叫んでいた。

「やった……!」
ゆうが歓声をあげて手を叩いた。
「ふう……終わった……か」
紬が安心したように息を吐き出す。
「まあ、こんな結末があってもいいやね」
惣太はボートのオールをこぐ手を止めた。その頃には、ボートは雨月山の外壁のあたりまで来ていた。鉄条網の塀を乗り越え、雨月山の内側まで入り込んでいたが、この位置で見れば、雨月山で何が起きているのかは見渡せる。
と、けいすが空を見上げ、それから、警戒するように左右を見回した。
「どうしたの?」
惣太が問う。すると、けいすは短く言い放った。
「死んでいない」
「え?」
「ゼロは死んでいない」
けいすは断じた。感覚でわかるのだろう。
「だが、完全に消滅していないのはわかっていたことだ。そういう意味ではないんだな?」
惣太は慌てて問うが、けいすは難しいことはわからない、と首を横に振った。

しかし、その次の瞬間、彼女が説明するよりも早く、すべての答えは明らかになった。
「ゼロの、配下。その騎士が、潰えました」
断末魔が、響いてきた。機体が、ブレイブに最後を送っているのが聞こえたのだから、当然の一声であったわけがな
い。それは能力を使って、増幅された音。もちろん、機体から放たれていた。
王宮のテラスに、天方が姿を現していた。
群集たちの歓声が、さらに高まった。遠くの者まで見えるように、その姿は空に拡大して映し出される。
「何者かは知りませんが、勇気ある戦士。彼女は、皆に戦う勇気を与えてくれました。私もそれに強く心を打たれました。そ
こで、私はゼロに能力を放ったのです」
＝天方2Vは優しく語りかける。
「しまっ……た……」
「そんな……まさか、そこまで……！」
当然、彼女は2Vを知っている。今語っている天方が2Vであることを知っている。
「何の能力……？」
疑問に、聞いた。
彼女は、悲しそうに首を横に振る。
「能力はわからない。今、確かなのはよ。ゼロに操られたところねが追っていた」
「天方が殺されていれば、2Vが皇帝……？　それを狙って？」

「だがっ、神様ってのはえらく弱かったよ。どうやら、くたばるようなタマじゃないっぽい。ま
さか、2Vも生き残るためにその場しのぎの嘘を……」

絢斗は思わず疑問を口にした。

だが、帝国の民衆は、2Vのことなど知らない。

「しかしながら、帝国の皆が使える魔法はもう復活しません。おそらく、ゼロとともに神が死んでしまったの
です。私はここに、再び帝国の上に立つことを宣言いたします。魔術の復活を誓い、再び神殿の神術を復活させるまで、
の名の下、再度この国を治めましょう！　帝国再建のために、皆の力をお貸しください！」

2Vは大きく声をあげた。

「無理だ……そんなこと、帝国の再建は……」

絢斗は思わず独りつぶやくが、その小さな声を圧倒的な群衆の叫びがかき消した。

「帝国万歳！　万歳、帝国再建万歳！」

その声が幾重にも重なって、神殿の周囲にも広がっていった。

いくら2Vのことを知らないとはいえ、無茶な行動との宣言に、人々は共感しているのだ。しかも熱狂
して。

「な……何を考えているんだ？　人々はこれまでも神を信じて自らを律する生活を送っていたはず……」

絢斗は呆然とする。

「いや、自分を信じていたからこそじゃないかな。偽神に頼るそのシステムの不弱が露呈したと感じているんだろう。少なくとも、ゼロが[illegible]とは知れているのだし……。つまり、部下たちが見限れたわけだ」



激しくそう言った。
「人類が行動したのは有翼人たちだぞ？　昔は支配されていた時ですら、ブレイブが声をあげなければ行動しなかったのに……」
「それが人間というものなのだろうな。私たちだってそうだ。これまで声をあげられないことが何度もあったさ。そして、無責任なものを信じたことも」
悲しげに首を振った。
「だが、真実を知れば……人は変わるのだよ。な？」
納得青ざめた顔で聞いていたが、誰もそれに答えなかった。
群衆の英雄を称える声だけが響いていた。
一方、2Vは、自分の目標を達成してきたことを、心の底から喜び、全身をさざ波のように押し寄せる震えを堪能してい
た。
「どうだ、ゼロ。これが未来だ！　私たちが求め狂っていることを証明したぞ！　抑圧から逃れるために立ち上がったのに、何もせぬ私に、抑圧者になってくれと、涙を流して懇願しているのだ！」
再びゼロに話しかける。
「しかし、それも長くは保たないでしょう。いずれ彼はあなたの首を取ろうとしてくる。そして、新たな支配者を求める。それをもって私たちが狂っていると断じたのです」

ゼロは静かに言い放つ。
「そこの貴様も同じだ。わかっているさ。だが、私は、生涯を賭けてそれを我が身で証明したかったのだ。私は運命をあざ笑いたかったのだ」
「あなたの人生をそのようなものにしたのが、未来に他ならないからですか？」
「そう考えてもいいさ。どちらにせよ、私のようなことをしたら、その後に何があろうと死あるのみだ。だが、生き延びるための準備はしてある。さぁ、この愉悦に酔っているうちに世界を終わらせよう。「今
そ、ゼロ、君の力を解放してやる」
「そのために、あなたに仕えたのだ。待ちかねたぞ……」

「承知……！」
まるで獣が身動ぎするように、耳と髪の毛をぴくりとさせ、けいすが声をあげた。
「承知？」
「ゼロだ。ゼロが覚醒する気配を感じる……」
けいすは周囲を見回しているが、もちろんそのあたりにいるというわけではない。
「2Vが魔術を使っている。彼が覚醒を促しているということだ」
彼女はゴーグル越しに2Vを見ながら言った。マナの流れが見えるのだ。
「それなら、2Vを倒せば……！」

純白の翼を全身に生やした、ヒロシがそこに居た。
「お願い……！」
ゆうは空に向かって手を合わせた。
しかし、ヒロシの身体はゆっくりと降り立った。
——エネルギー切れ……しかも、またエネルギーの転送を防ぐフィールドが発生している……。罠にはめ
られた……！
ヒロシは歯噛みする。
2Vのことは彼も熟知している。そして、彼女を倒さねばならないことも。
だが……。
——エネルギーがあったとしても、2Vを殺せただろうか？　俺は……。
エネルギー切れが、悔しくもあり、ありがたくもある。
おそらく、何もできなかったはずだ。人々は、まだこちらを向いて、拍手をしている。彼の目の前
を殺す、そのようなことができるはずがない。
国民に愛され、絶大な支持を受けている指導者を殺す、その行為が、恐れ多いのではない。人々の罵声、その後の暴動、後の指導者
れ続けることは、どう考えても恐ろしい。そうするのが使命だったとしても、やはり逡巡はし
たはずだった。

――ということはゼロもまだ生きている……。どうなってしまうんだ、これから……！

「駄目……エネルギー切れみたい」

ゆうは力尽き、全身脱力して言った。

「ゼロが覚醒したらどうなるって？」

改めて絢斗が聞いた。

「洗礼を受けたことのある人は、そのシステムを使われて、男性器を奪われてしまう」

けいすが答えた。

「もう終わりだってことじゃないか！」

絢斗が叫ぶ。

そんなことなど知らずに人は茸に声を上げている。おそらく、ゼロが覚醒したところで、茸の人は

らないだろう。男性器を失くして自らをあがめるように、ゼロ＝２Ｖは、その力を使うはずだから。

「けいす、なんとかしてくれ……！」

焦燥し、けいすを揺すったが、けいすはやはり何かを思い出せずにいるようで、首をひねるばかりだった。

「これで、私の計画も水泡のものに……！」

２Ｖは声をあげた。

それは次の人にも聞えるように言ったのだ。

熱狂的な叫びが答えとなって返ってきた。

「これより統一国を称せよ！」

２Ｖが叫ぶ。

と、そこに悪い暗雲が訪れた。

「……雲？」

国家の上に影が落ちる。人々が空を見上げると、黒く不吉な雲が国家の上にだけ立ちこめているのだった。

「ここだけなんてあり得ない……」

「どういうことだ……？」

人々がざわめく。

そこに雷鳴が轟いた。人々の声をかき消すほどの凄まじいものだ。

恐怖の声が人々の間からあがる。

雨は降っていない。ただ、稲光だけが連続して一瞬、雷鳴とほぼ同時に響いている。

「なんだ……？」

２Ｖは上空を見上げた。

行方不明者は、未だ追跡中だが、少なくとも宮殿に入れた形跡はない。侍女たちは、宮殿内まで入り込んでいるが、まだ傀儡を獲得していないため、2Vが殺到している戦闘マシンに手こずっている。となると、残ったのはだけだ。

「魔王か」、

遊んでいた。

脳裏にシルエットが浮かんだ。

悲鳴をあげていた群衆が静まりかえった。

黒い輝きを纏った男の姿は王であった。纏う光が白く、顔が優しさに満ちていたならば、誰もが彼を聖者と思っただろうが、そこにいるのは、それとは正反対の男の姿だった。

背負うのは、黒ぎらついた光の羽。

盛り上がった。しかし禍々しく変容した筋肉の巻き付いた肉体。

残虐な笑みとそこから覗く牙。

煌々と赤く輝く目。

「皇帝に従おうとする愚かな人々よ。従うことにより失った自由を取り戻すのならば、そうするがいい。だが、自由が欲しいなら、私がくれてやってもいい」

魔王はそう言った。

彼が手を大きく広げると、その動きにつれて人々の間にざわめきが広がった。

「魔力（まりょく）が……」

「戻った……」

「かえってきた……」

絢は空を見上げて、声をあげていた。

「マナが使える。帰ってきた」

試しに、軽く指先にマナをまとわりつかせてみる。指先は確かに光を放った。



「大魔王の話じゃない……」
身体中に冷や汗を浮かばせた綱が、額をぬぐった。
「わかってる。彼が帰ってきたんだね。だけど、すごい顔になっちゃって」
北条が、苦笑した。
ゆう子などは、魔王の顔を見ておびえている。
と、綱がゆう子の肩に手を置いた。
「大丈夫、彼は中身は変わってない。あの人物は、彼は、すべてを引き受ける気だ」
「引き受ける……？」
「そうだ。彼は……すべてを終わらせるよ」
綱が言った。その瞬間のことだった。
雷が２Ｖの屋上テラスに向かって落ちた。
凄まじい炸裂音が響き、魔殿の屋上テラスの半分が、跡形もなく吹き飛んでいた。
黒焦げの石片と、黒く炭化した塊と化した２Ｖの身体が、転がり落ちる。
数秒の沈黙の後、何があったのか悟った人間たちから、怒号があがりはじめ、それは魔殿の屋上全体に広がっていった。
しかし、魔王はそれに笑顔で答えた。

「私の兄であるゼロは消えた。だが、その活躍によって神は死んだ。それは何のためか。皆さん方、魔王を
えるためだ。なぜ皇帝を殺したか。この世界の秩序を破壊するためだ。さぁ、貴様は誰に仕えたい？　そ
れとも自分のために生きるか？　選べ。この世界の行く末を決める時が来た。これが最後の戦い。そして、私こそこの世界
の魔王だ」

5　独りの大魔王

神殿の裏、誰も知らぬ廊下（ろうか）を2V（ツーブイ）は歩いていた。

かつて何度も通過していた、あの秘密の通路である。

ここの存在は、もはや誰も知らぬだろう。2Vがここにいたのは、ずいぶん前のことだからだ。

2Vは生きていた。

「念の入ったことですね。あの状況ですら人体に似た形を使うとは」

そう言ったのは、ゼロである。ゼロはゼロで、新しく与えられた人間の姿をしている。あえて関

さを排（はい）した機械的な男の美しい顔をしていた。

「手は尽くしてあると言ったさ。そして、もはやこれで仕事は終わってもいいと思ったのは本当さ。これで

は、隠遁（いんとん）でもするさ。君の好きなようにすればいい。あの大魔王の君の能力までが介入（かいにゅう）してきたが

あれと争（あらそ）うつもりなんだろう？　私はそれを見ていることにするよ」

どうやら、阿九斗（あくと）は神の力を封印していたゼロに、対抗（たいこう）できる能力を持っているようだった。だから

その者も大魔王と呼ばれているのだろうが。

それを聞いたゼロは、神殿の奥へと下がって行った。

しかし、ゼロとは逆方向に向かおうとした2Vの前に、立ちはだかった人影があった。

「誰か忘れちゃいないかい？」
2Vは驚いて顔をあげた。
そこに立っていたのは、小粋な帽子をかぶった少女だった。
「リリィ・白石……だったよね？」
軽く声を2Vはあげた。
「そういうこと。いやぁ、絶対に誰も知らない抜け道があるだろうと、一個所しらみつぶしにしていたんだ。突入してからずっとね。なんせ、あんたは誰も捕まらないと思っていたからさ」
リリィは、そう言って帽子のつばを握って後方宙返りする。
「せっかく魔術を使えるようになっているんだ。自分から前に行かせてもらう！」
そう叫んだ次の瞬間、リリィは斜め方向に突進している。
「ちぃ！」
2Vはマナ球を複数、自身の周囲に展開し、これを操ろうと手を動かした。加寿子が使った信号を伝える魔術。
「打撃力のあるマナの投擲魔術か。それなら、打撃で相殺すればいいだけ！」
リリィは無数の拳を自分の前面に展開する。2Vはマナ球を誘導するが、そのことごとくをリリィの放った拳が殴りつけていく。手数と速度も攻撃力も勝る上に、マナ球あるから、これはいわば正面からのパワー比べだ。
「おおおお！」

リリィは拳でマナ球をはじき返されるが、それでも複数の打撃を打ち込んでいく。一発あたり一発入れるとすれ

ば、それをマナ球の数だけということになる。凄まじい数の打撃を放った。

そして、その打撃に2Vが押されはじめる。

「くっ……！」

そして、2Vの魔力がリリィに押し負けた。マナ球が消滅し、無数の拳が2Vの華奢な体にたたき込まれる。

「どらぁあああ！」

リリィは拳を振り抜き、2Vを壁に押しつけた。

2Vは壁に打ち付けられてうめく。

「ぐっ……！」

「はん、殺すわけにゃいかないんだ。大人しくしやがれ。あんたの正体を証拠付きで突き出さないと、先の仲間が不安な

いんでね。恨みは骨髄ってやつだが。それにしたって生かしておいた方がいい。あんたた

しちゃ、いわば目的を達成させてしまったことになるからな」

リリィは魔力によって腕をするすると伸ばし、倒れた2Vの襟首を持ち上げた。2Vはむしろ殺

われたかのような表情になる。

「よせ、よしてくれ」

「薄々感づいてたんだろうが。そりゃ人間そこまで馬鹿じゃないわな。真実をさらせば、組織の判断ってで

きるに決まってる。死んでの自分の気に入らないものを見逃しに済ませようなんて許さないぜ」

リリィは残忍な笑みを漏らした。

その時だった。

ど、と鈍い音が２Ｖの身体から響いた。その瞬間、リリィの手にも伝わっている。

「……な？」

リリィは目を見開いた。

２Ｖの身体が、七つの剣で刺し貫かれていた。

「がはっ！」

２Ｖがうめいて血を吐いた。

「何が……」

七つの剣が、背後から飛翔してきた。そして、その剣は２Ｖの身体を貫いてから、塵のように消えた。マナで構成された剣だったのだ。森林のマナを遠距離まで飛ばし、そこまでの威力を維持できる魔術師など、そうはいない。

リリィは剣が飛んできた方向を見て、驚愕した。

優雅に歩いてきたのは、有栖である。

「……有栖……」

「ねえ、かわいそうじゃありませんか。本人が死にたがっていたようなものですよ？　だって、長い間誰にも話さずに、暗いところにいたんですから。最後くらい、良い夢を見せてあげなければ」

加奈子が２Ｖに歩み寄る。

２Ｖはまだ意識があった。

「き……加奈子様……」

うめく２Ｖに、加奈子は口づけをした。

加奈子の美しい顔の額から頬（ほお）にかけて、血が流れ落ちる。

しかし、加奈子は微笑（ほほえ）みを絶やさず、慈愛（じあい）に満ちた表情で２Ｖに向いていた。

「かわいそうな人。あなたも私のようになりたかったのでしょう？　その望みは最後に叶（かな）いましたか？

それならば、良い夢のまま殺してあげましょう」

加奈子は至近距離（きょり）からマナの剣を２Ｖの心臓に打ち込んだ。

２Ｖは痙攣（けいれん）した。

「そ、それで良いのですか……？」

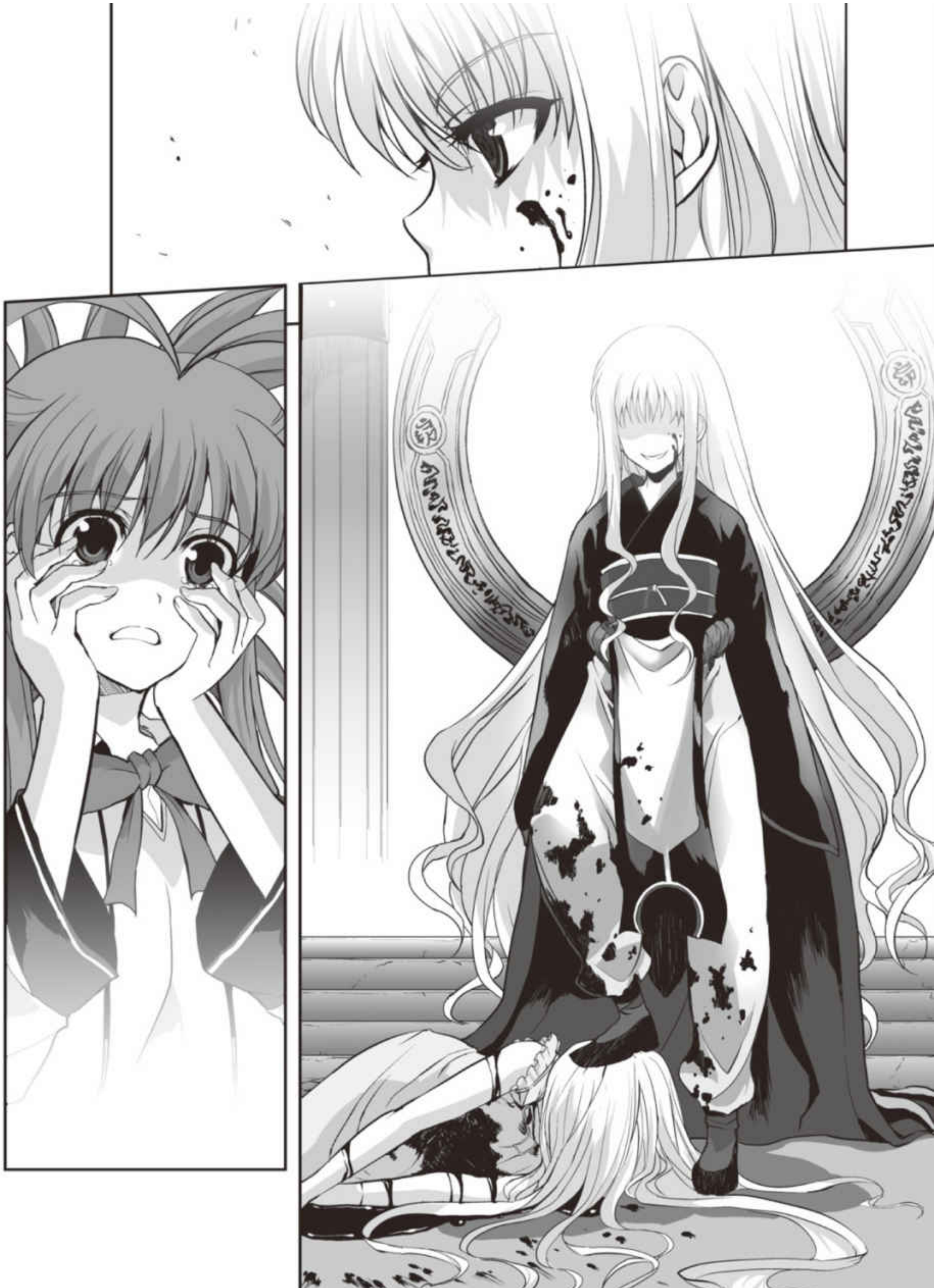
リリィは思わず聞く。

全身を血に染めた加奈子は、微笑みながら２Ｖの、腹にマナの剣で貫かれた傷口に右手を突っ込んだ。そして、しばらく右手を動かし、探（さぐ）り取った感触から、２Ｖの体から、ずるりと抜き出す。

「か……加奈子……様」

リリィは絶句した。

天照大御神は何もおかしいことはしていない、とでも言いたげに首をかしげると、抜き取った魔力の塊を手に持ち、口に運ぶ。
それを食べ始めた。
「あら、大きな苺みたい」
「な、なぜ……」
後ずさるリリィに、天照大御神は優しく笑いかけた。
「彼の持つマナを吸い込ませていただいたのですよ。だって、本来私が使えるべきものが、彼の方に行ってしまっていたんですもの。八咫鏡の力は、他人の能力を自分に移す術ですよ」
「それを、食べたということは……」
リリィは額から汗を流す。
「そうですよ。その力を獲得したので、彼がやってしまったことの責任を取ろうかと思います。ゼロは私の名の下で働いていただきます。今年の祭りかで私による政を復活させましょう」
天照大御神はそう宣言した。
「なん……だと……」
リリィは言葉を失った。
「ゼロ、そして魔王が私のものになれば、神の体は完全に取り戻されます。私の名の下に、皆が幸せに暮らせる世界が訪れるのです」



弥勒菩薩はそう言った。
そこに、声が響いてきた。
「違う……！　細かいことはわかんないけど、なんか違う！」
けながら突っ立っていた。
「あのお方はそのような罪悪感はよしとしませんわ。考え続けることにだけ意味があるとお考えになります。つまり、あなたは間違っている」
不二子もそこにいた。
復活した阿弥陀如来と閻魔大王に送り込まれてきたのだ。
弥勒菩薩はそう言われても、笑みを絶さなかった。
しかし、血まみれの体で、機械と共に死刑を宣告した。
「それならば、魔王共に死んでいただくことにしましょう」
。
その頃、般若の外は既にピークに達していた。
阿弥陀如来は空から姿を消していたが、人々の恐怖はあまりに迷い惑い、復活した飛翔魔法や、可能で扱えるようになった
で般若から逃げようと必死になっていたからだ。

そんな中、淑恵、絢子、けいすは殿を担当していた。復活した絢子の脚力で、淑恵を抱えて壁から壁へと跳ねながら走る。けいすもそれに続いた。

ゆう子は降りてきたヒロシに付き従っている。またエネルギー補給用に同行されたらしいから、ゆう子を連れて運ぶくらいのことはできるだろう。

「ねえ、あれはどういうことなの？」

淑恵が聞いた。

あれ、というのは、絢子の先ほどの行動のことだ。まだつきあいの浅い淑恵には不可解である。どうしてあのような行動をとったのか、いまいち理屈としてわかっていなかったのだ。

「わざとみんなの恨みを買ったんだよ。そういう奴」

絢子が言った。

「恨みを買ってどうするの？　それで何かいいことがあるならいいけど……」

「あいつはそういう奴なんだ。自分の負の感情を抱え込んで、それでみんなを助けようとしているんだ。あいつのあの悪態って、千葉にもわかったよ。あいつは、百合魔王うんぬんの言い争いを緩和するつもりなんだ」

絢子が言った。その表情は熱っぽく、その目は彼女らしい生気を取り戻していた。

「となると、戦闘能力ゼロを倒し、魔王軍に楯突く……ってことか。ふぉおお！　絢子が心配してたけど、面白くなってきちゃったねえ！」

淑恵が笑う。そして、抱き上げられたまま、絢子の顔を見返した。

「……なんだ？」
それに気づいた綺羅が聞く。
汐耶がにやりとした。
「いやぁ、おねいさん、相変わらず惚（ぼ）れまくりだねぇ。あんなのに興味持っちゃうと大変だよぉ？」
「ばっ馬鹿！、今そんな時じゃないだろう！」
「はいはい。じゃ、まぁ、お互（たが）い興味の無い男のために火を上げうちましょ」
汐耶はへらへらと笑った。

。

「2Vの奴（やつ）、とうとう死んだか」
帝都（ていと）の中心部から離れた路（と）傍にあった地下倉庫で、肘（ひじ）を突（つ）いてパイプを吹かしていた賢人（けんと）は、トレスしていたマナの乱れを感じてため息をついた。
「奴のおかげでかかっていた魔術（まじゅつ）のリミッターも外れた。だが、モラルなく魔術を使う時代の到来（とうらい）か。さて、どちらの陣営（じんえい）に味方するのがいいのかな……」
賢人はパイプをくわえたまま車に乗り込んだ。

「望一郎の旦那はこういう状況も予測不可能と考慮していたはず。ゼロのボディやあのスーツだけでなく、また何か別の異物を探してみないといけないか……」

――緊張かつての最強の傭兵と呼ばれた男コードネームＵＳＤはつぶやいた。

あとがき

毎度ありがとうございます。水城正太郎です。

さてもう四冊目でございます、今回中編でもいうか、新章前編というか、そのような感じでお届けい
たしております。まだの方は一巻から読んでいただければ幸いです。
今回、書き手としても新鮮さを感じられる展開というか、いろいろとキャラクターに引っ張り回されはじめて
おります。なにやら次巻などどうかんどうかん待ちそうです。

そして今回は、なんとアニメ化のおしらせでございます。
新刊をお買い求めの方は、帯にある通り、四月よりチバテレビほかUHF局にて放送開始予定です。ご存じの通りUHF局とい
うのは「なんでもあり」ですので、かなりの無茶が期待できるものとお考えくださいませ。
メインスタッフは、監督に渡部高志様、メインキャラクターデザイン・総作画監督に小林利
充様、シリーズ構成・脚本に吉岡たかを様、脚本に赤星政尚様です！　超ベテランの布陣で「わくわくする
ぜひの作品では出てきそうにないですが、あえて見所ポイントを解説させていただくならば「の
の悪ふざけ」ということになるでしょう。皆さんにお会いしてお話させていただきました

が、超ベテランの実力があるのに、なにげない一言から実にギラギラしたものが感じられました。毎
しらの、嬉しい裏切りをしてくれるものに違いありません！　ご期待ください。というか
おいらがいちばん期待しています。

もちろんドラマCD版株式会社トニクス様より発売です。声優様アニメ版と変わってしまいましたが
舞台演劇ではよくあるダブルキャストだ！　と考え、脳内で演技合戦を楽しみましょう。こ
れがなかなか癖になるのですよ。

そして伊藤宗一さんのコミック版チャンピオンRED様で好評連載中です。伊藤さんのガ
ンガン突っ走ると宣言をお聞きしましたので、さらにやってくれるものと信じております。い
や、最近マジですごいですよ。

最後に謝辞を……っと、スペースがない。関係者の皆様、読者の皆様のご支援でここまで来れたことに感謝を。これ
からもよろしくお願いいたします。まだまだ楽しめそうですぜ！

◆ご意見、ご感想をお寄せください。……ファンレターのあて先◆

〒151−0053
東京都渋谷区代々木2−15−8
(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部気付
[illegible]

PROFILE

水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。
最近、無類のいじられ下手であることに気づきました。自らのキャラ作りには困るんだろうけど、別段、積極的にいじられたいわけじゃない。それがいかんのか。
あ、公開ツイッターをはじめたので見てくださいませ。
https://twitter.com/S_Mizuki

伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。
＜一言＞
アニメ化決定おめでとうございます。
僕にとっても初めての体験なので、とても楽しみです。
読者のみなさんと一緒にドキドキしながら放映を待ちたいと思います。

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王 ACT 8

2009年12月1日　初版発行

著者—— 水城正太郎

カバーイラスト—— 伊藤宗一　　装丁—— 西村 大

発行者—松下大介
発行所—株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8